

【博士論文】

日本語教育の視点から見る
日本語の「の」と中国語の「的」

—— 中国語母語日本語学習者の「の」の誤用を中心に ——

毛 莉

白百合女子大学大学院言語・文学専攻
日本語教育

目 次

第 1 章 序論	5
1.1 研究の目的	5
1.2 研究の方法	10
1.2.1 教科書の調査	10
1.2.2 アンケート調査	13
1.3 本研究の構成	16
1.4 先行研究	17
1.4.1 「の」に関するもの	17
1.4.1.1 日本語教育文法に見る「の」	17
1.4.1.2 「の」の過剰使用について	19
1.4.1.3 先行研究における問題点	21
1.4.2 「的」に関するもの	22
1.4.2.1 「的」の用法の概括について	22
1.4.2.2 「的」の分類と有無について	26
1.4.3 「の」と「的」の対照研究に関するもの	32
1.4.3.1 「の」と「的」の対応・不対応について	32
1.4.3.2 先行研究で触れられていない点	34
第 2 章 「名詞＋（の/的）＋名詞」を中心に	36
2.1 問題提起	36
2.2 「の」と「的」に関する対照研究	37
2.3 教科書における「の」の提示	40
2.3.1 中国で作成された教科書	40
2.3.2 日本で作成された教科書	42
2.4 中日の辞書における「の」と「的」	45
2.4.1 中国語の辞書における「的」の説明	46
2.4.2 日本語の辞書における「の」の説明	47

2.4.3	中日の辞書に見る「的」と「の」	48
2.4.4	中日における辞書に提示される「的」と「の」の共通点と相違点	49
2.4.4.1	「的」に関するまとめ	49
2.4.4.2	「の」に関するまとめ	50
2.4.4.3	「の」と「的」の共通点について	51
2.4.4.4	「の」と「的」の相違点について	51
2.5	中国語と日本語の対訳に現れる「の」と「的」	52
2.5.1	「の」の必須に対し、「的」の準必須	53
2.5.1.1	N1 (人) + N2 (物)	53
2.5.1.2	N1 (人) + N2 (抽象名詞)	54
2.5.1.3	N1 (人の体) + N2 (N1 の部分)	55
2.5.1.4	N1 (時・場所) + N2 (人・物・組織集団・場所・抽象名詞)	56
2.5.2	「の」の必須に対し、「的」の省略	57
2.5.2.1	N1 (人) + N2 (人：人間関係を表す)	57
2.5.2.2	N1 (人) + N2 (組織集団)	58
2.5.2.3	N1 (組織集団) + N2 (人：職業も含む・物)	59
2.5.2.4	N1 (動物・物・場所) + N2 (N1 の部分)	60
2.5.2.5	N1 (内容・固有名・材料・抽象名詞など) + N2 (物・抽象名詞など)	61
2.5.3	「の」の必須に対し、「的」の不要	62
2.5.3.1	N1 (数量・序数) + N2 (人・物・時・場所・組織集団・抽象名詞)	62
2.5.3.2	N1 (人：N2 と同一関係) + N2 (人)	63
2.5.3.3	N1 (場所・物) + N2 (N1 との位置関係)	64
2.5.4	「の」の連続に対し、「的」の連続回避	65
2.6	まとめ	66
第3章	「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」	69
3.1	「数量詞+の+名詞」に関する研究	69
3.2	アンケート調査から見る「数量詞+の+名詞」	72
3.3	中国の大学で使用されている教科書から見る「数量詞+の+名詞」	75
3.4	「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」の違い	78

3.4.1 会話場面での違い	78
3.4.2 表す意味の違い	81
3.5 まとめ	83
第4章 日本語教育における同格の「の」の扱い	84
4.1 はじめに	84
4.2 同格の定義について	86
4.3 教科書に提示される同格	89
4.4 同格の形式	92
4.4.1 「N1 の N2」	93
4.4.2 「N1 という N2」	96
4.4.3 「N1N2」	97
4.4.4 「N1 の N2」と「N1N2」	98
4.5 終わりに	106
第5章 「名詞」と「ナ形容詞」を中心に	108
5.1 はじめに	108
5.2 活用から見る「名詞」と「ナ形容詞」	111
5.3 教科書に現れる「ナ形容詞」	113
5.4 「名詞」と「ナ形容詞」の境界線	116
5.4.1 「ナ形容詞」も「名詞」も両方の品詞を持つ語	118
5.4.2 「ナ形容詞」の名詞的扱い方について	119
5.4.3 「名詞」のナ形容詞的扱い方について	121
5.5 終わりに	122
第6章 「の」から「が」「を」への誤用	125
6.1 はじめに	125
6.2 「が」「を」から「の」に	126
6.3 「の」から「が」への誤用について	127
6.3.1 アンケートから見る誤用	127

6.3.2 「の」より「が」を好む	128
6.3.3 教科書の説明不足	130
6.3.4 「動詞連体形＋名詞」と「動詞連用形＋名詞」	132
6.4 「の」から「を」への誤用について	134
6.4.1 アンケート調査のデータから以下のことが考えられる	134
6.4.2 「～を他動詞/他サ変動詞」から見る誤用の可能性	136
6.4.3 「動詞連用形」から「名詞」に	138
6.4.4 「動詞連用形」に関連する複合語	138
6.5 終わりに	141
第7章 「N1 のN2 の…のN」の形から見る「の」と「的」	142
7.1 はじめに	142
7.2 教科書における「の」が連続する場合の説明	143
7.3 アンケート調査のデータに見る「の」と「的」	144
7.4 日中相互翻訳から見る「の」と「的」の違い	150
7.4.1 日本語の「の」が複数出の場合に、中国語の「的」は中心語の前につく	150
7.4.2 日本語の「の」が複数出の場合に、中国語の「的」は限定語の後にくる	153
7.4.3 日本語の「の」が複数出の場合に、中国語の「的」は使用されない	155
7.5 中国語母語日本語学習者が「の」の連続使用を避ける傾向	157
7.6 終わりに	158
第8章 終章	160
8.1 誤用の少ない部分について	160
8.2 本論文のまとめ	166
8.3 日本語教育への示唆	171
8.4 本論文の問題点と今後の課題	174
参考文献	176
添付資料	187

第1章 序 論

本研究は連体助詞¹「の」に関わる中国語母語日本語学習者の誤用について明らかにするものである。中国語母語日本語学習者の「の」の習得が困難となっている原因の一つは、教科書の提示に問題があるのではないかと考えられる。本研究では日本と中国で作成された教科書を分析し、中国語母語日本語学習者を対象にし、「の」の運用について実態調査し、現状の把握と課題の抽出を行う。そして、日本語教育現場での「の」の指導法を検討する。

1.1 研究の目的

中国語母語日本語学習者における日本語の助詞の習得については、様々な研究が行われてきた。助詞は言語として日本語を特色づける重要な特徴の一つであり、助詞が理解できていないと、構文や文意をとらえることが困難となる。助詞は文型を形成する主要な要素だからである²。日本語には助詞が必須であるが、中国語には助詞がなくても文が成立する。しかし、中国語には全く助詞がないわけではない。古くから日本語の助詞の「の」は中国語の「的」に類似しているとよく言われている。例えば、「私の本/我的书」、「おばあさんの笑顔/外婆的笑脸」、「小象の鼻/小象的鼻子」、「六時五十分のフェリー/六点五十分の轮渡」、「李さんの妹/小李的妹妹」、「孟社長の映画会社/孟老板的电影公司」、「世界観の問題/世界观的问题」のように、これらの例文では「の」と「的」が対応していることがわかる。つまり中国語の「的」も助詞の働きをしているのである。だが後述（P45～52の2.4を参照）のように、日中における文法解釈においては、日本語の「の」は意義と用法により細かく格助詞、準体助詞、終助詞、並列助詞、間投助詞に分かれているのに対し、中国語の「的」は構造助詞³・語気助詞と呼ばれ、日本語のように細かく分類されていないことがわかる。それ故、日本語学習者が日本語を習得する過程には「の」を「的」と同

¹ 助詞「の」について格助詞・連体助詞・準体助詞などがあるが、本研究では動詞・形容詞・名詞の後にくる「の」であり、動詞・形容詞・名詞の連体修飾つまり名詞を修飾する場合であるため、「連体助詞」と呼ぶ。

² 森田良行（1990）『日本語学と日本語教育』凡人社。

³ 中国語では「的」が虚詞（実詞と反対で、語として完全な意味を持っていなく、文法役割を果たす語を指す。）に属する。また虚詞は副詞、介詞、連詞、助詞、嘆詞、象声詞（擬音語）に分かれる。「的」がその下の助詞に入り、文法役割で構造助詞と語気助詞と二つに分類されている。本研究では「的」は動詞、形容詞、名詞の後に付き、名詞を修飾する場合について分析するため、「構造助詞」と呼ぶ。

じような使い方で混用するケースがしばしば見られる。

中国人は日本語の「の」と「的」の関係をどのように考えているのか下記の2枚の写真から見てみる。



写真1



写真2

上記の写真1の「鮮の毎日」と写真2の「優の良品」は、どこの国の製品と店だと思うだろうか。中国人が見れば、すぐその意味がわかるだろう。これは日本語ではなく、中国語と「の」の合成に過ぎない。つまり「中製和語」(中国人がつくった日本語)である。写真1は中国で有名なメーカーが出したジュースであり、写真2は日本のコンビニエンスストア・ローソンに似たチェーン店の名前である。ここでは「の」は「的」に当たると思われており、このような商品の名前から店の看板まで、「の」が用いられる場合が多い。

なぜならば、前述のように「的」と「の」は全く同じ役割を果たし、対応しているからである。中国では、日本語の「の」は中国語の「的」、中国語の「的」は日本語の「の」と同じ機能をもつという印象が非常に強いのである。中国語には助詞はないが、それに相当する「的」があると思われている。「の」がここまで中国語の中に浸透しており、それに相当する中国語の「的」もあるため、中国語母語日本語学習者の「の」の習得は容易ではないかと思われる。実際には、そうでもないようである。

では、中国語母語日本語学習者にとって「の」と「的」が近似していることで、どのような誤用が見られるのかを分類してみる。

日本語の「の」の誤用については、毛 (2014)⁴では「の」と「的」の前後の語をそれぞれ修飾語と被修飾語に分け、詳しく分類し、それを「の」の使用状況により以下の四つの形、すなわち、「の」の過使用、「の」の任意使用、「の」の不使用、「の」の使用回避にまとめた。

I. 「の」の過使用

(動詞・イ形容詞・ナ形容詞の連体形につく「の」の場合)

例：(1) 美丽的 <u>风景</u>	*美しい <u>の</u> 景色
(2) 可爱的小 <u>熊</u>	*可愛い <u>の</u> 小熊
(3) 干净 <u>的</u> 教室	*綺麗 <u>の</u> 教室 ⁵
(4) 他做 <u>的</u> 蛋糕	*彼が作る <u>の</u> ケーキ
(5) 爸爸买 <u>的</u> 礼物	*父が買った <u>の</u> プレゼント

例文の修飾部に注目してみると、「美しい」、「可愛い」、「綺麗」、「作る」、「買った」この五つの語の品詞がそれぞれイ形容詞・ナ形容詞・動詞であることがわかる。今までの研

⁴ 毛莉 (2014) 「中国人日本語学習者における「の」の誤用について——「名詞＋(の/的)＋名詞を中心に——」『国文白百合』第45号, pp. 88-104.

⁵ Iの「の」の過使用の「ナ形容詞」の例「*綺麗の教室」について、「イ形容詞」・「ナ形容詞」・「動詞」は名詞を修飾する場合、連体修飾で「美しい景色」・「綺麗な教室」・「作るケーキ」となる。そうすると、中国語母語日本語学習者は「*美しいの景色」・「*綺麗なの教室」・「*作るのケーキ」のように間違えるはずだが、「ナ形容詞」だけは違って「*綺麗の教室」という誤用が出ている。これは教科書の提示に問題があると考えられる。例えば、『総合日語』の単語表 P72 に出ているナ形容詞「複雑」を例に挙げると、複雑/<形Ⅱ>/复杂(的)というふうに提示されている。また、P70のナ形容詞「立派」の辞書形についても「立派(語幹)」というふうに提示されている。これらのような教科書の提示の仕方は日本語学習者を混乱させ、「*綺麗の教室」のような誤用を招きやすいと考えられる。

究では奥野・張麟声 (P19～20 の 1.4.1.2 を参照) 等は主に形容詞が名詞を修飾するとき「の」をつけるのを過剰使用としている。本研究においては、I のようにイ形容詞・ナ形容詞・動詞に間違っ「の」をつけることを「過使用」と呼ぶ。つまり修飾部がイ形容詞・ナ形容詞・動詞で名詞を修飾する場合である。中国語では動詞と形容詞が名詞を修飾し限定を示す場合、「的」がつくのに対し、日本語では「の」はつかないため誤用が生じるとみられる。

II. 「の」の任意使用⁶

(「名詞+の+名詞」の場合)

例：(6) 三仙姑 <u>的</u> 香案	三仙姑 <u>の</u> 香づくえ
(7) 我 ϕ 房间…	僕 <u>の</u> 部屋…
(8) 他 <u>的</u> 青春	彼 <u>の</u> 青春
(9) 我 ϕ 语调…	僕 <u>の</u> 口調…
(10) 我 ϕ 朋友	私 <u>の</u> 友達
(11) 小王 ϕ 公司	王さん <u>の</u> 会社
(12) 世界观 ϕ 问题	世界観 <u>の</u> 問題

名詞が名詞を修飾するとき、「の」が必須であるのに対し、「的」が準必須であったり、省略であったりする場合に当たる (本稿 P53～62 を参照)。例 (6) を見てみると、語と語の結合で所有を表す場合、日本語の「の」も中国語の「的」もつくが、中国語では例 (7) のように文の中では「的」が省略されることもある。例 (8)、(9) も同様である。つまり「の」の必須に対し、「的」が準必須である。

また例 (10)、(11)、(12) のように人間関係、所属、内容などを表す場合、日本語の「の」が必須であるのに対し、中国語は文脈により「的」が省略される傾向がある。

以上のように中国語の「的」が準必須であったり省略であったりして、「の」の必須に対し「的」が任意的である。そのため「の」の使用にも影響し、「の」の任意使用となる

⁶ 「火车票/列車の切符」、「婚姻自由/婚姻の自由」のような中国語言語習慣では一語となっている語について、日本語では「の」がつかないと非文となるが、中国語では「的」を入れると不自然になる。「火车票」、「婚姻自由」のような言語習慣で一語となる組み合わせを構造上において本研究の意図と異なるため、本研究からははずす。

のである。実際のアンケート調査にも「*田中さん妹」、「*私人生」のような誤用が出ていることがわかった。

Ⅲ. 「の」の不使用

(「名詞+の+名詞」の場合)

- | | |
|-------------|------------------|
| 例：(13) 一个孩子 | 一人 <u>の</u> 少年 |
| (14) 亲戚叔叔 | 亲戚 <u>の</u> 叔父さん |
| (15) 石阶上 | 石段 <u>の</u> 上 |

以上の例 (13)、(14)、(15) のような数量詞が名詞を修飾する場合、同格⁷を表わす場合、位置関係を表す場合、中国語では「的」がつかないが、日本語の場合は名詞が名詞を修飾するので、「の」がつかないと非文になる(本稿 P62~65 を参照)。今回実施したアンケート調査(後述)により、日本語の「の」の必須に対し、中国語の「的」の不要の場合の誤用率が高いことがわかった。中国語母語日本語学習者が以上のような状況では「的」が用いられないため、日本語を使うとき「の」を抜かしてしまうケースが多くみられる。

Ⅳ. 「の」の使用回避

(「名詞+の+名詞+の+名詞…名詞」のような「の」が複数ある場合)

- | | |
|-----------------------------|---|
| 例：(16) 自己φ白衬衣 <u>的</u> 袖口 | 自分 <u>の</u> シャツ <u>の</u> 白い袖口 |
| (17) 他φ背上 <u>的</u> 脏东西 | 彼 <u>の</u> 肩 <u>の</u> 汚れ |
| (18) 外国男女φ讲φ恋爱的 <u>的</u> 插图 | 外国人 <u>の</u> ラブシーンの <u>の</u> 場面の <u>の</u> さし絵 |
| (19) 小柳巷 <u>的</u> 巩爱华φ家 | 小柳巷 <u>の</u> 鞏愛華 <u>の</u> 家 |

毛(2015)⁸で述べたが、(本稿 P65~P66、第7章を参照)日本語では修飾部が形容詞

⁷ 同格について第4章で詳しく論じる。「親戚の叔父さん」のような「の」がつく以外、「われわれ日本人」、「芙蓉という花」のような同格を表わす形式もある。しかし、同格の場合、中国語では「的」を用いないため、「親戚の叔父さん」の「の」を抜かず誤用が頻出する。本研究は同格を「の」の不使用に入れることにする。

⁸ 毛莉(2015)「日本語教育の視点から見る中国語の「的」と日本語の「の」——「N1のN2の…のN」を中心に——」『日本語教育方法研究会誌』学習院大学第22号, pp.28-29。

と動詞だと「の」がつかないが、名詞の場合「の」がつく。さらに名詞がいくつか連続しても、必ずすべての名詞と名詞の間に「の」をつけなければならない。しかし、中国語では、いくつか名詞が結合するとき、その名詞の間に「的」が全部つくのではなく、文脈により省略する傾向がみられる。中国語では「的」を多くつけると不自然になるため、中国語母語日本語学習者はできるだけ少なくしようとするのが一般的である。その結果、中国語の影響により「の」が連続する場合、つけなければならないところを抜かしてしまう傾向がある。

以上のように、中国語を日本語に訳すとき、中国語母語日本語学習者は母語の影響を受け、「的」と混用することがわかった。しかし、日本語教育においてすべての誤用が母語の影響を受けているといえるだろうか。それだけではなく、教科書の提示にも問題があるのではないかと考える。

1.2 研究の方法

本研究は、中国語母語日本語学習者に見られる「の」の誤用について、母語の影響を認め、日本語の教科書にも問題あるのではないかと考え日本語教育の立場からその誤用の原因を追究していきたい。そして、運用面より実証的に考察していく。具体的には、中国の大学で日本語を専攻する学習者を対象として、「の」の習得状況を知るためのアンケート調査を行う。

1.2.1 教科書⁹の調査

中日両国で作成された日本語の教科書に「の」がどのように提示されているのかを考察する。そして「的」がどのように解釈されているのか、「の」と「的」の関係を比較する。教科書の「の」の説明や例文の出し方などが適切であるかどうか、また日本語学習者にどのような影響を与えるのか、どのように理解させようとしているのかを知ることを目的とする。

日本語学習者が「の」についてどの程度を習得しているのかを把握するために、大学で使用されている教科書の内容を調べる必要があると考える。教科書において、「の」の提

⁹ 教科書について中国側はアンケート調査で主に使用される三種類の教科書を取り上げた。日本側は代表的な教科書を選んだ。

出順（あるいは提出課）および教科書の「の」に関する解説・例文の妥当性・練習問題なども調べる。初級の日本語学習者にとっては、教科書に書かれてる解説と教師による口頭の説明が唯一の勉強する手段となる。初級の学習者は、中・上級者と比べて、より教科書の解説と教師の説明に頼っている傾向があると予想できる。

以下の表 1 は毛（2014）によるものである。今まで中日両国で主に使用されている教科書に助詞の「の」に関して、どのような説明がされているかをまとめたものである。教科書に関する分析はさらにアンケート調査のデータを基にし、次の第 3 章、第 4 章、第 5 章、第 6 章、第 7 章で行う。

出版	教科書	提出課	「の」の説明	「的」との関係	練習
中国	新編日語 (2009年)	L2、L13	①格助詞：所属、 所有、時間、状態 ②準体助詞	「的」に相当、訳 さない場合もある	なし
	総合日語 (2009年)	L5	①所属、属性など ②同格	「的」に相当	あり
	中日交流 標準日本語 (2010年)	L1、L2、 L21	①助詞所属、内容 ②同格	「的」に相当	あり
日本	初級日本語 ¹⁰ (1998年)	L1、L2	なし	なし	あり
	日本語初歩 ¹¹ (2000年)	L1、L2	なし	なし	あり
	みんなの日 本語 ¹² (別冊 中国語版解 説) (2003年)	L1、L2、 L3、L10	属性、所属、産地、 位置関係	「的」と類似	あり

表 1

表 1 で示されているように、教科書では、「の」に関する解説の部分は「的」に相当するということに説明されていることがほとんどであり、中国語母語日本語学習者にとっては、母語の影響だけではなく、教科書の提示にも問題があると考えられる。詳しい説明がないと学習者を混乱させるであろう。本研究では日本語教育の視点から、日本語の「の」を中国語の「的」と関連させつつ、連体修飾を中心に、これらの問題点を考え、日本語学

¹⁰ 『初級日本語』の新装改訂版は 2010 年までで、続けて使用されている。文法シラバスはそのままである。

¹¹ 『日本語初歩』の改訂版は 2000 年までで、続けて使用されている。

¹² 『みんなの日本語』の改訂版は 2012 年までで、続けて使用されている。文法シラバスはそのままである。

習者の誤用の原因および助詞の「の」を習得するための教授法を探っていく。

1.2.2 アンケート調査

運用面で、日本語学習者は教科書に書かれている「の」の説明や例文・練習などが実際にどこまで活かされているのかを把握するため、日本語の「の」を中国語の「的」と関連させつつアンケート調査を実施する。

調査期間：2014年4月～10月（本調査の実施期間）

調査対象：中国の大学¹³で日本語を専攻する学習者であり、合計1050人である。アンケートの中で有効回答数は968、無効回答数¹⁴は82である。有効回答数の内訳は、一年生314人、二年生234人、三年生200人、四年生220人である。

調査方法：①予備調査を行う。アンケートの質問について日本語学習者に答えてもらう形で行った。アンケートの質問の内容は、毛(2014)では「の」と「的」との対応・非対応について、12種類¹⁵¹⁶（第2章を参照）を分類し、それをもとに質問用紙を作成した。このアンケートの用いた12種類の「の」は、基本的に張麟声(2009)の分類方法を用いた。張は日本語の「の」と中国語の「的」を中心に、名詞にかかる連体修飾構造の日中対照研究を行い、「の」と「的」の対応・非対応（P32～34の1.4.3.1を参照）について、修飾部と

¹³ 協力していただいた大学は以下の通りである。

北方民族大学、寧夏大学、天津外国語大学、広西大学、広東外語大学、東北大学、東北財経大学、西安交通大学、上海外国語大学、北京外国語大学、山東大学、湖南大学である。

¹⁴ アンケート用紙の問題を書くとき、質問を理解できず、間違った答え方をする場合、アンケート用紙の5%以上を記入しない場合、真面目に答えていなかったと判断される場合は無効回答とみなす。

¹⁵ アンケート調査の基になる12種類の「の」の関係は以下の通りである：

1. N1（人）+N2（物）
2. N1（人）+N2（抽象名詞）
3. N1（人の体）+N2（N1の部分）
4. N1（時・場所）+N2（人・物・組織集団・場所・抽象名詞）
5. N1（人）+N2（人：人間関係を表す）
6. N1（人）+N2（組織集団）
7. N1（組織集団）+N2（人：職業も含む・物）
8. N1（動物・物・場所）+N2（N1の部分）
9. N1（内容・固有名・材料・抽象名詞など）+N2（物・抽象名詞など）
10. N1（数量）+N2（人・物・時・場所・組織集団・抽象名詞）
11. N1（人；N2と同一関係）+N2（人）
12. N1（場所・物）+N2（N1との位置関係）

¹⁶ 論文には12種類に分けたが、今回のアンケート調査を行った際、13. 形容詞+名詞 14. その他（が・を格の「の」）のような学習者が間違えやすい形容詞及び（が・を格）を考慮して、アンケート問題に13と14を加えた。

ヘッド（被修飾部）の意味関係を 12 ケースに分けている。この分類を実際に検証した結果、あらゆるケースを網羅できるものと考えた。ただ、張の分類に用いる用語が抽象的であるため、日本語教育の現場では、より理解しやすくしたほうが良いと考え、具体的な語を用いることとした。さらに張の分類にはない「青春・笑顔」のような抽象的な名詞や複数の「の」については、必要と考え、補充することとした。

北方民族大学の日本語学習者の 50 人を対象とし、先生方の立合いのもとに記入してもらったかで予備調査を実施し、データを統計した。結果から以下のような問題があり、アンケート調査を作り直した。

★第二部分の第一問 5. 「この男に出会ったことが、私（ ）人生（ ）一番（ ）悲劇です」の質問の「一番（ ）悲劇」の括弧に「の」を入れる学習者が 1 人で「×」を入れる学習者が 49 人であった。「一番」を副詞として扱う可能性が高いと考えられ、副詞は今回の調査内容外のため、アンケート調査の質問から外した。

★第三問の日本語の文を中国語に訳す質問には（第 7 章を参照）「の」が連続する場合、前後の名詞の関係性には言及しないため、6 問を 3 問に減らした。

②本調査を行う。（調査内容は予備調査後修正した内容である）調査対象の大学の日本語の先生にデータを送り、プリントアウトしてもらい、授業で先生方の立合いのもとに 15 分以内に答えてもらう形をとった。

調査内容：アンケートは、二つの部分からなる。

第一部は学習時間・日本語レベル・使用教科書・出身地である。この部分は日本語学習者が「の」を習得するのに、日本語を勉強する時間・教科書の影響や方言の影響などに関係するかどうかを確認するためである。

第二部は大きく四問を設定する。

第一問は 6 題で、括弧に助詞を入れてもらう形式を採る。要らない場合、×を入れてもらう。これを通して、「名詞＋の＋名詞」の連体修飾に対して、修飾部と被修飾部がそれぞれ異なる場合、あるいは「の」が連続する場合において、日本語学習者が正確に「の」を入れられるかどうかを見る。それぞ

れどのような項目の「の」を習得できているのか、またどのような項目を習得できていないのかを目的とする。この部分の問題設定について、「…N1() N2() N3…」の形で、文の中にある「名詞+の+名詞」の誤用率の高い部分を取り上げ、考察するのが目的であり、「N1() N2」または「N2() N3」と個々の項目に分けて調査する方法をとらなかった。12種類の「の」および「イ形容詞」、「が」「を」に対応する項目は以下のようなものである(以下の14項目の名詞の前後関係について注15と16を参照)。

- | | | |
|---------------|---|------------|
| 1. 妹の鞆 | 2. 私の人生 | 3. 田中さんの腕 |
| 4. 腕の中の赤ちゃん | 5. 田中さんの妹 | 6. 田中さんの会社 |
| 7. 会社の同僚 | 8. 村の入口 | 9. 人生の悲劇 |
| 10. 一本の木 | 11. 同僚の鈴木さん | 12. 門の前 |
| 13. 赤い鞆→*赤いの鞆 | 14. 赤ちゃんの泣き声→*赤ちゃんが泣き声/郵便袋の荷作りをする→*郵便袋を荷作りをする | |

第二問は5題で、中国語の文を日本語に訳す課題である。この部分を通して、学習者が中国語を日本語に訳す場合、助詞の「の」をどういうふうに扱い、正確に「的」がついているところあるいはついていないところを、「の」に訳すことができるかどうかを調査の目的である。12種類の「の」および「ナ形容詞」を入れて、13項目は以下の通りである。(13番について、「有名な人」を「有名の人」に訳した場合、誤用とみなす。)

- | | | |
|----------------|-----------|-----------|
| 1. 私の部屋 | 2. 母の青春 | 3. 母の手 |
| 4. 有楽町の田中さん | 5. 田中さんの弟 | 6. 私達の学校 |
| 7. 人民大学の日本語の先生 | 8. 部屋の窓 | 9. 日本語の先生 |
| 10. 二冊の本 | 11. 弟の太郎 | 12. 窓の上 |
| 13. 有名な人 | | |

第三問は3題で、日本語の文を中国語に訳す課題である。毛(2015)で述べたように、「の」が複数ある場合に、「的」が中心語(被修飾部)の前につく

か、限定語（修飾部）の後にくるか、使用されないかである。学習者は「の」が連続する場合、日本語を中国語に訳すときに「の」をそのまま「的」にするか、また「の」を「的」にしないかを調べ、「の」という助詞を使うとき、どのような傾向が見られるかを分析する。

第四問は1題で、下線の部分の日本語訳について、適切だと思う項目をA、B、Cから一つ選んでもらう問題である。一つの中国語の文に対し、三つのパターンの日本語訳を用意する。「の」が連続して現れる答えAがある（P189の添付資料を参照）。三つの答えからAをどのぐらいの比率で選んでもらえるかをテストし、中国語母語日本語学習者が「の」の連続を使用することを避けるかどうかを考察の目的とする。

アンケート調査のデータを抽出し、次にこれを日本語の教科書と対応させて分析する。この結果をもとに、日本語教育の現場では「の」をどういうふうに教えていけば、効率よく習得させられるのかを提案する。

1.3 本研究の構成

本論文はアンケート調査をもとに、学年別及び「の」の項目別により集計したデータでグラフと図を作成する。そしてグラフと図で説明しながら、その誤用率の高い部分や興味深い誤用の部分を取り上げ、次の各章で分析していく。

本研究は本章を含め、8つの章から構成される。

第1章では、研究の目的と研究の方法を提示した。また日本語の「の」と中国語の「的」に関する先行研究を行う。

第2章では、日本語の「の」と中国語の「的」との対応・不对応について分類し、それぞれ「の」の必須に対し、「的」の過使用、任意使用、不使用、使用回避に分け、アンケート調査の基になる章である。

第3章では、アンケート調査による高い誤用率を出している「数量詞+の+名詞」（「第一問・第二問」の10番目）の部分を取り上げ、「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」

と関連させながら、日本語学習者の誤用の原因を分析していく。

第4章では、「の」の誤用率の高い「同格」（「第一問・第二問」の11番目）を中心に「N1N2」、「N1 という N2」、「N1 の N2」の形式に分け、教科書の説明を分析し、誤用の要因を考察する。

第5章では、典型的な誤用例として研究されてきた「イ形容詞」の誤用率に対し、「ナ形容詞」（第二問の13番目）の誤用率は学習時間の長さがあるのにも関わらず下がらないという傾向が見られ、これも本研究に取り込んでみた。

第6章では、「が」「を」（第一問の14番目）の誤用の部分について、日本語学習者がなぜ「の」を入れるべきところに「が」「を」を入れたか分析する。

第7章では、「名詞+の+名詞」の形だけではなく、「の」が連続する場合（第三問・第四問）、「の」と「的」はどのようになるのかを考察する。

最後に、第8章では、アンケート調査において本論文には言及していない部分に関する説明および本研究の結論と今後の課題について述べる。

1.4 先行研究

1.4.1 「の」に関するもの

1.4.1.1 日本語教育文法に見る「の」

寺村（1992）は、次のように述べている。

「ノ」は「ガ」、「ニ」、「デ」などの助詞とはかなり違った性質のものである。もっとも、「ノ」が他の一般の格助詞と機能の点で異なる性質のものであることが認識されていなかったというのではないが、「ノ」を格助詞というカテゴリーに含めるなら、「格」とは何かということについてのもっと周到な定義が必要であろう。「ノ」を「連体助詞」と呼ぶのは明晰で誤解が少ないが、「ノ」の持つ複雑な機能についてはまだ十分に明らかになっていないとはいえないと、いうものである。

また次のように、「Xノ」の「X」の表す事物が述語を中心として表現される事象の中で、やはり何らかの役割において関係しているという点は否定できない。ただ他の一般の格助詞が、述語と直接関わってその内容を限定しているのとは明らかに異なるのである。「ノ」

のもつ特性は、しかしそれが単に連体的、つまり用言の内容を限定・特定化するのではなく、後続の名詞の内容を限定するのだということだけで終わるのではない。それは、後続の名詞が内容の上で用言的、つまり用言の名詞化したものであるとき、その内容に対して、あるいは「ガ」のような、あるいは「ヲ」のような関係に立っていることを含み得る点にあると、指摘している。

森田（2002）は連体修飾の諸形式において、「A の B」形式は一般に B に視点を置き、B を基準にその属性説明として「A の」を頭に冠するもので、「梅の花」、「庭の花」、「普通の花」、「10 本の花」の類である。これはその他の用言修飾語や副語の場合にもいえることで、「赤い花」、「綺麗な花」、「咲いた花」、「こんな花」と、いずれも被修飾語 B 側に中心がある。“B はどのような状況か？”の答として、B に関する情報を具体的に示し、B の意味を限定する。その点では、客体 B につながる状況として A を判断し、「の」で B に結びつける論理的な意味関係といえよう。本来、意味的に A と B とは結合共起し得る関係にある。内容的には、説明的修飾関係といってよいのではないか。そして、このような論理的な意味関係を「様態修飾（または論理修飾）」と命名しようと述べている。

また、修飾「A の B」形式で成り立つ意味関係を、以下に整理している：

ア、所有主……私の物、僕の花、弟の名前、父の財産、私の故郷、漱石の本

イ、対象……山の知識

ウ、成因……火事の後始末、事故の後遺症

エ、所属・分担……国民の義務、私の番、誰の鬼？、男の意地、女の魅力

オ、所在（ニアル）……銀座の柳、アフリカのライオン、自動車の窓、砂上の楼閣、風
前の灯

カ、主体（ニオケル）……東京の下町、世界の人口、川の流れ、台風の進路

キ、所在の時……正午の時報、除夜の鐘、3 時のおやつ

ク、数値……5 円の切手、8 メートルの深さ、時速 60 キロのスピード

ケ、順序……2 番目の兄、日本第一の名所、最初の試練、最後の審判

コ、数量……3 匹の子豚、1 杯のコーヒー、5 本の指に入る

サ、目的（タメノ）……帰りの切符、迎えの車、自動車のエンジン

シ、名称（トイウ）……日本の国、東京の町

ス、同格（デアル、断定）……弟の次郎、蜜柑のおいしいの、将軍の徳川家光、俳優の

森繁

セ、属性主……次郎の弱虫！、オズの魔法使い、石川五衛門の大泥棒、太郎の一日駅長、

誰の鬼

ソ、形成物・材料……鉄の扉、ゴミの山、金の延べ棒、絹の糸、ガラスの靴

タ、性質・属性……紫の房、

チ、様態・程度……鉄の守り、花の生涯、象牙の塔、日の出の勢い、牛の歩み、露の命

ツ、人指示……紅茶の人、ご入り用の方

テ、時・所指示……食事の前、仕事の合間、駅の向こう、箱の中、草の上、松の木の右

手

ト、事指示……仕事のこととなると目の色が変わる。彼女のことが気になる。商売のこ

とに口を出すな。

続いて、連体修飾の拡大について、体言的概念では、「家の犬の尻尾の毛の中の蚤の糞」と概念限定を幾重にも重ねて指示内容を絞り、事物の状況を具体化・個別化することが可能である。表現形態としてはより複雑化していくわけであると述べている。

ほかに益岡・田窪（1996）、庵（2000）、森山（2008）等は「の」について、文法書で触れている。しかし、日本語教育の文法においてもこれらはほとんど概説的な内容が多く、「の」に関する詳しい説明は見当たらない。

1.4.1.2 「の」の過剰使用について

「の」に関する研究については、主に「の」の過剰使用の指摘を中心にした研究が従来から多くされている。

日本語学習者が「*私は友達と一緒においしいのラーメンを食べました。」のように、「形容詞」が「名詞」を修飾する際に「の」を過剰に挿入したりすることである。このような誤用の多くは中国語母語話者の典型的な誤用であり、母語の干渉であると指摘されることが多い。

奥野（2000・2001・2002・2003・2005）によると、第二言語習得過程における言語転移

17) についての研究がされ、日本語学習者の「の」の過剰使用の要因に関する考察をし、学年の初めと終わりという2時点における発話調査により、初級から中級になると「の」の過剰使用が出現し、正用と混在することを明らかにした。上級になると他の母語話者では「の」の過剰使用による誤用は消滅に向かうが、中国語母語話者は上級になっても「の」の過剰使用が依然として残り、新たに出現する学習者も存在する。また中国語母語話者は他の母語話者と異なり、名詞修飾の修飾部の品詞にかかわらず広範囲に「の」を使用する傾向があることを指摘している。さらに、奥野が発話調査において母語による差が示された上級学習者を対象として、即時的な文法性判断テストを実施し言語転移の可能性を検証した結果、言語転移の作用により中国語母語話者は修飾部の品詞にかかわらず「の」を過剰使用することがわかった。このことから、上級になっても中国語母語話者には「の」の過剰使用が残ったり新たに出現したりする事実は、過程的転移で説明できることを指摘し、「の」の過剰使用に言語転移が関与していると論じている。

張麟声(2001・2003・2009)は、日本語学習者の誤用は体系をなしており、それを支える要素には類推といった「一般的認知能力」と「母語の知識」があると述べ、連体修飾構造における「の」の誤用を中国語の「的」の悪影響だとしている。また誤用の原因について、中国語の例文を導入し、文法的な視点から中国語と日本語は同じ東洋言語として構造的に似ていることが目立ち、お互いに似ているのだからこそ影響が起りやすいと母語の「的」が「の」の習得に影響を与えていると結論づけている。

ほかに、小山(2003・2006)、高橋(2004)、迫田(2006)など多様な日本語学習者に「の」の過剰使用が観察されている。

これまでの研究は主に前述のように、1.1のIの「の」の過剰使用の内容にあたる研究がほとんどである。これらの研究は、主に「の」の過剰使用には母語の影響が大きいと結論づけている。しかし、運用面であるいは教育現場ではどのようにつなげていけばいいのかにはほとんど言及されていない。また形容詞の後に「の」をつける誤用の研究を中心に行われてきたという経緯もある。連体修飾構造における「の」の過剰使用が中国語母語話者だけではなく、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者からも「の」の過剰使用が観察されることから、中国語母語話者だけが母語の影響だとはいいきれない。母語の影響を受けたとしても、過剰使用の現象以外、過少使用なども考えるべきである。つまり中国

17 言語転移とは母語の言語習慣を目標言語へ延長することである。奥野は「言語転移は母語の習慣が新たな第二言語においても持続する結果であるとして、第二言語習得を左右する最も大きな要因である。」と述べている。

語母語話者の場合、負の転移（マイナスの影響）¹⁸の場合だけではなく、正の転移（プラスの影響）があることも視野に入れるべきだと思われる。第二言語を習得するということはどの国の学習者でも母語の影響を受けないとはいえないだろう。その母語を、どのようにしたら悪影響を被らないようにできるのかも一つの課題だと考えられる。日本語学習者が母語の「的」の影響を受けているから、「の」の誤用が頻出しているという要因の追求だけでは、教育現場における教育方法への改善には繋がらないと思われる。

これまで先行研究における中国語母語日本語学習者に対する調査の特徴をまとめてみると、以下の通りとなる。

- I. 「の」の過剰誤用は他の国の学習者より比較的多い。
- II. 上級になっても、中国語母語日本語学習者の「の」の過剰使用が消滅しない。
- III. 中国語母語日本語学習者は修飾部の品詞に関わらず、「の」の誤用が見られる。
- IV. 中国語母語日本語学習者の「の」の過剰使用には、中国語の負の転移が見られる。

中国語母語日本語学習者のこのような傾向が見られるのは一体なぜなのだろうか。今までの研究を見てみると、ほとんど中国語の助詞の「的」に原因があると指摘されている。日本語教育の視点から詳しく「の」の役割を明らかにし、より論理的に「の」を分析し、どのように日本語学習者の「の」を習得する現状を改善するかには言及されていない。

1.4.1.3 先行研究における問題点

先行研究の結果から見ると、「の」の過剰使用については、今まで様々な角度から研究されてきた。連体修飾においては幼児の習得過程と成人日本語学習者の習得過程には共通点が見られるという。迫田（1999）・奥野（2005）によると、「の」の過剰使用の要因として、幼児の習得過程と成人日本語学習者の習得過程に見られた共通点から示された「格助詞」の過剰般化や、ある特定の語と結びつく日本語学習者の言語処理のストラテジーや、言語転移の可能性が示唆されていることが明らかになった。この中、初級から中級になると「の」の過剰使用が出現し、正用と混在することを明らかにしている。上級になると他

¹⁸ 奥野は「の」の過剰使用を母語の「負の転移」としているが、本研究ではこれらの誤用の場合「マイナスの転移/影響」と呼び、逆の場合「プラスの転移/影響」と呼ぶ。

の母語話者では「の」の過剰使用による誤用は消滅に向かうが、中国語母語日本語学習者は上級になっても「の」の過剰使用が依然として残り、新たに出現する学習者も存在する。中国語母語日本語学習者に「の」の過剰使用が多いことから自動化がすすみ、言語形式ではなく意味に直接アクセスする上級においては、即時的な処理が求められる場合や実際の運用場面において、無意識に言語転移が作用し誤用が生じ、中国語母語日本語学習者の誤用は特に消滅しにくいことが指摘されている。

しかし、先行研究においてはまだ触れられていない点もあり、以下の五点が上げられる。

- I. 連体修飾を対象とするとして、前述のように 1.1 の I に当てはまる「イ形容詞」の場合、「の」の過剰使用の研究が中心となっており、修飾部のほかの品詞のことには詳しく言及されていない。
- II. 前述の 1.1 の II、III、IV に当てはまる名詞が名詞を修飾する場合、「の」の過剰使用に関しては、マイナスの転移がよく言われるが、プラスの転移についてはあまり言及されていない。
- III. 中国語母語日本語学習者の誤用が特に消滅しにくいと指摘されているが、その原因をさらに分析する必要がある。
- IV. 中国語の「的」の影響が多いとされているが、どこまで、どう影響しているのかについてはほとんど触れていない。
- V. 教育現場で「の」をどのように指導すれば誤用を正用に導くことができるのかについての方法の提示も見られない。

本論文ではこれらの問題を取り込み、考察していきたい。

1.4.2 「的」に関するもの

これまで、「の」に関する先行研究を見てきたが、中国語の「的」について、どのような研究が行われてきたかを見てみる。中国語において、「的」を体系的に研究を施した代表的な人物は文法学者の朱德熙¹⁹である。

1.4.2.1 「的」の用法の概括について

¹⁹ 朱德熙(1961)「説“的”」『中国語文』。

朱德熙 (1961) は、「的」について、それぞれの₁、₂、₃と名づけ、三つに分けた。「的」の性質を分析するため、それぞれ三種類の詞を代表する X₁、X₂、X₃を設定し、X₁の後につく「的」を「的₁」とし、X₂の後につく「的」を「的₂」とし、X₃の後につく「的」を「的₃」とする。

「的₁」は、副詞の後につく「的」である。単音節の副詞の後には「的」がつかない。双音節²⁰の副詞を二種類に分け、「已经、马上、素采、刚好、恰巧」などの類の後には「的」をつけることができないのに対し、「非常、十分、忽然、简直、格外、不住、明明、渐渐、偏偏、暗暗」などの類の後には「的」をつけることができる。しかし、「的」をつけることのできる類の副詞に関しては、いつつくつかないか、その条件についてはまだ明らかでなく、任意とされている。

「的₂」については、単音節形容詞の疊語式²¹を通して決める。まず単音節形容詞を A とし、その疊語式の形容詞を R とする。全ての R が四つの性質を持っている。①単独で言わないこと。②主語、賓語、述語の働きができないこと。③名詞性成分を修飾することができない。④後に「的」を加えることができる。例えば「绿绿的、新新的、扁扁的、香香的、软软的、脆脆的、甜甜的、傻傻的」などがある。このような形容詞は R_a と呼ばれる。R_a は「的」の前にしか現れない。もう一種の形容詞は R_b と呼ばれ、「他倒希望虎姑娘快快进屋去。」「满满一车人。」のような、述語的成分あるいは数量的構造を修飾することができる。R_b は R_a より数がずっと少なく、「好好、慢慢、快快、远远、早早、细细、满满、大大、小小、紧紧」などがある。それに、R_b の場合、例えば、「慢慢走」、「好好一本书」というが、「慢慢的走」、「好好的一本书」ともいえる。以上のように R_a と R_b のあとにくる「的」が「的₂」である。

「的₃」については、単音節形容詞 A、動詞 D、名詞 M の後に「的」を加えると、以下の表 2 の通りである。

²⁰ 二音節のことである。

²¹ 中国語では形容詞の「重叠式」という。

	主語	賓語 ²²	定語 ²³	謂語 ²⁴	状語 ²⁵	補語
A 的	白的好	不要白的	白的纸	这张纸白的	—	—
D 的	懂的少，不 懂的多	有懂的，有 不懂的	懂的人多， 不懂的人少	我懂的	—	—
M 的	昨天的好	不要昨天的	昨天的报	这张报昨天 的	—	—

表 2

表 2 で示しているように、「A 的」、「D 的」、「M 的」の役割については、名詞の役割とほとんど同じであるため、これらの名詞性文法単位の後続成分とする「的」は「的₃」と呼ばれる。

さらに、朱徳熙の「的」の説によると、「的₁」、「的₂」、「的₃」の分布状況は下の表 3 にまとめられる。

²² 目的語である。

²³ 限定語、形容詞的修飾語、連体修飾語である。

²⁴ 述語である。

²⁵ 状況語、副詞性修飾語、連用修飾語、動詞・形容詞の前にあつて状態・程度・時間・場所などを表わす修飾的な成分である。

類別	符号	例文	「的」を加えた後の機能	「的」の類別
双音節副詞	F	忽然	副詞性	的 ₁
単音節、双音節及び三音節擬声語	N ₁ 、N ₂ 、N ₃	哨，哗啦，哗啦 啦	副詞性	的 ₁
単音節形容詞の 疊語式	R _a R _b	红红 轻轻	形容詞性 形容詞性	的 ₂ 的 ₂
双音節形容詞の 疊語式	ABAB	干干净净	形容詞性	的 ₂
後続成分を伴う 形容詞	A _a	红通通	形容詞性	的 ₂
四音節擬声語	N ₄	稀里哗啦	形容詞性	的 ₂
並立構造	B	无缘无故 大惊小怪	副詞性 形容詞性	的 ₁ 的 ₂
名詞	M	木头	名詞性	的 ₃
動詞	D	吃	名詞性	的 ₃
形容詞 ²⁶	A	红	名詞性	的 ₃
双音節形容詞	AB	便宜 细心	名詞性 名詞性/副詞性	的 ₃ 的 ₃ / 的 ₁
程度副詞＋形容 詞	fA, fAB, f” A, f” AB	很好，很便宜 最好，最便宜	形容詞性 名詞性	的 ₂ 的 ₃

表 3

表 3 で示しているように、朱徳熙の研究について、以下の四点にまとめられる：

²⁶ 単音節形容詞のことを指す。

- I. 「的」の後続成分により、「的₁」、「的₂」「的₃」三つの種類に分けられる。
- II. 「的₁」は副詞の後につく「的」である。単音節の副詞の後には「的」がつかない。
双音節の後につく「的」の条件に関しては、まだ解明できない。
- III. 「的₂」は形容詞の後につくのである。さらに Ra と Rb にわけて、「的」の違いが説明されている。
- IV. 「的₃」については、名詞性的な構造であり、名詞性文法単位の後続成分だと考えられる。

以上の朱の研究を通して、中国語の「的」の構造や機能が多様で多岐にわたることがわかる。「的₃」については「的」が名詞 (M)、動詞 (D)、形容詞 (A) の後につき、名詞的な構造であり、日本語の「の」の連体助詞と準体助詞の働きをしていることがわかる。しかし、朱の研究を見てみると、後続成分について、日本語の「の」の準体助詞の役割に当たる内容に偏っているようだ。本研究には、「的」の「的₃」の名詞の連体構造を中心に、日本語の「の」と比較しながら考察していく。

1.4.2.2 「的」の分類と有無について

陸俊明 (2003) は「“的”構造」²⁷について、「領属関係」とよび、前後の名詞の関係により、以下の18種類に分けている。

A. 称谓領属 (呼称領属関係)

我的父亲 / 私の父	其他的老师 / 彼の先生
小王的朋友 / 王さんの友達	老张的徒弟 / 張さんの弟子
我们的邻居 / 私たちのお隣さん	

B. 占有領属 (所有領属関係)

他的房子 / 彼の部屋	小李的笔 / 李さんのペン
我的自行车 / 私の自転車	爸爸的电脑 / 父のパソコン
姐姐的手表 / 姉の腕時計	

²⁷ 「的」で名詞と名詞をつなげる名詞句構造のことである。

C. 器官领属

他的眼睛 / 彼の目	弟弟的手 / 弟の手
猴子的尾巴 / 猿の尻尾	大象的耳朵 / 象の耳
松树的叶子 / 松の葉っぱ	

D. 构件领属 (機械などの部材領属関係)

书的封面 / 本の表紙	房间的门 / 部屋のドア
衣服的领子 / 服の襟	桌子的腿儿 / 机の足
饺子的馅儿 / 餃子の具	

E. 材料领属 (原料領属関係)

桌子的木头 / 机の木材	衣服的面料 / 服の布
画报的纸 / 画報の紙	啤酒瓶的玻璃 / ビール瓶のガラス

F. 属性领属

他的脾气 / 彼の性質	小王的性格 / 王さんの性格
糖的价格 / 飴の価格	烤鸭的味道 / ローストダックの味
桌子的长度 / 机の長さ	

G. 特征领属 (特徴領属関係)

弟弟的个儿 / 弟の背	妹妹的穿着 / 妹の格好
孩子的长相 / 子供の容貌	箱子的形状 / 箱の形
衣服的颜色 / 服の色	

H. 观念领属 (思想、意識、觀念、概念などの領属関係)

他的观点 / 彼の観点	我的看法 / 私の見方
校长的意见 / 校長の意見	朋友的劝告 / 友達の勧告
佐藤君的意见 / 佐藤君の見解	

I. 成员领属（構成員、メンバー領属関係）

北大的学生 / 北京大学の学生 清华的校长 / 清華の校長
美国的总统 / アメリカの大統領 夏普公司的职员 / シャープ会社の職員

J. 变形领属（形が変る領属関係）

土豆（的）丝儿 / ジャガイモの千切り 萝卜（的）块儿 / 大根の角切り
羊肉（的）片儿 / マトンの薄切り

K. 成果领属

他的文章 / 彼の文章 李白的诗 / 李白の詩
齐白石的画 / 齊白石の絵 王羲之的字 / 王羲之の字
矛盾的小说 / 矛盾の小説

L. 产品领属（生產品・製品領属関係）

东芝公司的电脑 / 東芝会社のパソコン 中国的人造卫星 / 中国の人工衛星
浙江的茶叶 / 浙江の茶 新潟的大米 / 新潟の米

M. 状况领属

北大的现状 / 北京大学の現状 他的前途 / 彼の前途
张教授的水平 / 張教授のレベル 我们的条件 / 私たちの条件
李老师的病情 / 李先生の病状

N. 创伤领属（外傷や内部器官の傷などの領属関係）

张三的伤口 / 張三の傷口 他的口子 / 彼の傷口
老张的胃炎 / 張さんの胃炎 小李的牛皮癣 / 李さんの乾癬

O. 事业领属（事業領属関係）

我们的事业 / 私たちの事業 小王的工作 / 王さんの仕事
郭老师的研究 / 郭先生の研究 他们的调查 / 彼らの調査
他的考察 / 彼の考察

P. 景观领属（風景外観領属関係）

苏州（的）园林 / 蘇州の園林	九寨沟（的）风光 / 九寨溝の風光
桂林（的）山水 / 桂林の山水	西湖（的）景色 / 西湖の景色

Q. 处所领属（場所の領属関係）

张三的前面 / 張三の前	小王的身后 / 王さんの後ろ
王大爷家的房后 / 王爺さんの家の後ろ	北京大学的隔壁 / 北京大学の隣

R. 能力领属

张三的英语 / 張三の英語	小王的象棋 / 王さんの将棋
姚明的篮球 / 姚明的バスケット	侯宝林的相声 / 侯宝林の漫才

陸は以上のような 18 種類の名詞句領属関係は場合により、文の構造が規定されると述べている。

例：

「他的衣服我买了。」

二通りの解釈が考えられる。「①他所拥有的衣服我买了/彼の所有している服を私が買った。」「②要我替他买的衣服我买了/彼に頼まれて、彼の代わりに服を買った。」。①の場合、「他的衣服」を動詞の後に移動させることができる。「例：我买了他的衣服」。しかし、②の場合、動詞の後に移動することができない。中国語では「“的”構造」が文の構造に大きな影響を与えていることがわかる。「的」の有無も文の意味関係により、異なると論じられている。

張敏（2008）²⁸は「的」の省略について、「自然句法理論与漢語語法象似性研究」という論文に、形容詞が名詞を修飾するとき、日常生活との関連が緊密な場合、「的」がいらぬのに対し、人の認知領域で緊密ではない場合、「的」が省けないと述べている。例えば、「水」は日常生活に欠かせないもので、冷熱の区別がある。つまり人の認知領域には

²⁸ 張敏（2008）「自然句法理論と漢語語法の類似性研究」。

「水」の冷たいのと熱いのがあり、「冷水」と「熱水」といういいかたが生まれ、それぞれ一つの概念となるため、「的」を入れる必要はなくなる。しかし、「魚」の場合、「冷」と「熱」に関連性が低く、緊密ではないため、「魚」を修飾するとき、「的」を入れなければならないのである。さらに、この理論は名詞が名詞を修飾するときにも適用すると論じている。張は「我女朋友」と「我的女朋友」を例に挙げ、「我女朋友≠我的女朋友」と説明した。

例：

①陈教授：这位是……「こちらは？」²⁹

张云轩：她是我女朋友。「彼女は私のガールフレンドです。」

②陈教授：这位是……「こちらは？」

张云轩：她是我女朋友。「彼女は私のガールフレンドです。」

黄凌峰：（冲着张云轩）你是不是酒喝多了！？她哪是你的女朋友，她是我的女朋友。（張雲軒に向かって）「お前、飲みすぎじゃないのか！？彼女はあなたのガールフレンドじゃない。俺のガールフレンドだよ。」

例文①と②は普通「的」が用いられないが、区別を強調する場合、「的」が必要とされる。

③陈教授：（对自己原先的学生）你也老大不小了，怎么还没成家呢？

（自分の以前の教え子に）「もう、若くないだろう。まだ、結婚しないの？」

某学生：老师，您也知道，我是个很内向的人，再说我们单位的女同胞都结婚了……

「先生、ご存知のように、私は無口な人間で、会社の同僚の女性もみんな結婚していますし……」

陈教授：要不要我给你介绍一个？「私が紹介してあげようか。」

某学生：好啊，老师！「いいですか。先生！」

²⁹ 原文に基づいて、筆者が訳したものである。

陈教授：那你说说，要什么条件？「じゃ、言ってみて、どんな人がいい？」

某学生：（沉思一会儿）要说什么条件啊，我的女朋友不要求很漂亮，只要心地好就行。

（ちょっと考えて）「どんな子かといったら、私のガールフレンドはそんなにきれいじゃなくてもいいですが、心の優しい子がいいですね。」

なぜ例文①には「的」を入れなくてもいいのに、例文③には「的」をいれるのかについて、張は例文①は「私」と「ガールフレンド」の間には、すでに緊密関係が存在しているが、例文③は「ガールフレンド」は特定の女性でなく抽象的な概念であると述べている。つまり例文①と例文③は距離感の問題である。修飾語が被修飾語に距離が近い場合、「的」は必要とされないのに対し、距離が遠い場合は「的」が必要である。

また、「我妹妹」と「我的妹妹」、「*我桌子³⁰」と「我的桌子」に関して、譲渡³¹できるかできないかにより、「的」が省けるかどうかが決まる「譲渡理論」でも説明されている。しかし、「我妹妹」と「*张三妹妹³²」、「*我耳朵³³」と「猪耳朵」を例に挙げてみると、どちらも譲渡不可能であるが、「的」がつくのはなぜだろうか。明確に説明されておらず、解決されていない。

他の「的」に関する研究も中川（1976）、石（2008）、楊（2009）、邵（2013）、楊（2011）等の研究があげられる。これらの研究は「名詞+的+名詞」の場合、名詞と名詞との意味関係により、「的」がいるかいないか。また中国語の名詞接続において被修飾部の前の「的」が省略され得るのは、身体名詞・親族呼称名詞・所属機関などを表す名詞と譲渡不可能名詞などであるとの説もある。

以上の様々な研究から、「的」に関する多様な議論が行われてきたことがわかった。「“的”構造」の複雑さと分類の難しさが先行研究で論じられている。しかし、「的」の役割とその機能については、譲渡可能なら、どこまで譲渡不可能と線引きされるのか、また「“的”構造」の文章へ規定範囲はどう定義すればいいのかのような解明されていない課題がまだ

³⁰ 毛莉（2014）を参照。

³¹ 譲渡については権利・財産・法律上の地位などを、他人にゆずりわたすこと。有償・無償は問わない。「我的桌子」の場合、他人に譲渡できるから、「的」が省けない。しかし、「我女朋友」と「我的女朋友」について、前者は恋愛関係で譲渡できないのに対し、後者は恋愛関係を確定していなく、他人の「女朋友」になる可能性もあり、譲渡できる。

³² 同上。

³³ 同上。

残されている。

本研究では、「的」による連体修飾の場合、日本語の「の」とどのように関連しているのかを、これらの先行研究を踏まえながら考察したい。

1.4.3 「の」と「的」の対照研究に関するもの

これまで「の」の過剰使用に関しては、多くの研究で取り上げられており、特に中国語母語日本語学習者には、「的」の影響が多いと指摘されてきた。「の」と「的」とは、どういった関連性を持っているのかについて、以下に紹介する。（「の」と「的」の先行研究について各章で詳しく述べる）。

1.4.3.1 「の」と「的」の対応・不対応について

張麟声（2009）では中国語と日本語は、「学校的椅子⇔学校の椅子」のように、名詞が名詞にかかる名詞修飾構造が対応しているうえに、多くの漢語語彙を共有している。そのために、中国語を母語とする学習者は、日本語を学習ないし使用していく過程で、無意識に中国語の知識を生かしていく。こういった現状を踏まえ、日本語の「の」と中国語の“的”を中心に、名詞にかかる連語的修飾構造の日中対照研究を行い、「の」と“的”の対応・非対応関係を整理し、修飾部とヘッド（修飾部に対して被修飾部のことを指す）の意味関係を12ケースに分けている。

- 〈1〉 修飾部がヘッドの所有者である場合
- 〈2〉 修飾部がヘッドの擬似所有者である場合
- 〈3〉 修飾部がヘッドの「主」である場合
- 〈4〉 修飾部がヘッドが物・人とその周囲という関係である場合
- 〈5〉 修飾部がヘッドの存在場所か存在に関わる時間である場合
- 〈6〉 修飾部がヘッドのソース、ゴールまたは相手である場合
- 〈7〉 修飾部がヘッドの主体か対象である場合
- 〈8〉 修飾部がヘッドの原産地か出身地である場合
- 〈9〉 修飾部がヘッドの素材である場合
- 〈10〉 修飾部がヘッドの属性か状態である場合
- 〈11〉 修飾部がヘッドの職位・身分である場合

〈12〉修飾部がヘッドの内容や様式である場合

以上の12のケースに関しては、次の9つの種類が立てられるとしている。

- ①日本語では「の」を、中国語では“的”を使うケース；
- ②日本語では「の」を、中国語では“的”を使わないケース；
- ③日本語では「の」を、中国語では“的”を使っても使わなくてもよいケース；
- ④日本語では「の」を使うが、中国語では“的”を使わないケース；
- ⑤日本語では「の」を使わないが、中国語では“的”を使うケース；
- ⑥日本語では「の」を使うが、中国語では“的”を使っても使わなくてもよいケース；
- ⑦日本語では「の」を使わないが、中国語では“的”を使っても使わなくてもよいケース；
- ⑧日本語では「の」を使っても使わなくてもよいが、中国語では“的”を使うケース；
- ⑨日本語では「の」を使っても使わなくてもよいが、中国語では“的”を使わないケース。

張麟声は修飾部とヘッドの意味とその関係について書いているが、修飾部が中心で、被修飾部については詳しく論じていない。ヘッド部を普通名詞、固有名詞、動名詞、方位名詞、相対名詞に分けているが、それ以外の青春、笑顔、口調のような抽象的な名詞や複数の「の」がある場合には言及していない。

今までの研究では、それぞれ異なる分類のしかたをしており、全部がその分類されたケースに当てはまるわけではない。特に、長い複雑な文になるとどうなるか論じられていない。例えば、所有の場合は、張麟声（2009）は「修飾部がヘッドの所有者である場合、日本語では、修飾部及びヘッドがいかなる名詞あるいは人称代名詞であろうと、その所有関係が持ち主と持ち物であろうと、創作者と創作物であろうと、「の」は必須で、同じように中国語の「的」も使わなければならない」と述べている。しかし、このルールは文にも当てはまるのであろうか。実際には、次のような例文が見られる。つまり、中国語の「的」は常に必須とならないのである。

例：

僕の部屋でよく聴いたザ・ビートルズ。とりわけよく聴いたアルバムが RUBBER SOUL

だ。(青)

→经常在我房间里听的甲壳虫乐队的歌曲中，常听的专辑是“橡胶灵魂”。

例文では所有を表しているが、中国語の訳は「我的房间」ではなく、「我房间」となっている。例えば、「我手表坏了，不知道时间。(私の腕時計は壊れたので、今何時か知らないよ)」のように、所有を表しているのに、「我手表」には「的」がついていない。「我手表坏了」と「我的手表坏了」両方とも言えるが、重点の置き方が異なっている。「我手表坏了」は焦点が「坏了」にあり、「我的手表坏了」は焦点が「我的」にあり、ほかの誰の時計でもなく、「私の」であるというニュアンスを表しているようだ。つまり「名詞+(の/的)+名詞」の形は日本語も中国語も必須であるが、中国語の場合、文の中では「的」の有無が文意に影響するといえる。このような文レベルになると、「の」と「的」はどうかにかに言及される研究が少ないようである。

ほかに、張佩霞(1997)、刑志強(1999)、方美麗(2004)、于飛(2010)などは中国語の「的」と日本語の「の」(連体助詞としての用法を中心に)について、その共通点と相違点を論じている。

1.4.3.2 先行研究で触れられていない点

以上取り上げた先行研究は日本語の「の」と中国語の「的」に関する研究である。これらの研究は名詞と名詞との連結でその前後関係に注目するか修飾部だけに注目するのがほとんどであり、修飾部の分類の仕方がそれぞれに異なっている。

「名詞+の+名詞」に関する前後の意味関係は大切だが、「の」と「的」にかかわる文章全体の構成から見る場合やあるいは「の」と「的」が複数用いられている場合にはどうなるか、対応するか否か、省略できるか、もしできるなら、どういうふうに省略したらいいのかには言及していない。また連体修飾の名詞句の「の」の誤用については、どの部分がどのように過剰使用となっているのか、またどの部分がどのように過少使用となっているのかは詳しく研究されていない。このような誤用は日本語学習者の学習過程においてどのような特徴を持ち、または修正が可能かという疑問もわいてくる。ほとんどの研究が中国語の悪影響と指摘しているが、どこまで、どう影響しているのかについては触れられていない。それに多くの教科書にも日本語の「の」は中国語の「的」と類似すると説明されているが、教科書の問題点については触れられていない。日本語教育において、「の」を

どのように教えれば、うまく誤用を減らせるのかについての指摘もなかった。日本語の「の」と中国語の「的」に関する対照研究が数多くされてきたが、これらの研究は、単なる比較にとどまり、運用面あるいは日本語教育につなげていくものはまだ少ない。

本研究ではこれらの先行研究を踏まえ、日本語教育の視点から今まで「の」の過使用だけでなく、「の」の不使用やほかの助詞との混用も考察する。日本語学習者の誤用の原因を探り、日本語教育の現場では「の」をどういうふうに教えていけば、効率的に習得させられるのかを提案できたらと考える。

第2章 「名詞+ (の/的) +名詞」を中心に

本章では日本語の「の」は中国語の「的」と対応するかしないかについて考察し、日本語教育の立場から中国語母語日本語学習者の「の」の誤用を分析する。まず中日で主に使用される日本語の教科書を調べる。次に手近にあって日本語を勉強するのに欠かせない日本語の辞書も取り上げる。教科書および辞書の解説が日本語学習者の「の」の誤用にどのように関連しているのかを分析する。また「の」と「的」の前後の語の意味関係だけではなく、文レベルにおいての「の」と「的」の対応・不对応に注目する。さらに、文レベルで「の」が連続する場合、「の」と「的」の対応はどのように異なってくるのかを探っていく。

2.1 問題提起

日本語を教えるとき、短文を作らせたり文章を書かせたりするが、その中に助詞の「の」の使い方の間違いが多く見られる。

以下はいくつか例文を挙げる：

- (1) *私は友達と一緒においしいのラーメンを食べました。
→我和朋友一起吃了很好吃的拉面。
- (2) *李先生は有名の先生です。
→李老师是很有名的老师。
- (3) *これはワンフーチンで買ったのコートです。
→这是在王府井买的大衣。
- (4) *机上には猫がいます。
→桌上有只猫。
- (5) *この本は歴史本です。
→这本书是历史书。

以上のような誤用例が頻出する。この中の例文 (1)、(2)、(3) の「おいしいの」、「有

名の、「買ったの」は中国語母語日本語学習者の典型的な形容詞と動詞の連体修飾用法による間違いであり、名詞を修飾するとき、「の」のいらぬところに多く「の」をつけてしまう。つまり「の」をつけすぎる傾向である。一方、例文(4)、(5)のような名詞による連体用法の「の」が抜ける間違いも少なくない。なぜ中国語母語日本語学習者は「の」をつけるべきところで「の」を抜かしたり、必要のないところに入れたりするような間違いをするのか考えてみたい。まず中国と日本で作成された日本語の教科書ではどのように説明されているか、そして、次に実際に「の」がどのように使われているかを見てみる。

2.2 「の」と「的」に関する対照研究

日本語の「の」と中国語の「的」に関する対照研究は序論の1.4.3で紹介したが、本章で詳しく述べる。

張佩霞(1997)は「中国語の「的」と日本語の「の」——連体助詞としての用法を中心に——」で中国語における「的」と日本語における「の」は両言語の用字用語の使用頻度の調査では何れも他のものとケタ違いの差でトップを占めている。そればかりでなく、中国語の「的」も日本語の「の」もその用法からいえば、これもまたそれぞれ両言語においては何よりもくせものであると述べている。さらに、それぞれの言語の基本的特徴を通観し、中日両言語における用言につく準体助詞「的」、「の」について、その文法的な機能の異同、前の動詞句との関係の異同などを明らかにし、中国語の構文的関係の表示及び理解にかかわる諸要素を解明したと論じている。

張佩霞によると「中国語では成分間の意味関係は言わずとも明瞭な場合は、あえて形式による明示化は行わない。語順も構文的関係を示す絶対的なものではないし、虚詞(P5の注3を参照)もときどき省略される。」しかし、ここの「虚詞」つまり「的」のことであるが、ときどき省略されると述べているが、根本的にどんな場合に省略されるかを明確に論じていない。そして、語順によって、虚詞が絶対的に必要となることも基本であろう。これについて、さらに論ずる必要があると思われる。

刑志強(1999)は、日本語の「の」と中国語の「的」とは、主に単語と単語、文節と文節をつなぐ役割を果たすもので、広く使われている。この二つの語の意義用法については、どの辞書を見ても、日本語の「の」は中国語の「的」に相当するというような解説である。そのため、中国での日本語学習者も日本での中国語学習者も、日本語の「の」と中国語の

「的」の二つの語の意義用法はほとんど同じで、特に連体助詞と準体助詞の場合は全く同じだと思っている人が多いという視点から、実際にはこの二つの語の意義用法には大きな違いがあり、日本語の「の」は中国語の「的」に相当する場合がとても少ないと述べている。また、日本語の「の」の意義用法と中国語の「的」の意義用法についてまとめ、主として、日本語の「の」の連体助詞と準体助詞の場合には、中国語の「的」の意義に相当するが、同じ連体助詞なのに、長い複雑な文になると、中国語の「的」に相当しなくなることや、準体助詞の場合は、中国語の「的」に相当しない原因を研究し、日本語の「の」の意義用法の複雑さを強調している。

しかし、刑志強（1999）によると、連体助詞の場合、日本語の「の」と中国語の「的」とは相当すると結論付けているが、前述の 1.1 の I、II、III、IV で述べたように、相当しないものがある。さらに同じ連体助詞の場合、長い複雑な文になると、中国語の「的」に相当しなくなることであると書かれているが、説得力のあるものではない。意義用法のみならず、修飾部と被修飾部の品詞あるいは前後の関係により、対応したりしなかったりする。特に、長い複雑な文になる場合、どのように相当しなくなるかということもさらに分析する必要があると思われる。

秦・丸田（2006・2007）は日本在住外国人（6～20 歳）で日本滞在歴 9 ヶ月から 3 年前後の年少者、また国際結婚の日本人配偶者で日本滞在歴 2 年から 6 年前後の成人を対象とし、年齢的に臨界期³⁴前後の様々な生徒たちが日本語習得をする際に、母語からどのような影響を受けているのかを、主に「イ形容詞」に絞り調査が行われている。年少者のうちでも、来日の際の年齢が低い者には、「の」の過剰使用がほとんど観察されなかったことから、第二言語（L2）を習得する際に、母語が定着しているほど、母語の影響が大きいことを述べている。

誤用例 (1) 富士山は日本で一番高いの山です。(2) ここはにぎやかのところです。(3) お父さんが買ったの車はきれいです。このように、L2 として日本語学習をする際に、学習者が (1) ～ (3) のように被修飾名詞の前に「の」を過剰に挿入したりする。一方、(4) 夏休み (の) 宿題、(5) 日本 (の) 切手のような「の」を抜かしたりする過少使用も取り上げている。

秦明星・丸田（2006・2007）によると、母語の文法の影響による中国語母語話者に比較

³⁴ 臨界期仮説によると、言語が努力せずに自然に習得される時期があるという。脳は 10 歳まで柔軟性を保つが、この柔軟性は思春期になると消失し始める。

的多くみられる現象であると結論づけているが、年少学習者に調査の対象が限られている。また年少学習者がどういう教育を受けてきたか、どのような教科書を使っていたのかが明らかにされていない。過剰使用に対して、過少使用も取り上げているが、あくまでも、過剰使用の補足説明のような形で加えたものであるため、論文には詳しく論じられていない。

于飛 (2010) は連体修飾構造と用法について、二つの助詞の「の」と「的」の使い方の対照研究を通して、日本語と中国語の共通点と相違点についてまとめ、「A 体言+の・的+B 体言」の表現構造から、「の」と「的」は格関係を内包して、表す意味の曖昧さ、つまり「の」の解釈の多様性について論じている。まず現代語における日本語助詞「の」と中国語助詞「的」は両方曖昧な表現とし、その根拠は共通点の「A 体言+の・的+B 体言」の表現構造からみて、「の」と「的」は格関係を内包して、表す意味がきわめて曖昧となることである。次に、現代中国語助詞「的」より、日本語助詞「の」の省略表現はもっと多様であることを証明した。特に、「の」の簡略化表現はギリギリのところまでできることからみると、日本語は文脈依存型言語とする強力な根拠となり、西欧言語と異なって、人間関係が密であることばとしている。もう一つは、日本語は主語がよく省略される。日本語を中国語に訳する場合、主語は省けない。この点からみると、中国語の文脈依存は日本語より弱いということが理解し得る。これは人間関係が日本より稀薄であることを意味する。日中両言語の比較研究により、人間の考え方、意識のありかたの理解につながると結論づけられている。

連体修飾構造における日本語の「の」と中国語の「的」についての比較研究が数多くされている。両言語の共通点と相違点から、その国・民族の文化などをことばを通して反映している。中国語の文脈依存が日本語より弱いという説については、「の」の省略表現だけから断定するというのは疑問に思われる。確かに「の」の曖昧さや多様性が日本語学習者を困らせることが多いが、「的」の省略表現も複雑といえるだろう。人間の考え方、意識のありかたはさておき、まず文法的に両言語の関連性を分析していきたい。

以上の先行研究以外では、金春子 (1991) では「の」と「的」の相違点について、二つの助詞は限定語と体言化されたものとしての役割が似ているため、使い間違いも一番多いと論じられている。また方美麗 (2004) は中国語の「的」と日本語の「の」の意味用法を中心に、中国語の名詞につく「的」と日本語の名詞につく「の」との表現の相違について、「物名詞+物名詞」「人名詞+人名詞」「人名詞+物名詞」「人名詞+場所名詞」「人名詞+

身体部位」「場所名詞＋場所名詞」「場所名詞＋人名詞」「場所名詞＋物名詞」8種類に分けて、「名詞＋名詞」の組み合わせから、その意味関係を分析している。中国語の「的」と日本語の「の」との対応・非対応に言及し、主に「的」が省略可能かどうかを論じている。しかし、名詞と名詞前後の関係だけからでは省略可能かどうかいいきれないと考える。林翠芳（2003）、孫淑華（2004）、李蓮花・劉麗芸（2008）は中国語の「的」と日本語の「の」の対応と非対応について書いている。

2.3 教科書における「の」の提示

ここでは中国と日本で作成された日本語の教科書から、「の」に関する解説及び主な例文と練習を取り上げる（解説は中国語を直訳したものである）。

2.3.1 中国で作成された教科書：（『新編日語』『総合日語』『中日交流標準日本語』）

▲『新編日語』（2009）

第二課

解説：格助詞「の」

日本語の名詞と名詞を結合させるとき、大体「の」を用いる。「の」は格助詞で名詞や代名詞の後につき、またその後に来る名詞を限定する。具体的に所属、所有、時間、状態などを表す。中国語の「的」に相当する。

例文：にほんごかの顧さん

歴史の本

（以下略）

練習：なし。

▲『総合日語』（2009）

第五課

解説一：の<領属>

格助詞の「の」が名詞の後につき、連体修飾として名詞を修飾する。所属、属性などを表す。中国語の「的」に相当する。訳さない場合もある。

例文：高橋さんは日本の方です。

鈴木さんは京華大学の学生です。

(以下略)

解説二：の<同格>

格助詞の「の」は名詞の間に入る場合、同格の関係も表す。つまり「の」の前後の名詞が同じ意味である（同じものを指す）。一般的に「の」の前の名詞は関係、性質を表す名詞で、後の名詞は固有名詞、人名などである。

例文：私は学長の張光輝と申します。

こちらは友達の王さんです。

(以下略)

練習：こちら/留学生/キムさん—— こちらは留学生のキムさんです。

(以下略)

▲『中日交流標準日本語』（2010）

第一課

解説：甲の乙

「の」（助詞） 名詞と名詞を結合する。二つの名詞の間関係は複雑である。ここでは「乙が甲に属する」という関係を持つ。この「の」は一般的に中国語の「的」に相当する。

例文：田中さんは旅行社の社員です。

王さんは東京大学の留学生です。

(以下略)

練習：王さんは東京大学の留学生です。

(以下略)

第二課

解説：甲の乙（内容及其他）

第一課の「甲の乙」と違って、他の意味にも使われる。「の」の組み合わせが同じだがそれぞれ違う意味を表している。だから、二つの名詞の関係から判断する必要がある。また「乙」の内容が分かる場合、それを省略して「甲の」という形になる。

名詞と名詞を結合するとき。中国語の場合には「的」がつかないときがあるが、日本語の場合には大体つく。

例文：あの万年筆は私のです。

その辞書は王さんのです。

(以下略)

練習：あれは日本の新聞です。

(以下略)

第二十一課

解説：同格でやや強調の意味を表す。

例文：明日の火曜日田中さんに電話をします。

(以下略)

練習：なし。

2.3.2 日本で作成された教科書：(『初級日本語』『日本語初歩』『みんなの日本語』)

日本語の教科書には、「解説」がない場合がほとんどである

▲『初級日本語』(1998)

第一課

例文：マリアさんはマレーシアの学生ですか。—— はい、私はマレーシアの学生です。

あの男の方は山本先生です。日本語の先生です。

それはあなたの鞆ですか。—— はい、これとこれは私の鞆です。

マリアさん、これはあなたの部屋の鍵です。

(以下略)

練習：ジョンさんはアメリカの学生です。

これは日本の時計です。

(以下略)

第二課

例文：そこはAクラスの教室です。

ここは学校の庭です。

(以下略)

練習：山田さんのうちはどこですか。—— 山田さんのうちはあそこです。

食堂のスープは高いですか。—— いいえ、食堂のスープは高くないです。

(以下略)

▲『日本語初歩』(2000)

第一課

例文：わたしは日本語の先生です。

この方は中国の陳さんです。

(以下略)

練習：私はオーストラリアの学生です。

私はイギリスの学生です。

(以下略)

第二課

例文：これはあなたの傘ですか、ラタナーさんの傘ですか。

—— それはラタナーさんの傘です。

あなたの傘はどれですか。—— 私の傘はこれです。

(以下略)

練習：これはジョンさんの傘です。

チンさんの傘はどれですか。

(以下略)

▲『みんなの日本語』(2003)

第一課

例文：あの方はどなたですか。—— …ワットさんです。さくら大学の先生です。

(以下略)

練習：ミラーさんはIMCの社員です。

カリナさんは富士大学の学生です。

(以下略)

第二課

文型：これはコンピューターの本です。

それは私の傘です。

例文：それは何の雑誌ですか。—— …自動車の雑誌です。

あれは誰の鞆ですか。—— …佐藤さんの鞆です。

(以下略)

練習：これは自動車の本です。

これはコンピューターの本です。

あれは私の机です。

あれは佐藤さんの机です。

(以下略)

第三課

例文：それはどこの靴ですか。—— …イタリアの靴です。

(以下略)

練習：これは日本の自動車です。

これはアメリカの自動車です。

(以下略)

第十課

文型：机の上に写真があります。

例文：箱の中に何がありますか。—— …古い手紙や写真などがあります。

郵便局はどこにありますか。—— …駅の近くです。銀行の前にあります。

(以下略)

練習：ミラーさんは会議室にいます。

ミラーさんはエレベーターの前にいます。

本屋は駅の近くにあります。

本屋は銀行のとなりにあります。

(以下略)

各教科書をまとめると、以下のようになる：

出版	教科書	提出課	「の」の説明	「的」との関係	練習
中国	新編日語 (2009年)	L2、L13	①格助詞：所属、 所有、時間、状態 ②準体助詞	「的」に相当、訳 さない場合もある	なし
	総合日語 (2009年)	L5	①所属、属性など ②同格	「的」に相当	あり
	中日交流 標準日本語 (2010年)	L1、L2、 L21	①助詞所属、内容 ②同格	「的」に相当	あり
日本	初級日本語 (1998年)	L1、L2	なし	なし	あり
	日本語初歩 (2000年)	L1、L2	なし	なし	あり
	みんなの日 本語（別冊中 国語版解説） (2003年)	L1、L2、 L3、L10	属性、所属、産地、 位置関係	「的」と類似	あり

表4（表1再掲）

以上から、中国で作成された教科書は「の」は格助詞として所属、所有、内容、性質、状態、同格などを表すとしている。日本で作成された教科書には説明がほとんどなく、例文よりなっている。日中の教科書とも、「の」に関する練習が少ないことがわかった。また日中ともに「の」は中国語の「的」と類似していると説明していることである。

2.4 中日の辞書における「の」と「的」

日本語学習者にとって教科書以外、辞書は手近にあつて日本語を勉強するのに欠かせない書物といえるだろう。中日の辞書には「的」と「の」についてどのように説明されているのかをしてみる。

2.4.1 中国語の辞書³⁵における「的」の説明

中国語の辞書については、中国語母語話者が主に使用する『現代漢語大詞典』、『新華字典』を挙げる。

『現代漢語大詞典³⁶』(2010) 1. 构成“的”字词组。表示修饰关系。丁玲《母亲》：“金色的阳光，撒遍了田野，一些割了稻的田野。” 2. 构成“的”字词组代替名词。老舍《四世同堂》：“一位掌柜的，按照老规矩，月间并没有好多的报酬。” 3. 构成“的”字词组修饰动词或形容词。用同“地(de)”。高云览《小城春秋》：“赵雄礼貌的和剑平握手，客气一番。” 4. 用同“得(de)”。①连接表示程度或结果的补语。孙犁《小胜儿》：“冀中平原上，打的天昏地暗。” ②用于动词和补语之间，表示可能。如：提的动；过的去。 5. 用于指人的名词、代词和指职务、身分的名词中间，表示某人取得某种职务或身分。如：排《白毛女》，小王的喜儿，我的大春；今天开会是你的主席。 6. 在插入某些动宾词组中间的指人名词或代词的后面加“的”，表示某人是动作的对象。如：别开小李的玩笑；别生我的气。 7. 用于某些句子的动词和宾语之间，强调已发生的动作的主语、宾语、时间、地点、方式等。如：老赵发的言，我没发言。 8. 用于句首某些词组后，强调原因、条件、情况等。如：大白天的，还怕找不到路？走啊走的，天色可就黑了下來啦。 9. 用在并列的词语后，表示“等等”、“之类”。犹“什么的”。如：老乡们沏茶倒水的，热情极了。 10. 口语中用在两个数量词中间，表示相加或相乘。如：一块两毛五的八毛二，两块零七；六平方米的三米，合十八立方米。 11. 用在陈述句子末尾，表示肯定的语气。如：他要走的；我骑车去的。

『新華字典³⁷』(2011) 助词 1. 用在词或词组后。①表明形容词性：美丽～风光。宏伟～建筑。光荣而艰巨～任务。②同“地”。③表示所指的人或物：卖菜～。吃～，穿～。④表示所属的关系的词，有时也写作“底”：我～书。社会～性质。 2. 用在句末，表示肯定的语气，常跟“是”相应：他是刚从北京来～。

³⁵ 中国語の辞書は義務教育に基本に使う辞書で、日本語の辞書は日本語学習者が多く使用されるほうである。

³⁶ 『現代漢語大詞典』現代漢語大詞典編委会 上海辞書出版社 2010年

³⁷ 『新華字典』商務印書館編 商務印書館 2011年

2.4.2 日本語の辞書における「の」の説明

日本語の辞書については、中国語母語日本語学習者が主に使われる『大辞林』³⁸と『新明解国語辞典』を挙げる。

『大辞林³⁹』第三版(2006) 1. 格助詞①連体修飾語を作る。㊦後続する名詞との所有・所在・所属・行為者などの関係を表わす。「私の本」「空の星」①性質・状態・材料などを表して下に続ける。「花の都」㊧人間・数量・位置・理論などについての関係を表す。「社会悪の問題」㊨同格の関係を表す。現代語では「ところの」「との」の形をとることがある。「政治家の山下氏」㊩動作性名詞に付いて、その動作・作用の主が後ろの名詞であることを表す。「操業中の漁船」㊪後ろの動作性名詞が表す動作・作用の主体・対象であることを表す。「彼の援助で助かる」㊫「ごとし」「ようだ」などを続いて言って、実質・内容を表す。「リンゴのように赤い」②従属句の主格・対象語格を表す。「ぼくの読んだ本」③(序詞などで用いて)「のように」の意味で、下の用言にかかる。④叙述の途中で言いさして、後に続ける。 2. 準体助詞「のもの」など、名詞に準ずる意味に用いられる。①名詞に付いて、「のもの」の意を表す。「ぼくのものがない」②活用語の連体形に付いて、その活用語を体言と同じ資格にする。「リンゴは赤いのがいい」③(「のだ」「のです」「のだろう」などの形で)確信的な断定・推定を表す。「ついに失敗したのである」 3. 並立助詞 用言その他の語に付いて、物事をいくつも並べあげる場合に用いる。「貸すの貸さないのとさんざんにもめた。」 4. 終助詞①(下降調のイントネーションを伴って)断定の意を表す。「お金、使っちゃったの」②(上昇調のイントネーションを伴って)質問の意を表す。「のか」の形をとることもある。「だれがしたの」③念を押す気持ちを表す。「のよ」「のね」などの形をとることもある。「道草しないで帰るのよ」④(強いイントネーションを伴って)命令の意を表す。「さあ、早く寝るの」 5. 間投助詞 文節末に用いて、言葉の調子を整える。ね。「そうしての、とうとう死んでしまったとき」

³⁸ 『大辞林』と『新明解国語辞典』を選定した理由について、『新明解国語辞典』は日本語の説明や例文などがわかりやすく、アクセントも表示されているため、よく使われる辞典である。また、『広辞苑』の方が日本では広く使用されているが、古典辞典的な側面も残している。それに対し、『大辞林』が現代語の用法を全面に押し出している特長から、日本語を勉強する外国人にはわかりやすく、利用しやすい利点があるため、よく使われている。

³⁹ 『大辞林』第三版 松村明 三省堂 2006年

『新明解国語辞典⁴⁰』第七版(2012) 1. 格助詞①あとに来る言葉が表わす内容や状態・性質などについて限定を加えることを表わす。例：私の本/東京での生活/国のため。②「…のようだ」「…のごとし」の形でそうとらえられる意味的な関係があるということを表わす。例：雪のようだ。③あとに来る動作・作用・状態の主体であることを表わす。例：桜の咲くこと。④(名詞のあとについて)前に来る名詞によって限定される物を表わす。例：これは私の(=物)だ。⑤(述語の連体形のあとに用いて)上の語(のまとまり)を体言として扱い、全体としてのものやことを表わす。例：安いの(=物)がいい。⑥(「…のだ」「…のか」の形で)相手を説得したり自分自身が納得したりする場面で、理由・根拠などを述べることを表わす。例：彼は病気なのだ。⑦あれこれ列挙して述べることを表わす。例：狭いの(=とか)きたないの(=など)と文句ばかり言う。⑧同格であることを表わす。例：友達の田中君。 2. 終助詞(主として女性語・幼児語) ①軽く断定することを表わす。例：いいえ、違うの。②(上昇調の発音で)相手に質問することを表わす。例：何をするの。③(強く発音して)相手を説得しようとすることを表わす。例：あなたは心配しないで勉強だけしていればいいの。

2.4.3 中日の辞書に見る「的」と「の」

中→日(「的」→「の」)

『中日大辞典⁴¹』第三版(2010) 1. 修飾語を名詞の上に加える時、その修飾語の語尾として用いる構造助詞・修飾語が被修飾語の表すものの所有主であるか、創造者または母体であるもの。……の……：旧時、[底. de]とも書いた。「我的书/わたしの本」「世界的变化/世界の変化」 2. 修飾語が被修飾語の受動者であるか、その支配ないし限定範囲内にあるもの。……の。「标准语的推行/標準語の普及」「社会的科学/社会の科学」。 3. 形容詞は指示・疑問の一部分以外、大部分は語尾に「的」をつける。「可爱的中国/愛すべき中国」 4. 限定語としての動詞(動詞句)の後につけて、中心語に結びつける。「去的人/行く(ところの)人」「说书的/講釈師」。 5. 文末または動詞の直後に置き、動作が過去に行われたことを表す。「他什么时候走的/彼はいつ出かけましたか」：「他什么时候走/彼はいつ出かけますか」。 6. 真相や原因を述べたり、自身をもって言いきる語気を表す語気助詞。「一会儿就要来的/しばらくすればすぐ来ます」。 7. 「是……的」の型で、主

⁴⁰ 『新明解国語辞典』第七版 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 三省堂 2012年

⁴¹ 『中日大辞典』第三版 愛知大学中日大辞典編 大修館書店 2010年

語の目的・来源・用途などを明示する：過去の事柄に限る。「他们是参加国庆节活动来的/彼らは国慶節の行事に参加しに着ました」。 8. 特殊な状語を作る接尾字。「钱多钱少的不要紧/金が多かろうと少なかろうとかまわない」。 9. 動賓形式の複合動詞において、その動作の対象を示す。「请他的客/彼を招待する」

日→中（「の」→「的」）

『岩波日中詞典⁴²』第二版（2003）1. 「所有、場所、性質、状態、関係などを表す」de (的)。例：これは誰の本ですか？这是谁的书？ / 日本橋のデパートに買物に行く。到日本桥的百货大楼去买东西。 / 日本の夏は蒸し暑い。日本的夏天很闷热。 / 青磁の花瓶。青瓷花瓶。 / 焼きたてのパン。刚烤好的面包。 / 花模様のワンピース。带花的连衣裙。 / 彼は古代史の研究をしている。他从事古代史的研究。 / これは良心の問題だ。这是良心的问题。 / 友人のAさんを紹介します。介绍一下我的朋友A先生。 / 曹雪芹の『紅樓夢』。曹雪芹的《红楼梦》。 2. 主語を示す。桜の咲く頃。樱花开的季节。 3. 「…もの、…こと」de (的)。できたのから持って来い。做好了的就拿来。 / 言葉で言い表すのは難しい。用语言表达是很难的。 4. 列举。死ぬの生きるのと言って騒ぎ立てる。要死要活地吵个不休。寻死觅活。

2.4.4 中日における辞書に提示される「的」と「の」の共通点と相違点

2.4.4.1 「的」に関するまとめ

中国語の辞書には「的」が構造助詞（『現代漢語大詞典』）あるいは助詞（『新華字典』）と呼ばれている。その文法機能について主に以下にまとめられる：

- I. 名詞、形容詞、動詞の後に付く「的」であり、名詞を修飾する。①「的」は単独に使わず、形容詞の後に付き、名詞を修飾し、その名詞との修飾関係を示す。例：美丽的风光/美しい景色。②名詞と名詞の間に付いて、領属関係を表す。例：「我～书/私の本。」
- II. 動詞の後に付き、「的」構文をつくる。①すでに前文に出ている人と物の代わりとなる。例：「这件衣服不是我的，那件才是我的。/この服はわたしのじゃない。その

⁴² 『岩波日中詞典』第二版 倉石武四郎・折敷瀬興 商務印書館 2003年

服はわたしのです。」②動詞と結合して、人あるいはある領域で働く人を指す。また、物も指す。例：「売菜的/野菜を売る人」「吃的/食べるもの」③同じ性質を持っている動詞また動詞文の後につき、「…たり、…たり」の意を表わす。例：「同学们扫地擦桌子的，忙个不停。/クラスメートたちは掃除をしたり、机を拭いたりして、忙しいようだ。」

Ⅲ. 陳述文の文末に来る。肯定の意を表す。例：「这件事的利害关系，我是清楚的。/この件について、利害関係がよく分かっているのだ。」

Ⅳ. 二つの数量詞の間に入る。①数量×数量という形になる。例：「这个衣橱是三米的一米五，合四点五平方米。/このタンスは三メートルかける 1.5 メートルで、合計 4.5 平方メートルである。」②数量+数量という形になる。例：「八个的四个，一共十二个。/八つプラス四つで、合計十二である。」

2.4.4.2 「の」に関するまとめ

日本語の「の」は、主に格助詞、準体助詞、終助詞、並列助詞、間投助詞に分かれている。「の」の文法機能について以下のようにまとめられる：

I. 格助詞。①連体修飾語をつくる。あとにくる語が表す所有・所属・内容や状態・性質・同格などについて限定を加えることを表す。例：「私の本」「空の星」「政治家の山下氏」下の体言との意味関係は単純ではない。②連体修飾の連文節の中で、あとに来る動作・作用・状態の主体であることを表す。例：「桜の咲くこと。」③助動詞「ようだ」「ごとし」の内容を表す。例：「雪のようだ。」

Ⅱ. 準体助詞。体言および用言の連体形につく。上の語といっしょになって全体を体言の資格をもった語とする。①体言について「…のもの」の意を表す。例：「ぼくがない。」②用言の連体形について、「もの」「こと」などの意を表す。例：「リングは赤いのがいい。」③用言の連体形について全体を体言化し、下に助動詞「だ（です）」をつけ、「…のだ（です）」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いる。例：「ついに失敗したのである。」

Ⅲ. 並立助詞。例：「貸すの貸さないのとさんざんにもめた。」

Ⅳ. 終助詞。完結した文の文末の活用語の終止形につく。イントネーションにより、断定・質問・命令などの意を表す。

V. 間投助詞。文節末に用いて、言葉の調子を整える。

2.4.4.3 「的」と「の」の共通点について

中日の辞書におけるそれぞれ「的」と「の」の文法機能を見てきたが、その共通点について、まとめてみる：

- I. 中日の辞書には、両方とも助詞という呼び方がされている。
- II. 中国語の「的」も日本語の「の」も名詞のあとにつき、修飾関係を示す。あとに来る言葉が表す所有・所属・内容や状態・性質などについて限定を加えることを表す。下の体言との意味関係は単純ではない。

- III. 名詞について、「…のもの」の意を表す。

例：「这件衣服不是我的，那件才是我的。/この服はわたしのじゃない。その服はわたしのです。」

- IV. 中国語の「的」は文末に来ることができる。肯定や断定・質問・命令などの意を表す。日本語の「の」も用言の連体形について全体を体言化し、下に助動詞「だ（です）」をつけ、「…のだ（です）」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いる。

例：「这件事的利害关系，我是清楚的。/この件について、利害関係がよく分かっているのだ。」

以上で述べているように、中国語の「的」と日本語の「の」は両言語で助詞と扱われ、名詞の後につき、前後の語の関係により、いろいろな意味関係が表される。また名詞・文末や用言の連体形について、全体を体言化し、つまり準体助詞の役割を果たす。

2.4.4.4 「的」と「の」の相違点について

1.4.4.3では中国語の「的」と日本語の「の」の共通点について述べたが、次はその相違点について見てみる。

- I. 中国語の「的」は名詞以外、形容詞・動詞のあとにつき、名詞を修飾するが、日本語の「の」にはない用法である。日本語の「の」は、中国語の「的」より、その役割

- により格助詞、準体助詞、終助詞、並列助詞、間投助詞と細かく分類されている。
- II. 名詞が名詞を修飾する場合、「的」が「の」と対応する場合と、しない場合がある。中国語の「的」には同格という用法がなく、「弟の太郎」を「弟弟太郎」のように、「的」がつかない。
 - III. 中国語の「的」は動詞と結合して、「送信的/郵便物を配る人」「卖菜的/野菜を売る人」のように、人あるいはある領域で働く人を指すという役割があるが、日本語の「の」には例が見つからない。
 - IV. 準体の用法について、日本語の「…のだ」「…のです」の形に対し、中国語の「…的」である。「的」もこの面で「の」に似ているところがあるが、「の」のほうが許容力が広いようである。しかし、中国語の「找我～麻烦。」のような、動詞と応接する場合もあるが、日本語にはないようだが、これからの課題にしたい。
 - V. 「的」は二つの数量詞の間に入る場合、足し算と掛け算の意を表すが、「の」にはない。

以上は中国語の「的」と日本語の「の」の共通点及び相違点についてまとめた。よく「の」が中国語の「的」に似ているといわれてきたが、辞書による説明を見てみると、異なるところも少なくはない。しかし、中日相互訳辞書における「的」と「の」の解釈を見てみると、いずれも「的」と「の」が類似するというふうに提示されている。中国語母語日本語学習者にとって辞書は日本語を勉強する一つの大切な手段であり、特に初級・中級の日本語学習者は中日相互訳の辞書にたよることが多い。辞書の提示も日本語学習者の「の」の習得に影響を与えるのではないだろうか。

2.5 中国語と日本語の対訳に現れる「の」と「的」

今まで研究されてきた論文は語と語が結合する（「名詞＋（の/的）＋名詞」だけの場合、以下語レベルと呼ぶ）場合の「の」と「的」の対照研究がほとんどである。しかし、これらの組み合わせが文の中に入る（「名詞＋（の/的）＋名詞」の形は文の中にある場合、以下文レベルと呼ぶ）とどうなるかについての研究は少ない。本研究では「の」と「的」がどのような関係にあるのかを見るために、中日現代小説の翻訳（中→日/日→中）を調べてみた。「の」と「的」の前後の語をそれぞれ修飾語（N1）と被修飾語（N2）に分け、語

と語の組み合わせを見ながら、更に文の中の「の」と「的」の相違に触れていきたい。「の」と「的」の必須の度合いが異なる点から、「の」と「的」の対応について次の四つ(2.5.1～2.5.4)に分けて、分析していく。「的/の」、「φ/の」と「の」は、次のことを表す。「的/の」は中国語の「的」も日本語の「の」も用いられる場合で、「φ/の」は中国語の「的」が省略できる場合で、「の」は中国語の「的」が不要の場合である。

2.5.1 「の」の必須に対し、「的」の準必須

語レベルでは「の」が必須で「的」も必須である。しかし文レベルになると「の」は必須であるのに対し、「的」は一般的には省けないが、文の焦点の置き方によって省く場合もある。つまり「的」の必須の度合いが「の」と異なる。そのため、「準必須」とする。

2.5.1.1 N1 (人) + N2 (物)

前項 N1 が「人」で、後項 N2 が「物」である場合。

中→日

例(6) 别人也给她烧起了香来求财问病，三仙姑的香案便从此设起来了。(小)

→…こうして、三仙姑の香づくえができた。

日→中

例(7) 僕はそう思うと、愛理の自由帳と鉛筆を借りて、こう残していった。「愛理へ。明日は朝からきます。楽しみにしててね。啓」そう書いて、ベッドの中央に置いた。

(結)

→想到这，我便拿起爱理的记事便签和铅笔，写了留言：“爱理，我明天早上来，等着哦，启”写完便放到了床中间。

N1	+	N2
三仙姑	的/の	香案
愛理	的/の	自由帳と鉛筆

例(6)、(7)のような所有を表し、所有の場合は張(2009)は「修飾部がヘッ드의所有者である場合、日本語では、修飾部及びヘッドがいかなる名詞あるいは人称代名詞である

うと、その所有関係が持ち主と持ち物であろうと、創作者と創作物であろうと、「の」は必須で、同じように中国語の「的」も使わなければならない」と述べている。しかし、このルールは文にも当てはまるのであろうか。実際には、次のような例が見られる。つまり中国語の「的」は常に必須とならないのである。

例(8) 僕の部屋でよく聴いたザ・ビートルズ。とりわけよく聴いたアルバムが RUBBER SOUL だ。(青)

→ 经常在我房间里听的甲壳虫乐队的歌曲中，常听的专辑是“橡胶灵魂”。

例(8) では所有を表しているが、中国語の訳は「我的房间」ではなく、「我房间」となっている。例えば、「我手表坏了，不知道时间。(私の腕時計は壊れたので、今何時か知らないよ)」のように、所有を表しているのに、「我手表」には「的」がついていない。「我手表坏了」と「我的手表坏了」両方ともいえるが、重点の置き方が異なっている。「我手表坏了」は焦点が「坏了」にあり、「我的手表坏了」は焦点が「我的」にあり、ほかの誰の時計でもなく、「私の」であるというニュアンスを表しているようだ。つまり「名詞＋(の/的)＋名詞」の形は日本語も中国語も必須であるが、中国語の場合、文の中では「的」の有無が文意に影響するといえる。

2.5.1.2 N1 (人) +N2 (抽象名詞)

前項 N1 が「人」で、後項 N2 が「抽象名詞」である場合。

中→日

例(9) 这两首歌便构成了他的青春，他的充满了甜蜜与苦恼的初恋。(海)

→このふたつの歌がかれの青春と、甘美で苦悩に満ちた初恋を形づくった。

例(10) 今天小林的表现很不错。

→今日、林さんの調子はよかったよ。

日→中

例(11) 愛理の笑顔を確認してから、僕はビデオデッキにテープを差し込んだ。(結)

→我看到了爱理的笑脸后，将录像带插进了录像机里。

例(12) お母さんの表情から伺える。(結)

→从妈妈的表情中就可以领会到。

N1	+	N2
他	的/の	青春
小林	的/の	表现
愛理	的/の	笑顔
お母さん	的/の	表情

青春・表現・笑顔・表情などは人（修飾語）が発するものかその人によって経験されるもの（青春）なので、所有とする。日本語の「の」と同様「的」がつく。しかし次のような「的」がないものも見られる。

例（13）僕の口調はいささかぶっきら棒だったかもしれない。（青）

→我语调可能有些生硬，但事实上我是想更温柔地回应。

以上の例のように、「我语调」は語レベルでは「的」がないと誤りとなる。しかし、例（13）から文中では「的」がなくても意味に支障がないことがわかる。つまり必須に近いのであるが、日本語の「の」と違ってどんな場合でも「的」を省いてはいけないとはいえない。

2.5.1.3 N1（人の体）+N2（N1の部分）

前項 N1 が「人の体」で、後項 N2 が前項「N1 の部分」つまり人の体の部分である場合。

中→日

例（14）说着就拉住小芹的胳膊悄悄地说。（小）

→そういうと、小芹の腕をぐいと引っ張って、そっといった。

日→中

例（15）お父さんがお母さんの肩を抱いて慰めている。しかし、その目には大粒の涙が浮かんでいた。（結）

→爸爸抱住妈妈的肩膀安慰她，然而，爸爸眼中也流出了大滴的泪水。

N1	+	N2
小芹	的/の	胳膊
お母さん	的/の	肩

人の体の部分とする場合、「私の手、彼の足」は「我的手、他的腿」となり、所有に似ているようだが、実は物の所有と異なり、語レベルでは「の」が必須で、「的」も省けな
いが、「私の手が痛い／我的手（我手）疼」、「彼の足が不自由だ／他的腿（他腿）不方便」
のように文レベルとなると両方ともいえる。しかし文の焦点が「痛い」、「不自由」にある
ときは「的」を入れないのが一般的である。

2.5.1.4 N1（時・場所）+N2（人・物・組織集団・場所・抽象名詞）

前項 N1 が「時・場所」で、後項 N2 が「人・物・組織集団・場所・抽象名詞」などである
場合。

中→日

例（16）在香椿树街的妇女看来，小拐能活下来是一个奇迹。（刺）

→香椿樹街の女たちからすれば、拐が生きながらえたのは奇跡だった。

例（17）印家厚必须赶上六点五十分的那班轮渡才不会迟到。（生）

→六時五十分のフェリーに乗れば、どうやら遅刻にならない。

日→中

例（18）彼女の笑顔は真冬に似つかわしくないほどに温かく、けれど十二月のイルミネー
ションのように狂うことなく景色に馴染んでもいた。（新）

→ 她的笑脸，与严冬的气候形成鲜明的对照，温暖热烈，然而又与 12月的灯饰一
样，祥和地融进眼前的景色里。

例（19）駅のホームには「本町夏祭り」のポスターが張り出されていた。（図）

→车站的站台上，贴出了“本町夏日祭典”的海报。

N1	+	N2
香椿树街	的/の	妇女

六點五十分 的/の 那班輪渡
 十二月 的/の イルミネーション
 駅 的/の ホーム

N1 は時・場所を表す。例 (16) ~ (19) のように、日本語の「の」は中国語の「的」と対応している。N1 (修飾語) が時間と場所である場合、その後に見える名詞との間には「的」を入れるのが普通である。また、例⑨は「车站(的)站台上, 贴出了“本町夏日祭典”的海报。」のように、意味が理解されれば、「的」を省いても言えなくないようである。

2.5.1.1~2.5.1.4 より、語レベルでは、日本語の「の」は必須で、中国語の「的」も必須であることがわかった。しかし、文レベルでは例 (8)、例 (13)、例 (19) のように文の焦点の置き方の違いにより、意味上の支障がない限り中国語の場合は「的」を省く傾向がある。日本語学習者が「の」をつけなければならないところで、「の」をつけないのはその影響を受けているからと考えられる。日本語の「の」は中国語の「的」に相当するという教科書の解説も日本語学習者に影響があると思われる。

2.5.2 「の」の必須に対し、「的」の省略

語レベルでは、「の」が必須で「的」が任意である。文レベルでは、「の」が必須で「的」がなくても意味理解に問題ないため、省略されるのが一般的である。

2.5.2.1 N1 (人) + N2 (人 : 人間関係を表す)

前項 N1 が「人」で、後項 N2 が前項 N1 と「人間関係」を表す場合。

中→日

例 (20) 一天, 金旺的爹到三仙姑那里问病。(小)

→ある日、金旺のおやじが三仙姑のところへ病気のお伺いをたててもらいにやってきた。

例 (21) 三仙姑教她说：“谁再这么说，你就说‘是你的姑姑’。”(小)

→三仙姑は娘にいいふくめた「だれかがこんどそんなことを言ったら、お前はこう言っておやり。『いいえ、あたし、あんたのおばさんよ』って」

日→中

例 (22) 実は、私の友達なんだけど、前々から告白したい子がいるんだけど、… (初)

→实际上啊，她是我的朋友，心里早就有了想要表白的男孩，…

例 (23) やがて、彼女の夫であろう人の声が聞こえてきて、彼女は「またね」と言って家の中に戻っていった。(新)

→不一会儿，听到了好像是她丈夫的一个男人的声音，她说了声“再见”就返回到家中。

N1	+	N2
金旺	的/の	爹
你	的/の	姑姑
私	的/の	友達
彼女	φ/の	夫

以上のような人名・人称名詞との結合について、所有か所属かさまざまな議論がある。本研究では人間関係とする。日本語は「N1 + (の) + N2」となる。中国語は修飾語によって「的」の使用が決まる。親友親戚関係、社会的人間関係を表すとき、あまり「的」を用いない(張麟声・2009)とある。しかし、実際にはそうともいえないようである。例(21)では「的」は N1 と N2 との関係をはっきりさせる意味で使われ、「的」が必要とされるが、例(20)、例(22)、例(23)は「的」が省ける。例えば「你爸爸/你妹妹/她妈妈/我弟弟/你朋友/她同学」ともいえる。しかし「的」の有無は丁寧さにもかかわり、目上の人に対しては、「的」がないと、やや失礼ないいかたとなる。また中国語は日常生活で親しみを表すため、「爸爸/妈妈/妹妹/哥哥…」を「爸/妈/妹/哥…」と略称し、「你爸/你妹/他妈/我弟」は、会話の中で目下の人に使うようである。この中の「你妹」は、代名詞「你」+「妹」であり、人を罵る場合に使われるので、相手を怒らせるなどの誤解を招くため、注意する必要がある。具体的な名前の場合、「小李」+「妹妹」では「你好，请问小李妹妹在吗？」この「小李妹妹」は小李の妹(関係)のことを指すか発話者の妹の小李(同格)か両方の意味を持つので、文脈より判断するしかないようである。

2.5.2.2 N1 (人) + N2 (組織集団)

前項 N1 が「人」で、後項 N2 が「組織集団」である場合。

中→日

例 (24) 后来当嫻的那张照片登在《明星》画报上时，她已经成为孟老板的电影公司的合同演员。(嫻)

→のちに嫻のその写真が『明星』に載った時、彼女はすでに孟社長の映画会社の専属俳優になっていた。

日→中

例 (25) 君は、今日、俺の高校に転向して来た本人か？ (幻)

→你是今天转到我们学校来的那个人吗？

N1	+	N2
孟老板	的/の	电影公司
俺	φ/の	高校

例えば「私の会社」の場合、私が所有する会社と私が所属する (N1 は N2 に属する) 会社の二つの意味が考えられる。中国語の場合も同じく所有か所属か名詞と名詞の結合からだけでは判断できず、文脈から判断するしかない。また日本語ではいずれも「の」が必須となり、中国語では「的」があってもなくても構わない。しかし、文の中では「小王 (的) 公司生意很好 / 小王的 (所有する) 会社は商売がなかなか順調だ」、「小王公司明天放假 / 小王的 (勤めている) 会社は明日休みだ」のように、「的」を省くのが普通である。

2.5.2.3 N1 (組織集団) + N2 (人：職業も含む・物)

前項 N1 が「組織集団」で、後項 N2 が「人・職業・物」である場合。

中→日

例 (26) 石红的爸爸是区上的一个干部，妈妈是个小学教师。两口子都是在轰轰烈烈的“四清”运动里入党的。(ク)

→石紅の父は区の幹部、母は小学校の教師をしており、二人とも激的な「四清」

運動の中で入党した。

日→中

例 (27) あの頃僕は、学校の友達よりも親戚のおじさんよりも、お姉さんが大好きだった。

(新)

→那时，比起学校的同学来，比起亲戚叔叔来，我更喜欢这个姐姐。

N1	+	N2
区上	的/の	一个干部
小学	φ/の	教师
学校	的/の	友達

N2 が N1 に属する (2.5.2.2 と異なる) 場合、例 (26) のように「的」はあったり、なかつたりしているが、日本語の「の」は必須である。特に、被修飾語が「職業」(公司职员/会社の社員、工厂工人/工場の労働者) である場合、「的」がないのが一般的である。例 (26) の「区の幹部」と例 (27) の「学校の友達」は「区干部」、「学校同学」とも言える。また、N2 がもの (学校的通勤车/学校の送迎バス) や人名 (索尼公司的铃木/ソニーの鈴木さん) の場合、「的」をつけることが多い。しかし、「ソニーの鈴木さんが提案した企画書が面白い。/索尼公司铃木提出的企划案很有意思」のように、「の」が必須であるのに対して、「的」が省略されている。

2.5.2.4 N1 (動物・物・場所) + N2 (N1 の部分)

前項 N1 が「動物・物・場所」で、後項 N2 が「(動物・物・場所) の部分」である場合。

中→日

例 (28) 狗毛上泛起的温暖渐渐远去…… (枯)

→犬の毛に浮かぶ温かさが徐々に遠ざかって…

日→中

例 (29) それ聞こえてくるなり、彼は、部室の扉を全開にした。(初)

→刚一听到这话，他马上就将社团教室的房门打开了。

N1 + N2
 狗 φ/の 毛
 部室的/の 扉

全体と部分の関係で切り離せない場合 (2.5.1.3 と異なり、N1 (修飾語) が人以外の場合である)、「木の葉っぱ、象の鼻、部屋のドア」「树的叶子 / 树叶、象的鼻子 / 象鼻子、房间的門 / 房門」のように、「の」が必須であるのに対し、「的」はあってもなくてもいい。また「象的鼻子長」よりむしろ「象鼻子長」のほうがより自然であろう。日本語は「の」がないと非文となるが、中国語では「的」がない方が逆に文が自然になることもある。つまり文の中に入ると、日本語と異なり、「的」が省略される傾向がある。

2.5.2.5 N1 (内容・固有名・材料・抽象名詞など) + N2 (物・抽象名詞など)

前項 N1 が「内容・固有名・材料・抽象名詞など」で、後項 N2 が「物・抽象名詞など」である場合。

中→日

例 (30) 我跟小华的关系，县委强调了，说这是个世界观的问题，也是个阶级路线问题。(傷)

→また県委員会では、僕と曉華とのことを取り上げて、これは世界観の問題であり、階級路線の問題でもあるとっている。

例 (31) …似一匹抖开了的棕绸缎，从树梢上直挂下来，那根她选中的树杈抽打着绸缎，索然有声。(枯)

→その体はふりひろげた褐色の絹の布のように伸びて梢からたれさがり、欲しかったあの枝がその絹の布を鞭うって乾いた音をたてた。

日→中

例 (32) そこから土の匂いや枯草の匂いや水の匂いが冷やかに流れ込んでこなかった(蜜)

→窗外渐渐地亮堂起来，泥土味、枯草味、水气味也随着寒气从窗外飘进来…

例 (33) これでザ・ビートルズの CDが全部揃った。(青)

→到此，甲壳虫乐队的 CD唱盘就齐全了。

N1	+	N2
世界观	的/の	问题
阶级路线	φ/の	问题
绸	φ/の	缎
土・枯草・水	φ/の	匂い
ザ・ビートルズ	的/の	CD

例 (30) ~ (33) のような N1 は内容、材料、固有名、抽象名詞などを表す名詞で、N2 を修飾する組み合わせである。日本語は「の」を全部つけなければならないが、中国語の「的」の有無は任意である。例 (32) のような内容を表す場合、中国語は「泥土味、枯草味、水気味」となっているが、「泥土的味道、枯草的味道、水气的味道」ともいえる。しかし、同じ内容を表す「例 (5) この本は歴史本です。/这本书是历史书」だが、ここに「的」を入れたら、「历史的书」となり、「歴史という人が持っている本」または「誰かが書いた『歴史の本』というタイトルの本」というふうに誤解されやすく、意味が分かりにくくなるため、日本語を使うときも「の」を省いてしまうことが多い。この部分については、さらに分析の必要があると考える。

2.5.2.1~2.5.2.5 のように、日本語の「の」は必須であるのに対し、中国語の「的」はあったり、なかったりしている。「名詞+ (の) +名詞」には「の」を省いてはいけませんが、「的」はそうでもない。N1 (修飾語) と N2 (被修飾語) は名詞前後の関係が変わると、「的」の有無も変わってくることから、特に文の中に入れると、省略されやすい傾向も見られる。中国語の「的」は日本語の「の」が必須であるのと違い、任意であることがわかった。

2.5.3 「の」の必須に対し、「的」の不要

語レベルでは「の」が必須で、「的」が不要である。文レベルでも同様に「の」が必須で、「的」が不要である。

2.5.3.1 N1 (数量・序数) +N2 (人・物・時・場所・組織集団・抽象名詞)

前項 N1 が「数量詞」で、後項 N2 が「人・物・時・場所・組織集団。抽象名詞など」で

ある場合。

中→日

例 (34) 月亮升着, 太阳落着, 星光熄灭着的时候, 一个孩子从一扇半掩的柴门中钻出来。

(枯)

→月が昇り、日が沈み、星の光が消える頃、ひとりの少年が半開きのしおり戸から抜け出てきた。

日→中

例 (35) 僕はバッグの中から一本のビデオテープを出した。(結)

→我从包中拿出一盒录像带。

N1	+	N2
一个	の	孩子
一本	の	ビデオテープ

N1 が数量の場合、「一本のビデオテープ」、「三日目の朝/第三个早上」、「二つの部屋/两间屋子」、「一つの学校/一所学校」、「二度の青春/两次青春」のように、日本語では「の」が必須であるのに対し、中国語では「的」があるのは間違いとなる。これも中国語母語日本語学習者にとっては難問であり、「の」を省いてしまうことが多い。

2.5.3.2 N1 (人 : N2 と同一関係) + N2 (人)

前項 N1 である N2 の関係を表し、N2 を具体的に説明することになる。あるいは N1 が総称的な名称を示す名詞で、N2 が N1 を代表する名詞である場合。

中→日

例 (36) 那时金旺他爹已经死了, 金旺兴旺弟兄两个, 给一支溃兵作了内线工作, 引路绑票…

(小)

→そのこと金旺のおやじはもう死んでいたが、金旺・興旺の兄弟二人は敗残兵の一隊のために密偵をつとめ、道案内をして人さらいをやらせ、…

日→中

例 (37) あの頃僕は、学校の友達よりも親戚のおじさんよりも、お姉さんが大好きだった。

(新)

→那时，比起学校的同学来，比起亲戚叔叔来，我更喜欢这个姐姐。

N1	+	N2
金旺旺	の	弟兄两个
親戚	の	おじさん

以上のような同格を表す例は中国語母語日本語学習者が間違いやすいケースの一つである。N1 と N2 は同一関係をいう場合、中国語は「的」がつかないのに対して、日本語は「の」が必須であり、「の」をつけないと不自然な日本語となる。これらの母語干渉の影響を受けて、「弟の太郎」を「弟太郎」と間違い、「の」を省く例も少なくない。

2.5.3.3 N1 (場所・物) + N2 (N1 との位置関係)

前項 N1 が「場所・物」で、後項 N2 が方角を表わす語で N1 との位置関係を示す場合

中→日

例 (38) 站在高高的台阶上向南望去，你面对的是一架线条和缓的绿茸茸的小山。(第)

→高い石段の上に立って南を望むと、正面は綾線のなだらかな青々とした丘だ。

日→中

例 (39) 僕はバッグの中から一本のビデオテープを出した。(結)

→ 我从包中拿出一盒录像带。

N1	+	N2
台阶	の	上
バッグ	の	中

日本語では「上」は他の名詞に依存しなくても成立するが、ここの「石段の上」の「上」、「バッグの中」の「中」は中国語では方位詞（あるものを基準に、その位置を表す）といい、独立では使われない（同じようなのは下、左、右、隣、そば、前、後ろ、東、西、南、

北などがある)。これらは基準となる名詞と結合し、補助の機能のみで、N1 の位置や方角を表し、中国語の場合は「的」がつかない⁴³。

2.5.3.1、2.5.3.2、2.5.3.3 より、日本語の「の」は必須で、中国語の「的」は不要であることがわかった。この部分も実際に使用するとき、「の」に関する知識を十分に消化していないため、一番「の」を抜かしやすい部分である。

2.5.4 「の」の連続に対し、「的」の連続回避

「N1 の N2…の N」が 1 文に「の」が複数ある場合。

中→日

例 (40) “没，没有写什么。”妈妈脸上忽然一阵惊慌，忙去掩桌上的纸头。(傷)

→「あ、何でもないので」母はあわてて机の上の書きかけの紙をかくす。

例 (40) は「N1 の N2 の N3 の N4」の形として複数の「の」が出ている。「机の上」と「書きかけ」は「紙」を修飾する。「机の上」は「桌上」と訳され、「的」がつかない。「書きかけ」は動詞の連用形の形で名詞化され、「の」を用いて「紙」を修飾しているが、日本語は用言に連体形があるので、「机の上にある書きかけた紙」ともいえる。動詞連体形は名詞を修飾する場合、中国語では「的」がつくので、「机の上」と「書きかけの紙」の間の「の」は「的」に訳さなければならない。またこの「書きかけ」の動詞連用形（動名詞）で「紙」を修飾する部分も、中国語では「的」を用いない形で訳されている。しかし、ここで注目すべきところは日本語の用言の連体修飾に関することである。動詞の連体形で直接に名詞を修飾すると「書きかけた紙」となり、例 (40) のように複数の「の」を使わずに済む。なぜ動詞の連体修飾ではなく、複数の「の」が用いられているのであろう。名詞と名詞の結合以外にも、「の」の文章の中で果す何らかの機能があるのではないかと考えられる。

日→中

例 (41) 先日の実験において、パナソニック社の携帯電話の性能の 12.5%の向上を確認し

⁴³ 「台階的上面」といういい方もあるが、日本語の「上」、「下」のような方角を表わす語に対応する中国語の“上”、“下”を中心にするため、本研究からはずしている。

た。(実)

→经日前的实验，证实了索尼公司的手机性能提高了12.5%。

「N1 の N2 の N3 の N4 の N5」の場合、「パナソニック社の携帯電話の性能が12.5%向上したことを確認した」といいかえられる。「パナソニック社」は「携帯電話の性能」を修飾すると見ていいだろう。すでに述べたように、中国語では組織・集団は職業以外を修飾する場合、「的」がつく。「携帯電話の性能」の「性能」は機械などの性質や能力を意味し、中国語では「性能」のような名詞はいろいろな名詞とつきやすく、「的」をつけないで、直接名詞につけて使われる。また名詞の「一語」とはいえないが、「电脑性能」「防水性能」「产品性能」「CPU 性能」「高性能」のようにいくらでも新しいものを生み出せ、「的」が見つからないほうが一般的である。日本語の漢語動詞はよく名詞として使われるようであるが、ここの文をそのまま訳したら「索尼公司的手机的性能的12.5%的向上」となり、理解不可能な文になる。また「向上」は中国語では名詞としては使われず、動詞としてのみ訳される。このように日本語の原文では「の」が五つ使われるのに対して、中国語は「的」が一つしか用いられていない。例(41)のような漢語動詞について、その使い方によって、「の」の使用も「の」の有無も変わってくる。また映画の名前では、『言の葉の庭』(言葉之庭)のような例は「N1 の N2 の N3」中国語訳は「的」が全くなく、むしろ「的」のある方がおかしい。

つまり「N1 の N2…の N」の形で日本語の場合は全部「の」をつけなければならないし、また「の」が重なってもあまり不自然ではない。しかし、中国語の場合は「的」が多いのは不自然になるため、できるだけ少なくする傾向があるといえよう。

2.6 まとめ

以上から中国語母語日本語学習者における「の」の誤用については次のように分類ができる。

1) 「の」の過使用：日本語は「名詞+ (の) +名詞」という形で、他は連体形となるが、中国語では用言で名詞を修飾する場合、必ず形容詞と動詞の後に「的」がつく。その影響を受けて、日本語の場合にも、形容詞と動詞の後に「の」を使う誤用が多いようだ。たと

えば「*美しいの服」、「*きれいなの人」、「*食べるのもの」などが見られる。

2) 「の」の任意使用：日本語の場合は前後の成分に問わず、「の」をつけなければならないのに対して、中国語の場合はつけるのとつけてもつけなくてもいい場合がある。すでに述べたように所有、所属またはそれに似ている組み合わせでは、「的」とその前後の関係は日本語の「の」ほど緊密ではないことがわかった。例(6)のように物の所有の場合、日本語の「の」も中国語の「的」も省略しないが、文の中に入ると例外もある。人間関係の場合、「的」があってもなくてもかまわない。「你的妹妹/你妹妹」日本語に訳すと「あなたの妹/*あなた妹」となるが、中国語の場合「的」がない場合とある場合は意味が異ってくる。文脈によっては、目上の人に対しては失礼となる。また所属の場合、被修飾部の名詞によっても、「的」がつくつかないかが異ってくる。全体と部分の場合でも、「的」の有無は任意性を持つことがわかる。また「小学教师」「历史书」「你公司」のような中国語では「的」を省くのが普通であるため、日本語に訳すと「小学校先生」「歴史本」「あなた会社」のようになりがちである。

3) 「の」の不使用：これに対して、数量詞「(数詞+助数詞)など」は名詞を修飾する場合、例えば、例(34)「一个孩子」、例(35)「一盒录像带」、例(38)「台阶上」を日本語に訳したら「ひとり少年」、「一本ビデオテープ」、「石段上」のような間違いがよく出てくる。また同格の場合、例(36)「金旺・興旺の兄弟二人」、例(37)「亲戚のおじさん」のように、日本語では必ず「の」がつくが、中国語は「的」が必要とされないため、「の」を省いてしまうケースも少なくない。

4) 「の」の使用回避：一つの文に「の」が複数ある場合を指す。2.4.4で述べたように「N1のN2…のN」の形で日本語の場合は全部「の」をつけなければならないが、中国語の場合は「的」を多くつけると不自然になるため、できるだけ少なくしようとする傾向がある。要するに、中国語の影響により都合のいいところに「の」をつけてしまう傾向がある。以上の41例から、教科書の日本語の「の」は中国語の「的」に相当するという説明は適切ではないといえよう。

以上で分類したように、日本語の「の」と中国語の「的」は対応するものと対応しない

ものがあることがわかった。中国語の「的」がつかなくても意味理解に支障が出ないが、日本語は違う。その他、用言（形容詞・動詞）と他の語との組合せもある。中国語は「的」がつくのに対して、日本語は連体形を持つ。

中国語の「的」は日本語の「の」に相当すると教科書によく書かれているが、すでに述べたように、それは一部分の名詞と名詞との結合に限られており、それに「太郎の弟」は「太郎的弟弟」と訳すが、「弟の太郎」の場合は「弟弟的太郎」とすると特殊な文脈でしか理解できなくなる。更に小説などに見られる長文で、「の」が複数ある複雑な文章になると、日本語の「の」と中国語の「的」は対応しなくなり、異なってくる。これらの点で中国語母語日本語学習者にとって、「の」の習得は非常に難しいところである。日本語の教科書における「の」に関する説明はさらに工夫があるべきだと考える。

第3章 「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」

第2章では、中日現代小説の対訳を通して、日本語の「の」と中国語の「的」が対応するかしないかを語レベルだけではなく、文レベルでも分析し、中国語母語日本語学習者の「の」の誤用のパターンを四つに分け、さらに12種類に分類した。それを基にアンケート用紙を作成し、調査を実施した。第3章では、アンケート調査（P73のグラフ1を参照）から全体の誤用率を概観したうえで多様な「の」の用法のうち、誤用が多く見られた「一本の木」のような「数量詞+の+名詞」⁴⁴を取り上げ、「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」と比較しながら、日本語学習者の誤用の原因を分析していく。

3.1 「数量詞+の+名詞」に関する研究

日本語教育の分野では、「数量詞+の+名詞」に関する研究はそれほど多くないようである。日本語学習者における間違いやすい項目として取り上げられることがあり、以下にいくつか挙げる：

庵ほか（2000）は存在に関する表現（存在文）に出てくる数量詞の語順について以下のように述べている。

例：①この部屋にはテレビが2台あります。

②2台のテレビは隣の部屋にあります。

存在する人やものの数量を限定するとき、人やものが話に初めて出てきたもの場合は、例①のような「～に<主語>が《数量詞》いる/ある」という語順になり、人やものが話に既に出てきたもの場合は、例②のような「(《数量詞》の) <主語>は～にいる/ある」という語順になる。

また、例③我が家には2匹の犬がいます。

④昨日は3通の手紙を書いた。

③a 我が家には犬が2匹います。

⁴⁴ 奥津敬一郎（1983），pp. 1～24。数量詞には2種あり、「2人の留学生」のような主要語の表すもの数や量を表現しているのにたいして、「50円の切手」のような主要語の表すもの自身の性質を述べているとされる。本稿は前者を中心に論じ、後者に触れない。

④b 昨日は手紙を3通書いた。

③と④のようなガ格およびヲ格の名詞を限定するための数量詞は、③aと④bのようにその名詞の後ろに助詞をつけないで用いる場合もあると述べている。

カラ格・デ格・ニ格の名詞など他の場合はこのような表現はできない。

例⑤ 2人の友達から手紙をもらった。

⑥ *友達から2人手紙をもらった。

また、「数量詞＋「の」＋名詞＋「が/を」」の形と「名詞＋「が/を」＋数量詞」の形がいつも使えるわけではなく、使えても意味が異なる場合もあるので、注意が必要だと指摘している。

しかし、以上の指摘については具体的に「数量詞＋「の」＋名詞＋「が/を」」の形と「名詞＋「が/を」＋数量詞」の形はどのような場合、使えないのか、また意味がどのように異なるのかを論じられていない。

張麟声(2011)は「昨夜一場の雨が降った」という誤用から、中国語母語日本語学習者が「一＋X」の過剰使用について、「一＋助数詞」中国語の文法で特殊な役割を果たすと述べ、文学的な「にせ助数詞」の乱用、中国語にあって、日本語には相当する助数詞がないこと、其の上、これらは文学的なニュアンスが強いものであるために、日本語母語話者からの訂正の助言が容易に得られない。また中国語における「一＋助数詞」は英語の不定冠詞の「a」の文法機能に似ていて、「一杯のうどんをください」のような誤用が頻繁に現れると述べている。しかし、本調査の「数量詞＋の＋名詞」に関するデータは張麟声の主張と異なり、日本語学習者が「の」を抜き、「数量詞＋名詞」となるか、「名詞＋が＋数量詞（副詞的）」のほうが使われている結果となっている。

建石(2013)は日本語の数量表現を考察の対象として、「N＋の＋数量詞」⁴⁵、「数量詞＋の＋N」、副詞句としての数量詞の用法について分析を行っている。「N＋の＋数量詞」には部分を表す用法と同格を表す用法があり、同格を表す用法はNの属性を対比する場合と代名詞の内容を詳しく述べる場合という二つの使用条件がある。「数量詞＋の＋N」は対比する場合、数量が少ないことを表す場合、基準となる場合、名詞の特性を問題する場合、特定性が関係する場合、全体性を表す場合ということが使用条件となる。副詞句としての

⁴⁵ 建石は「昨日、ゼミ生の2人が研究室にやってきた。」の中の「ゼミ生の2人」の場合を指す。「ゼミ生」が他にも数多く存在し、その中の「1人」や「2人」を取り上げている。そのため、部分を表わす用法の使用条件とはNが表わすものが数多く存在し、その一部分を取り上げる場合ということになると述べている。

数量詞は他の数量表現とは異なり、使用条件は存在しないものの、全体性を表す場合には使用できないと述べている。また日本語の数量表現と中国語の数量表現の対照研究を行った。日本語の数量表現のうち、「数量+の+N」が表す対比する場合、基準となる場合、名詞の特性を問題にする場合、特定性が関係する場合は対応する表現がある。「N+の+数量詞」の各用法、「数量詞+の+N」の数量が少ないことを表す場合は対応する表現がないと指摘している。

他に中川・李（1992）、西山（2003）、岩田（2006）等がある。

奥津（1969・1983・1996a, b）は名詞と数量詞と格助詞を含む数量的表現には、三つの型があることを指摘している。

- ①昔或る所に仔豚 3 匹が住んでいました。
- ②昔或る所に仔豚が 3 匹住んでいました。
- ③昔或る所に 3 匹の仔豚が住んでいました。

またこの三つの型を以下のように表記している。

- ①a. NQC 型（名詞+数量詞+格助詞）「仔豚 3 匹が」
- ②b. NCQ 型（名詞+格助詞+数量詞）「仔豚が 3 匹」
- ③c. Q の N 型（数量詞+の+名詞）「3 匹の仔豚が」

①a と②b に関して、「NQC 型」を基底構造とし、数量詞 Q を移動させる分析を提案する。すなわち、次に示されているように、①が基底構造で、数量詞の「3 匹」を移動することを通して、②を生み出す。

①昔或る所に仔豚 3 匹が住んでいました。→②昔或る所に仔豚が 3 匹住んでいました。

また③c の「Q の N 型」については、「の」を「だ」の連体形とし、「3 匹の仔豚」は「仔豚は 3 匹だ」のような「だ型文」の連体構造であると主張している。

奥津が主張している遊離数量詞構文の分析における数量詞移動を仮定する論点についてはほかに神尾（1977）、三原（1998）、北原（2001）などがある。

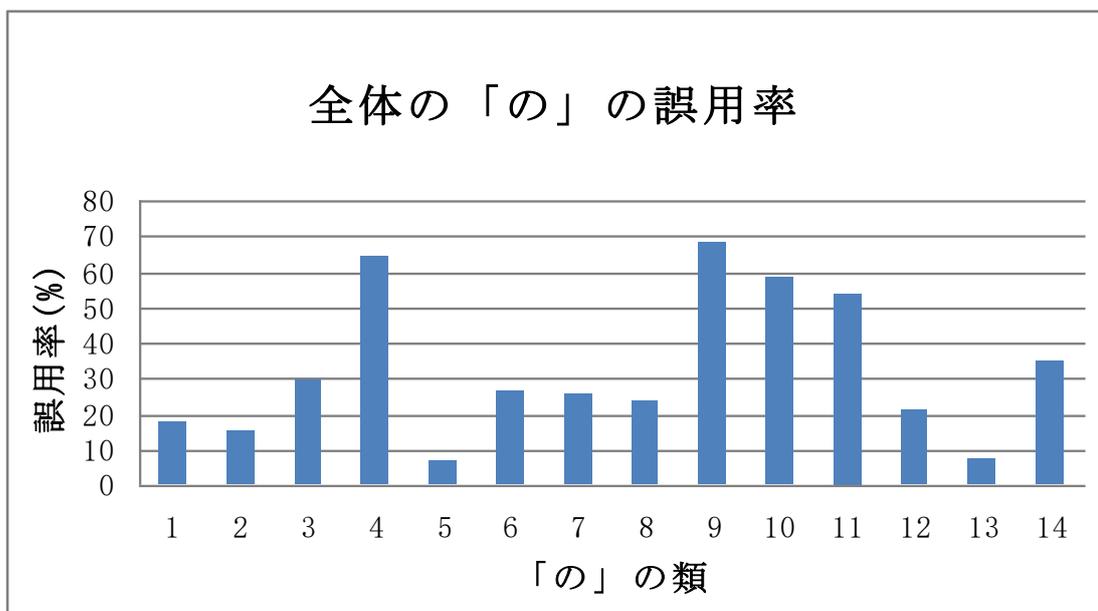
本章では「数量詞+の+名詞」という形を中心に、「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」と比較し、日本語教育の視点からどのように日本語学習者に提示すればいいのかを目的とするため、ここでは「遊離数量詞」という用語を用いず、遊離数量詞構文に言及しない。

先行研究については、数量詞に関する研究は語順や母語の影響及び使用条件などについて論じられているが、日本語教育の現場で、実際に「数量詞+の+名詞」がどういうふう
に教科書に提示され、日本語学習者がどのように受け止めているのか。また数量詞の副詞
的用法とはどのように関連しているのかにあまり言及されていない。本章ではこれらの問
題について、アンケート調査のデータを通して考察する。

3.2 アンケート調査から見る「数量詞+の+名詞」

前述（1.2.2）のように、連体助詞の「の」の使用状況を把握するため、中国の大学で
日本語主専攻の学習者を対象とし、「の」に関するアンケート調査を行った。アンケート
調査の第一問の14項目（P14-15を参照）の「の」の誤用に関する全体状況をグラフ1
に作成した。それを通して、「の」に関する各項目の誤用率を概観したうえで、その中の
誤用率の高い10番目の「一本の木」を取り上げ、本章では「数量詞+の+名詞」を中心
に分析していきたい。

まず下のグラフ1（全体から見る第一問の14項目の「の」の誤用率）を見てみる。



グラフ 1⁴⁶ (全体から見る第一問の 14 項目の「の」の誤用率)

グラフ 1 は一年生から四年生までの 14 項目の「の」の誤用率についての全体図である。最も誤用率の高いのは 9 番目の「人生の悲劇」67.87%、次いで 4 番目の「腕の中の赤ちゃん」64.05%、三位は 10 番目の「一本の木」58.68%である。本章⁴⁷では 10 番目の誤用について考察する。この結果から見ると、日本語学習者が「数量詞+の+名詞」の「の」を十分習得しているとはいえないだろう。10 番目の「一本の木」についてはどのように考えたらいいだろうか。中国語では、数量詞が名詞を修飾する場合、「的」が用いられないので、日本語になるとその母語の干渉を受け、「の」を省略してしまうと考えられることが多いだろう。10 番目の「一本の木」では、数量詞は名詞として扱われているといえる。名詞が名詞を修飾する場合に、「歴史の本」と同じように「の」をつけなければならない、「の」がないと非文になる。しかし、すべてが母語の影響だとは考えにくい。

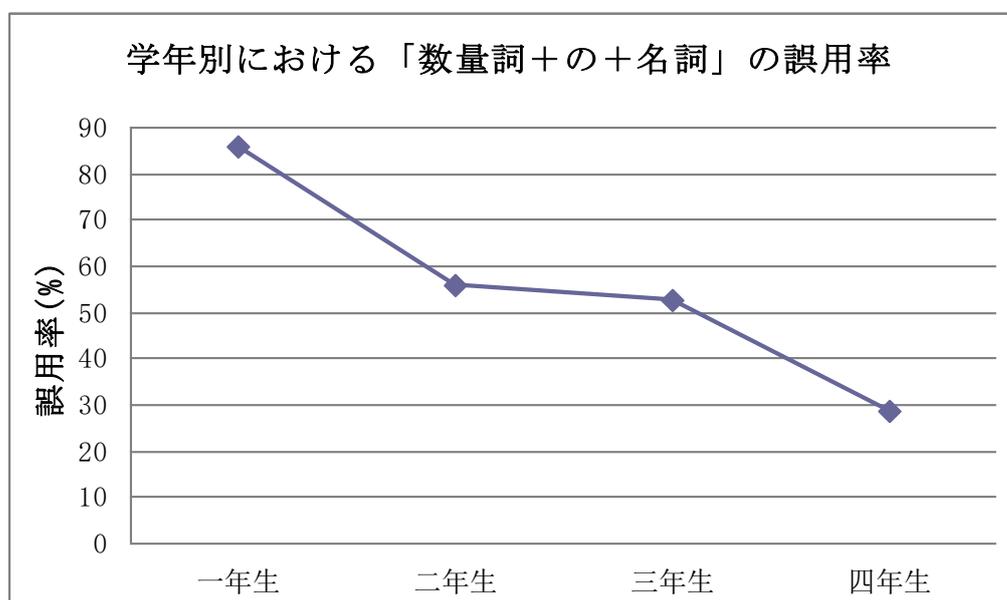
ところで後述のように中日で使用されている日本語の教科書を調べてみると、意外なことに、主に「名詞+が/を+数量詞 (副詞的)」の教え方で、「数量詞+の+名詞」についての例文や説明がほとんど提示されていないことがわかった。それが 10 番目の「一本の木」の誤用率が高いこととどのように関係しているのかを探ってみたい。

⁴⁶ 10 番目の「一本の木」以外の項目は P14-15 の 1.2.2 の調査内容を参照。

⁴⁷ 一番誤用率の高い 9 番目と誤用率二位の 4 番目を分析に取らなかったことについて第 8 章の 8.1 (P161-163) にて説明している。

日本語において、名詞が名詞を修飾する場合「の」をつけなければならないが、中国語では修飾語と被修飾語により、「的」の使用・不使用が異なる。特に、10番目の「一本の木」、11番目の「同僚の鈴木さん」、12番目の「門の前」のような日本語の「の」が必須であるのに対し、中国語の「的」が不要⁴⁸である場合が中国語母語日本語学習者には把握しにくい。

「数量詞+の+名詞」に関するグラフ1の全体の誤用率を見たうえで、さらに学年別の「数量詞+の+名詞」の「の」の誤用率について見ていく。日本語学習者がどのくらい習得しているか、現状と学習時間による習熟度の傾向は以下のグラフ2の通りである。



グラフ2 (学年別における第一問の14項目「の」のうち10番目の誤用率)

グラフ2は学年別で示している「数量詞+の+名詞」(10番目の「一本の木」)の「の」の誤用率である。その誤用率はそれぞれ一年生は85.67%、二年生は55.77%、三年生は52.75%、四年生は28.64%である。折れ線が示している85.67%(P160のグラフ14を参照)という一年生の誤用率(すべての誤用率の中で一番高い)を見ると、他の用法よりも高いことがわかる。さらに二年生と三年生も50%以上の誤用率で、四年生になって誤用率が下がってはいるものの低いとはいえないだろう。これは中国語の「数量詞+名詞」の組み合わせでは「的」が用いられないからである。「数量詞+名詞」のような組み合わせ

⁴⁸ 毛莉(2014), pp. 88-104。

は日常では使用する頻度が高い表現の一つであるため、日本語を使用するとき、中国語では「一本書」の表現から「一冊本」のように、「の」を抜かしやすいのではないかと考えられる。

つまり、N1（数量・序数）＋N2（人・物・時・場所・組織集団・抽象名詞）の場合、日本語では「の」が必須だが、中国語では不要である。N1が数量の場合、「一本のビデオテープ/一盒录像磁带」、「三日目の朝/第三个早上」、「二つの部屋/两间屋子」、「一つの学校/一所学校」、「二度の青春/两次青春」のように、日本語では「の」が必須であるのに対し、中国語では「的」を挿入すると間違いとなる。この類の「的」の不要のケース、つまり日常生活で使用頻度の高い表現の場合は、中国語母語日本語学習者にとって「の」の習得がむずかしいことがわかる。しかし、理由はそれだけであろうか。中国の大学で使用されている教科書を調べてみる。

3.3 中国の大学で使用されている教科書から見る「数量詞＋の＋名詞」

中国の大学で使用されている主な教科書の『新編日語 1』（2009）、『総合日語 1』（2009）、『中日交流標準日本語・上』（2010）において名詞と数量詞にかかわる部分は以下のように説明されている。

▲『新編日語 1』（2009）例文出現⁴⁹：

第三課 P44

例文：A：にかいに部屋がいくつありますか。

B：にかいに部屋がみつつあります。

説明：みつつは数量詞の副詞的用法で、副詞の場合、助詞は付けない⁵⁰。

練習：なし。

『新編日語 1』では数量詞は副詞的用法が提示され、「数量詞＋の＋名詞」の形には言及されていない。また練習もない。

▲『総合日語 1』（2009）例文出現：

⁴⁹ 説明は中国語の直訳である。

⁵⁰ 「みつつ」是数词的副词用法，数词作副词时不加助词。『新編日語』p. 44。

第十二十五課 P243、245、246、296、323

例文：それを二つください。

紹興酒を2本ください。

ジャスミン茶を500グラムと、このマグカップを四つください。

(以下略)

説明：数量詞は一般的に動詞の前に置く⁵¹。

練習：①お母さんは電子辞書をいくつ買いましたか。(一つ/二つ/三つ)

②すみません、ぶどうを300グラムと、梨を三つと、りんごを五つください。

(以下略)

③例1：一週間・何冊・本を読む/5冊

A：一週間に何冊ぐらい本を読みますか。

B：5冊ぐらいです。

(以下略)

例2：1日・何人・メールを送る/3人

A：1日に何人にメールを送りますか。

B：3人ぐらいです。

(以下略)

④A：Bさん、りんごは好きですか。

B：ええ。

A：実は、李さんからりんごをもらったんです。一つどうぞ。

B：いいんですか。ありがとうございます。

A：いいえ。

(以下略)

『総合日語1』の例文では、数量詞を副詞的用法を扱い、動詞と同時に提示されている。

しかし、「数量詞+の+名詞」の形は出ていない。

▲『中日交流標準日本語・上』(2010) 例文出現：

第十一課と第十三課 P171、194、195、177、198、202

例文：①日本にはプロの野球チームが12あります。

⁵¹ 数量詞一般放在动词之前。

②田中さんは毎朝紅茶を2杯飲みます。

(以下略)

③田中さんは歯ブラシを3本買いました。

(以下略)

説明一：中国語では一般数量詞は名詞の前に置くが、日本語では動詞の前に置かれる⁵²。

練習：クラスで女の子は3人しかいません。

王さんはりんごを一個食べます。

(以下略)

例文：④ここに3枚の絵があります。

「数量+の+名詞」の例が一文提示されている。

説明二：「数量詞+の+名詞」の形を用いて、名詞の数と量を表す⁵³。

練習：なし。

『中日交流標準日本語・上』は、『新編日語 1』『総合日語 1』と異なり、「④ここに3枚の絵があります。」のような「数量+の+名詞」の例文が出ている。

また、日本で使用された日本語の教科書『日本語・初級』、『日本語初歩』、『みんなの日本語・初級』では、「数量詞+の+名詞」という形ではなく、「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」の形で数量詞の副詞的用法を主に提示している。日本語では、数量詞は叙述文で副詞的な用法が一般的であり、特徴でもあるため、提出されたと考えられる。「数量詞+の+名詞」は叙述文で用いると、翻訳調のようになり、また数量詞が名詞と扱われるから、名詞が名詞を修飾する場合、被修飾名詞の前に「の」が必須となり、わざわざ取り上げて教える必要がないとも考えられる。逆に文型として覚えやすいと考えられ、副詞的用法しか提示されていないのではないだろうか。

以上の教科書の例文や説明を見ると、「紹興酒を2本ください」のような数量詞の副詞的な使い方を提示しているものが多く、「数量詞+の+名詞」の表現に言及しているのは『中日交流標準日本語・上』のみである。しかし、この説明も十分とはいえない。また

⁵² 一般把表示数量的词置于名词之前，而日语则置于动词之前。『中日交流標準日本語』p. 198。

⁵³ 用“表示数量的词语+の+名詞”的形式，表示该名词的数和量。『中日交流標準日本語』p. 202。

『中日交流標準日本語・上』の例④「ここに 3 枚の絵があります。」は、「ここに絵が 3 枚あります。」はもちろん、「ここに 3 枚絵があります。」ともいいかえることができ、「の」がなくても、非文とはいえ、『中日交流標準日本語・上』の説明一の「中国語は一般数量詞は名詞の前に置くが、日本語は動詞の前に置かれる。」は説明二の「数量詞+の+名詞」の形を用いて、名詞の数と量を表す。」と矛盾することになる。説明一と説明二の違いがどこにあるか、どのように使い分けるのか、日本語学習者を混乱させないためにも、例を挙げ、詳しく説明すべきだと考える。また学習者の誤用率からもわかるように、「数量詞+の+名詞」より「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」のような副詞的な使い方のほうが学習者の中により浸透しているといえよう。「…3 枚の絵がある」のような「数量詞+の+名詞」の使い方も教える必要があると考える。

3.4 「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」の違い

3.4.1 会話場面での違い

以上で述べたように、ほとんどの教科書が数量詞を副詞的用法として教えている。「机の上に本が三冊ある」、「箱の中に猫が一匹いる」、「リンゴを四つください」のような例文である。しかし、「数量詞+の+名詞」の使い方も日本語学習者に提示するのであれば、「三冊の本が机の上にある」、「一匹の猫が箱の中にいる」、「その四つのリンゴをください」のような表現形式をどのようなときに使われるのか、また「机の上に本が三冊ある」、「箱の中に猫が一匹いる」、「リンゴを四つください」のような文とはどのような違いがあり、どのように使い分けるのかが問題となってくる。中国の日本語教育は、日本語能力試験向けの文法教育を優先させているのが現状である。これは日本語学習者にとり、必要なことであるが、実際の運用面で問題が出てくる。

例えば、お客さんが果物屋でリンゴを買う場合、

「すみません。リンゴを四つください。」という。

もし、お客さんが「すみません。？四つのリンゴをください。」という、適切ではないということになるだろう。この会話では、「四つのリンゴ」より「リンゴを四つ」のほうが自然な日本語だと教師が日本語学習者に教える。つまり「数量詞+の+名詞」より「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」のほうが適切である。

しかし、以下の会話の場面ではどちらが適切であろうか。

例 (1)

A：四月十五日に中国から留学生が二人来るよ。(作例)

B：あ、本当ですか。楽しみです。

A：その二人の留学生が来たら、歓迎パーティーでもやろう。

最後の A の会話の内容だが、「その留学生が二人来たら、歓迎パーティーでもやろう。」より「その二人の留学生が来たら、歓迎パーティーでもやろう。」のほうが自然な日本語であろう。また「その留学生が二人来たら、歓迎パーティーでもやろう。」とすると、最初 A が話した二人とは同じ二人かどうか分からないし、二人以上の留学生が来ないと歓迎パーティーをやらないという意味合いも含んでいる。それに対して、「その二人の留学生…」は A が最初に話した「留学生が二人…」の二人と同じ二人だということがわかる。

「留学生が二人来る」は後述の新情報・旧情報説では副詞として使われる「二人」がはじめて出てくる情報いわゆる新情報となり、すでに提出された話題に言及する「その二人の留学生」がすでに言及されている情報いわゆる旧情報となる。しかし、「その留学生が二人来たら、…」だと、A の最初の会話の内容と重なっていて、「二人」は新情報のままであり、会話の流れが崩れ、理解がむずかしくなり、不自然な会話となる。「…留学生が二人来る…」の二人は副詞的な用法として使われているが、「その二人の留学生…」は「二人の留学生」を一つのまとまりとして理解したほうがいい。しかし、「留学生が二人来る」と「二人の留学生がくる」がただの短文で提示されては、中国語に「留学生が二人来る/来两个留学生」、「二人の留学生がくる/来两个留学生」と同じように訳されるので、この違いは理解できないだろう。日本語の教科書では、前者のほうがより自然な日本語であると、中国でも日本でも教えられてきた。しかし、上の会話の例文だと、「留学生が二人来る」より「二人の留学生が来る」のほうが適切な文脈もあることがわかる。

教科書では「数量+の+名詞」の必要性が明示されておらず、単に「ここに3枚の絵があります」があげられても、「ここに3枚絵があります」もいえなくはないということとなり、学習者をさらに混乱させてしまうことになる。

前述のように、日本語教育では説明や教え方を工夫する必要があるだろう。

例 (2)

Aさんが電話でBさんに依頼をしている場面：(作例)

……

A：窓側の机の上に本が三冊あるでしょう？

B：あ、はい、ありました。

A：その三冊の本をこっちに持ってきてくれませんか？

……

会話の流れから「机の上に本が三冊ある/桌子上有三本书。」は、副詞が新情報であり、「その三冊の本を…/那三本书…」はすでにAが話題として言及しているため、旧情報であることがわかる。そうした説の代表は久野⁵⁴ (1973) である。久野は discourse 形成上、第一文の文末に現れる新しいインフォメーションが、第二文の文頭に古いインフォメーションとして現れ、第二文自体は、文末に新しいインフォメーションを提出するというように、文と文の連結が、



という、チェーンが形成される。旧情報はそれまでの文脈に登場していたり、話の現場に存在したりして聞いて手がすでに知っているものであり、新情報はそうではないものである。

つまり、例文の

(2) a. 机の上に本が三冊ある。/桌子上有三本书。

(2) b. その三冊の本は机の上にある。/那三本书在桌子上。

⁵⁴ 久野暉(1973), p. 291。

(2) a. は「特定な場所である机（旧情報）＋本が三冊（新情報）」

(2) b. は「その三冊の本（旧情報）＋…（新情報）」

という形になる。もし「その三冊の本をこっちに持ってきてくれませんか？」を「その本を三冊こっちに持ってきてくれませんか？」にしたら、文法的には問題がないが、表す意味が異なり、「その三冊の本」は、周知の三冊の本であるが、「その本を三冊」は、同じ本を三冊という意味になるため、会話の主旨が違ってくる。

日本語の「数量詞＋の＋名詞」の場合で「の」が必須であるのに対し、中国語の場合、「数量詞＋名詞」という形となり、「的」が不要である。それゆえに「桌子上有三本书。」と「那三本书在桌子上。」の二つの文は「三本书」のおかれる位置が変わっただけで、新情報・旧情報ともに表現形式は同じである。しかし、日本語では、以下のように、表現形式が異なる。

新情報	旧情報
↓	↓
留学生が二人…	その二人の留学生…
本が三冊…	その三冊の本…

つまり、新しく話題として提示する場合、あるいは描写文などの場合、「留学生が二人来る」、「本が三冊ある」のように表現される。これに対して、すでに提出された話題に言及する場合などは、「その二人の留学生…」、「その三冊の本…」などと表現することが多い。

3.4.2 表す意味の違い

3.4.1 では、会話の場面で「数量詞＋の＋名詞」と「名詞＋が/を＋数量詞（副詞的）」の違いを述べたが、次は文の中でそれぞれどのような意味を表すかを見てみる。

まず「数量詞＋の＋名詞」と「名詞＋が/を＋数量詞（副詞的）」二つの形を同じ文型に入れると意味上に解釈するとどうなるか次の例文を見てみる。つまり例（3）と（4）のように、「一冊の本」と「本が一冊」を「…ホテルの各室に備えつけてあった。」という文型に入れる場合、意味が全く同じであるか、また違う意味を表すかを考察する。

例 (3) 一冊の本がホテルの各室に備えつけてあった。(日)⁵⁵

例文からこの「一冊の本」は同じ本であることが読み取れ、例えば聖書などである。しかし、もし (3) を (4) に変えれば、意味が全く同じだろうか。

例 (4) 本が一冊ホテルの各室に備えつけてあった。

ここで確かに (4) は (3) と同じく数量的には一冊の量が変わっていないが、各室に備えている本が同じ本であるかどうかわからない。異なった本というふうに取り出れるだろう。(3) の「一冊の本」(主語として) それがすべて「同じもの」であることと考えられる(久野・1994)。しかし、(4) の「本が一冊…」数量詞の副詞的用法で数を表すだけであることとなる。以下の例文も同じふうに取り出してもいいだろう。

(5) 三種類の魚がどの池にもいた。(同じ三種類)(日)

(6) 魚が三種類どの池にもいた。(この三種類は同じであるとは限らない)

(7) 一人の男がどの写真にも写っていた。(同じ男)(日)

(8) 男が一人どの写真にも写っていた。(この男は同じであるとは限らない)

また、次の例文を見してみる。(例 9~12 は作例である)

(9) その蜜柑を三つ食べた。(蜜柑は三つ以上ある)

(10) その三つの蜜柑を食べた。(蜜柑は三つのみ)

(11) 二つの方法を考えましょう。(特定の方法)

(12) 方法を二つ考えましょう。(不特定の方法)

例 (9) では、いくつかの蜜柑から、その中の三つを食べた。つまり蜜柑は三つ以上あるという意味が含まれている。しかし例 (10) では、蜜柑が三つあり、そのすべてを食べたという意味である。同じように、例 (11) では特定の方法(またはすでに存在する方法)

⁵⁵ 久野暉(1973)『日本文法研究』, p.287.

が二つあって、その二つについて考えるという意味になる。例(12)では特定ではない方法(またはまだ存在していない方法)を二つ考えるという意味になるだろう。

日本語学習者に数量詞の副詞的用法を主に教えるのも大事なことであるが、(3)～(12)のような例文から意味上の解釈から見て「数量詞+の+名詞」の形も教える必要もあると思う。以上のように、具体的な説明をすると同時に会話形式で教科書に提示したほうが、使い分けが理解しやすいのではないだろうか。日本語では、数量詞の副詞的用法が特徴的であるため、数量詞の副詞的な用法であると文型を日本語学習者に強く意識させることも誤用が起こる原因の一つであると考えられる。また、どのように教えればいいかが、今後の課題である。

3.5 まとめ

本章では中国語母語日本語学習者に誤用率の高い「数量詞+の+名詞」を取り上げ、「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」と比べながら、分析した。教科書に提示される説明や例文などから、教科書の数量詞の教え方に問題があると考えられる。また「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」二つの形は同じ文の中に入れる場合、意味上にも違いがある。

ほとんどの教科書が、数量詞の副詞的な表現に重点をおいて提示されていることがわかった。一方、「数量詞+の+名詞」に関する例文は非常に少ない。提示されていたとしても、説明は不十分で、誤解を招きやすく、逆に日本語学習者を混乱させてしまう可能性もある。前述のように、「留学生が二人来る」より「二人の留学生が来る」のほうが適切な文脈もあるが、教科書には「数量+の+名詞」の必要性が書かれていない。これらを踏まえ、さらに日本語学習者への「数量詞+の+名詞」の提示のしかたを探っていきたいと思う。

第4章 日本語教育における同格の「の」の扱い

第3章では誤用率の高い「数量詞+の+名詞」の部分を取り上げて「名詞+が/を+数量詞（副詞的）」と比べて分析した。ほとんどの教科書は、数量詞の副詞的な表現に重点をおいて提示されている一方、「数量詞+の+名詞」について提示されていたとしても、説明は不十分で、誤解を招きやすいことがわかった。第4章では、中国語の「的」にない用法の同格の「の」について分析する。第3章の「数量詞+の+名詞」と同じく同格の場合、中国語では「的」は用いられない。日本語の同格「の」はどうなるのかを、「的」を視野において本章で考察する。

4.1 はじめに

(1) こちらは団長の木村先生です。(刑志強⁵⁶の例文を借りる)

→这位是团长木村先生。

(2) 主人の山田さんはその向い側に座っています。

→店长山田先生坐在对面。

(3) 先日、久しぶりに友人の李さんに会いました。

→前几天，我见到了好久未见的朋友老李。

(4) 彼は親友の田中さんです。

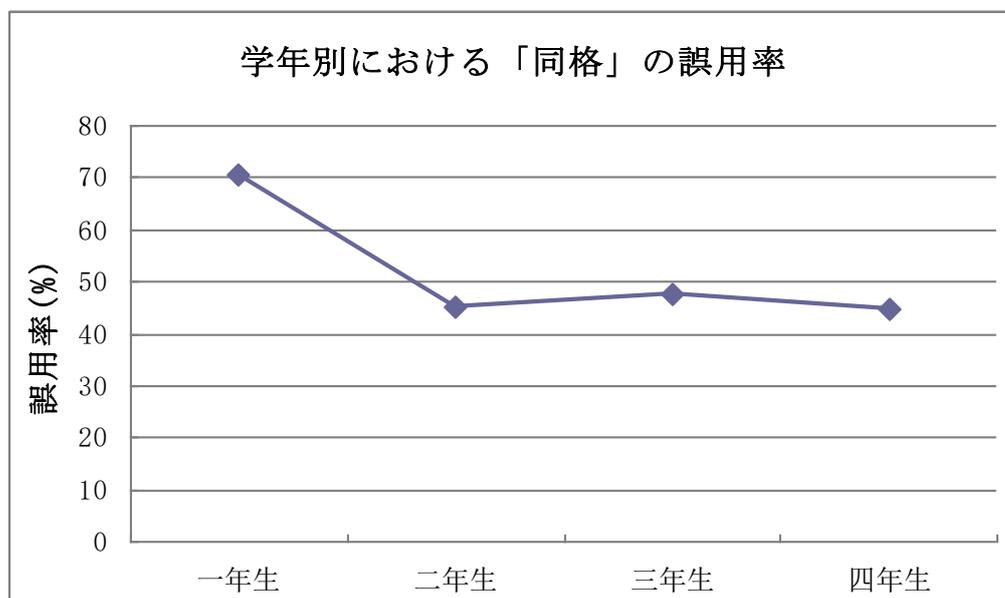
→他是我的好友田中先生。

以上で挙げられた例文のように、日本語には「の」がついているのに対し、中国語の訳に「的」がついていない。「の」の同格の用法において、中国語の「的」にはない用法である。

日本語学習者が同格の「の」について、どの程度習得をしているのかを把握するため、まず以下のグラフ3を見てみよう。アンケート調査の第一問の穴埋問題の11番目の「…同僚（ ）鈴木さんが病気になりました。」というところに正確に「の」を入れられる

⁵⁶ 刑志強 (1999) 「日本語の「の」と中国語の「的」との比較研究」 pp. 73-99.

かどうかを、学年別に調べた結果が以下の通りである。



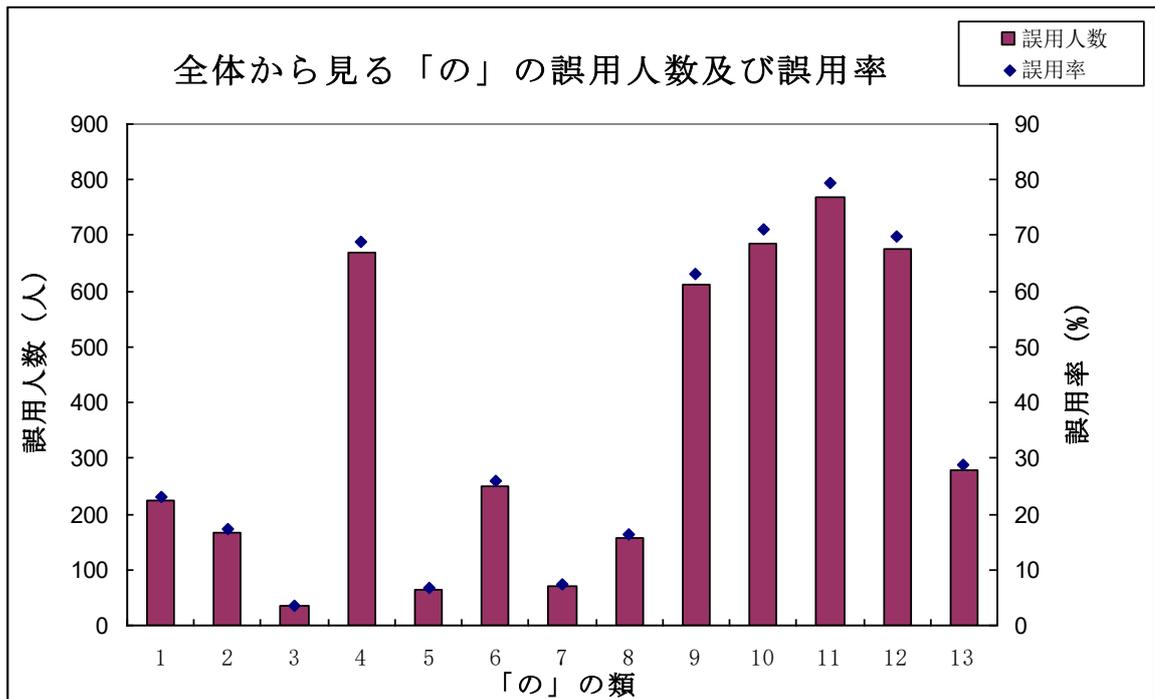
グラフ 3 (学年別における第一問の 14 項目「の」のうち 11 番目の誤用率)

グラフ 3 で示しているように、「? 同僚鈴木さんが病気になりました。」のような「の」を抜かしてしまう誤用が多く見られる。学年別における同格の「の」の誤用率は、一年生の「の」を抜かす比率が 70.70%で、二年生・三年生・四年生もそれぞれ 45.30%・47.50%・44.55%である。グラフ 3 からわかるように、中・上級レベルになってもなかなか誤用が減らないようである。同格は中国語母語日本語学習者にとって間違いやすい「の」の一つの用法であることがわかった。

また、中国語を日本語に訳す場合、日本語学習者が同格の「の」をどのように扱うのかを考察するため、第二問で次の調査も行った。その結果は以下のグラフ 4 の 11 番目である。

調査の問題⁵⁷：有乐町田中的弟弟太郎是很有名的人。

⁵⁷ 同格の「の」について、中国語の文を日本語に訳すとき、どれぐらい「の」の脱落があるのかを考察する。



グラフ 4⁵⁸ (第二問の中国語の文を日本語に訳す問題に見る 13 項目の「の」)

グラフ 3 の調査の方法と異なり、中国語から日本語にする場合、その誤用率がどうなるかが、調査の目的である。グラフ 4 の 11 番目のところを見ると、アンケート調査の中で、有効回答の 968 人のうち 768 人が同格の「の」を間違えている。その誤用率が 79.34%に達しており、中国語から日本語に訳す場合のほうが、日本語を直接に運用するより、誤用率が高いことがわかる。なぜこのように誤用が出るのか、母語にない用法であることが「の」の習得に影響を与えたのも否定できない。しかし、中国語母語日本語学習者の典型的な例とされる (P111 のグラフ 8 を参照) 形容詞 (「赤い靴」を「*赤いの靴」と間違える) の誤用率を見ると、誤用率が低いことと、習得時間の長さにしたがって、誤用が減少している (毛莉・2014) ことから、母語の影響以外、なんらか同格の習得に妨げる要素があるのではないかとと思われる。

4.2 同格の定義について

そもそも同格というのは、どのようなことなのか、その他にどのような形式があるのか、

⁵⁸ グラフ 4 の番付に対応する項目は P15 の 1.2.2 の調査内容を参照。

また「同格」を形作っている前後二つの語にはどのような関係が見られるのか、「同格」という用法について見ていく。まず「同格」の定義を見てみる。

『**日本文法教室**』（1962）芳賀は特殊な文節で遊離語について、**列挙・同格・限定・補充・置き換え・標示**などの場合があるとしている。その用法の一つとして、同格は以下の通りに説明されている。たとえば、

①お待たせいたしました。15番線から、**特急** あさかぜ号 発車いたします。

②**名監督** 三原のサイ配がベナント争いにどんな波乱を呼ぶか？

ふつう、.....は.....に対して〈同格〉だと呼ばれています。意味的には.....が.....を代表する関係です。この.....もまた文法的には遊離語の一つにはほかならない。これに属するケースはずいぶんたくさんある。

③**ワンマン** 吉田がまたぞろ神通力をもり返したという評判だ。

④**戦犯** 岸信介を倒せという怒号ウズ巻くなかで、**弟** 栄作は **兄** 信介に涙ぐましいまでの協力ぶりを見せたものだ。

このなか、名監督＝三原；戦犯＝岸信介であり、同格関係を表している。

『**日本語教育辞典**』（1982）「同格」の項目がない。

『**ケーススタディ**』（1998）寺村ほかは「この夜、福岡市内の酒場では、稲尾は自分のもっているカールマンギヤを売ってしまったという冗談が囁かれた。」の中の「という」を省略するとおかしくなる。このように、「同格節」の中には、「という」の介在が不可欠なものもあると指摘している。

『**日本語文法ハンドブック**』（2000）庵ほかは「私が局長の上岡です。」は「上岡が局長である」という関係にある。このような関係を同格という。類例としては「イギリスの**首都**のロンドン」や「賞品**の**時計」などがある。この同格の「の」は「局長**である**上岡」や「首都**である**ロンドン」など「である」で置き換えることができると述べている。

『新・はじめての日本語教育』(2004) 同格節：連体修飾節が被修飾名詞の内容を表すもの。

『日本語文法事典』(2014)「同格」の項目がない。

これまで見てきたように、よほど重視されていないのか、「同格」に関する説明あるいは「同格」の項目が見当たらない文法辞典もある。

以上から、「同格」は以下の三点にまとめられる：

- I. 『日本文法教室』芳賀によると、N1 が名監督とし、N2 が三原としたら、N2 が N1 を代表する関係である。
- II. 同格節で連体修飾節が被修飾名詞の内容を表すもの。例えば、「…自分のもっているカールマンギヤを売ってしまったという冗談…」。
- III. 文法で、同一の文の中において、文の構成上同じ機能を果たす関係にあること。「私が局長の上岡です。」は「上岡が局長である」という関係にある。同格の「の」を「である」で置き換えることができる。

形としては「名監督三原」・「…自分のもっているカールマンギヤを売ってしまったという冗談…」・「局長の上岡」のような「N1N2」、「N1 という N2」⁵⁹、「N1 の N2」の三つのタイプに分けられる。つまり「局長の上岡」のように「同格」の「の」によって表す形、また「という」によって表す形、及び助詞のない（ノなし同格⁶⁰）の形でそれぞれ「同格」の説明が文法辞典、文法書などにされている。

文法辞典及び文法書における「同格」に関する説明を見ると、初級の日本語の教科書に現れる「N1 の N2」以外、ほかにもいくつか形が見られる。では、日本語の教科書におい

⁵⁹ 同格のまとめの IVでは同格節について、例文「…自分のもっているカールマンギヤを売ってしまったという冗談…」が出されているが、『日本国語大辞典』によると、文法で、同一の文中において、語あるいは文節が、他の語あるいは文節と、文の構成上同じ機能を果たしていること。本研究は名詞を中心とするので、文節ではなく、「芙蓉という花」のように、語をとる。つまり、「N1 という N2」の形となる。

⁶⁰ 小田勝 (1993) 「「の」助詞非表出の同格構文をめぐって」『国語研究』国学院大学国語研究会第 56 号。

て、同格がどのように提示されているのかを見てみよう。

4.3 教科書に提示される同格

文法辞典及び文法書において、「同格」を見てみたが、教科書では「同格」について、どのように説明されているのかをしてみる。

▲『新編日語』(2009)

同格に関する説明が出ていない。

▲『総合日語』(2009) 例文出現 P62 :

- ①私は学長の張光輝と申します。
- ②こちらは友達の王さんです。
- ③こちらは後輩の高橋さんです。

説明：格助詞「の」が名詞の間に入る場合、同格の関係も表す。つまり「の」の前後の名詞が同じ意味である（同じものを指す）。一般的に「の」の前の名詞は関係、性質を表す名詞で、後の名詞は固有名詞、例えば人名などである⁶¹。

▲『中日交流標準日本語』(2010) 例文出現 P304、307 :

- ①昨日の日曜日歌舞伎の本を読みました。
- ②明日の火曜日田中さんに電話をします。

説明：“昨日”と“日曜日”は同格でやや強調の意味を表す⁶²。

教科書を調べたところ、同格に関しては教科書によって提示されているのと提示されていないのがある。初級における「同格」は「N1 の N2」の形で提示されている。『新編日語』は説明がないのに対して、『中日交流標準日本語』にある説明はあまりにも簡単で、同格の「の」を理解するには足りない。「やや強調の意味を表す」と説明されてはいるが、「強調」とは何かと考えることになる。ここでは「の」が省けるかどうかにも言及されて

⁶¹ 格助詞「の」用于两个名词之间时还可以表示同位关系，即「の」前后的名词所指相同，一般「の」前后的名词为表示关系、性质的名词，「の」后面的名词为专有名词，如人名等。

⁶² 这里的“の”和以前学的“の”不同，它表示“昨日”和“日曜日”是同位语，起略微强调作用。

いない。やや強調の意味という説明では、強調しない場合は「の」がなくてもいいのだと思われるかもしれない。例文の「①昨日の日曜日歌舞伎の本を読みました。」、「②明日の火曜日田中さんに電話をします。」を見ると、「昨日」、「明日」と「日曜日」、「火曜日」とは、どういう意味関係であろうか。例文をそれぞれ二つの文にしてみる。

例：

(5) 昨日 歌舞伎の本を読みました。

(6) 明日 田中さんに電話をします。

(7) 日曜日 歌舞伎の本を読みました。

(8) 火曜日 田中さんに電話をします。

以上の四つの例文については、文法的な面では何の問題もないであろう。しかし、例文の(7)と(8)は話しの流れがわからないと、いつの日曜日・火曜日かが分からず曖昧な表現となってしまう、わかりにくい文となるのであろう。それに対して、例文の(5)と(6)ははっきりと意味が読み取れる。

なぜならば、「昨日」と「明日」の間には「今日」があり、「昨日」と「明日」の判断基準となるものは「今日」しかないことである。いわゆるダイクシスといわれるものである。いいかえれば、「昨日」は「今日」の「昨日」しかないし、「明日」も「今日」の「明日」しかない。しかし、「日曜日」と「火曜日」は一般的概念語であり、文章でははっきりと意味を表すのに、それを限定する語が必要とされる。つまり「日曜日」は「昨日」の、「火曜日」は「明日」のさらなる説明の内容として加えられている。文脈では「日曜日」、「火曜日」は唯一ではないが、「昨日の日曜日」、「明日の火曜日」は唯一となるであろう。だから、例文の中の「昨日」と「日曜日」、「明日」と「火曜日」はそれぞれ文の構成上同じ機能を果たす関係にあり、N2はN1のさらなる説明で「同格」の意味を表しているといえよう。

『総合日語』にはより詳しく説明されているが、よく考えてみると、わかりづらいところもいくつかある。「私は学長の張光輝と申します。」を例に考えてみたい。そもそも「学長」と「張光輝」とは同じ意味という説明が誤解を招きやすいのではないだろうか。同じ意味というより、むしろN2の「張光輝」はN1の「学長」に対する内容の更なる説明とい

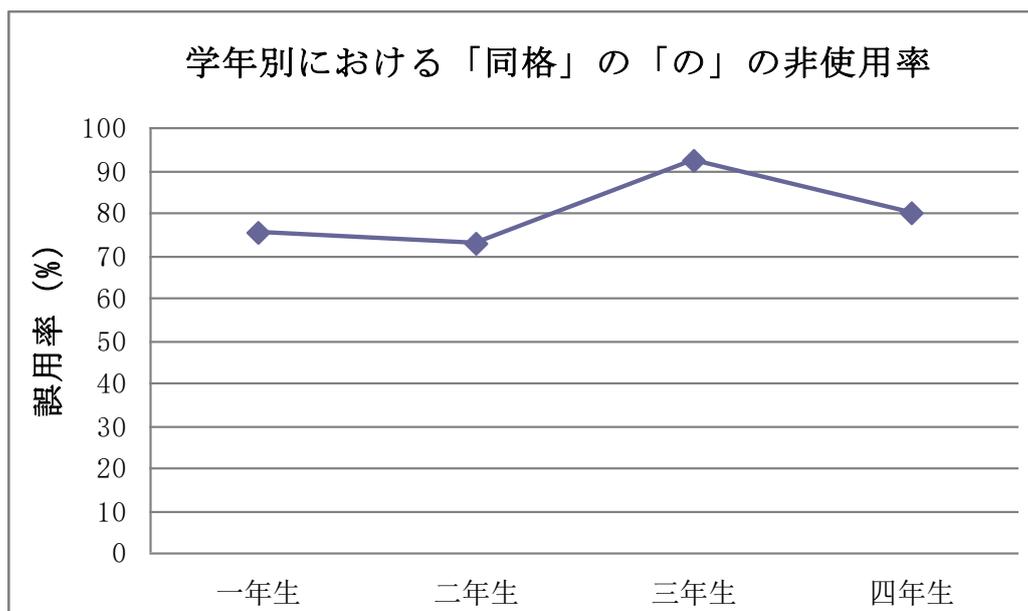
う傾向がつよい。また「の」の前後の語について、前の名詞は関係や性質を表す名詞であると書かれているが、「学長」という名詞が一般概念語で関係、性質を表すより、代名詞のほうがつよいのではないだろうか。また「私たち留学生」、「留学生の私たち」のような例では、両方とも同格関係を表しているが、順序が異なっており、「留学生」はどちらに入るだろうか。

日本語の教科書でわかるように、初級にはすでに助詞の「の」について、「N1のN2」の同格の用法が提出されている。しかし、説明が少なく、例文も簡単であることがわかった。これらの教科書はただそれぞれ前後の名詞について、どんなものかを提示するだけで、前後の関係性についての説明が見られない。これも日本語学習者を混乱させる一つの要素だと考えられる。

グラフ4では、中国語の文から日本語に訳す場合、同格の「の」を挿入しない学習者の人数とその比率の分布を見てきた。968人のうち768人に「の」の脱落が見られ、誤用率が79.34%の相当高い誤用率であることがわかった。つまり日本語学習者が「同格」の「の」についての知識を十分に把握していないといえるだろう。

グラフ4はアンケート調査を受けた日本語学習者の総人数から見た同格の「の」の非使用率であるが、この中で、各学年の「の」の誤用率がどうなっているのかを、さらに見てみる必要があると考えられる。

以下のグラフ5は、第二問の11番目（同格）に関する学年別の「の」の非使用率を表している。



グラフ 5 (第二問の学年別における翻訳問題に見る「同格」の「の」)

グラフ 5 を見てみると、学年別における同格の「の」の脱落はそれぞれ、一年生 75.16%、二年生は 73.08%、三年生は 92.50%、四年生は 80.00% である。

グラフ 5 で示しているように、日本語学習者にとって同格の「の」がいかに習得しにくいかがわかる。特に、三年生と四年生の誤用率が九割、八割ということから、上級の学習者が逆に、初級・中級の学習者より、同格の「の」を習得できていないことがわかった。

アンケート調査のデータから一年生が初級で母語の影響を受けている傾向が強いというなら、なぜ二年生・三年生・四年生が誤用率が高いのだろう。学習時間の長さにつれて、ほかの用法の「の」と同様に、同格の「の」の誤用も消滅していくはずであるが、グラフ 5 のように、初級の誤用率と反対に、上級の学習者のほうが逆に誤用率が高くなっている。その原因を考えるために、さらに日本語の教科書を分析しながら、同格の三つの形式を中心に、日本語学習者の「の」の誤用の原因を考えたい。

4.4 「同格」の形式

初級の教科書に現れる「同格」は「N1 の N2」の形式である。しかし、前述のように「同格」の形式は、一つではないことがわかった。

4.4.1 「N1 の N2」

「N1 の N2」の場合、同格以外、所有・所属・内容・状態などの関係を表すが、どのように同格と見分けるか。簡単な見分け方としてよくいわれてきたのが、「の」を「である」に置き換えられる場合、その「の」は同格を表しているということである。

例えば、「学長の山田です」→「学長である山田です」

「学長である山田です」はさらに「山田は学長である」に置き換えられる。

しかし、以下のような例文は「N1 の N2」から「N1 である N2」に置き換えるとどうなるだろうか。

例 (9) 「こんな寒い夜は日本酒の熱いのが欲しくなるわね」

辞書の説明によると、例文の中の「日本酒」と「熱いのが」が同格である。ならば、「日本酒の熱いのが…」→「日本酒である熱いのが…？」

「日本酒である熱いのが…」→「熱いのは日本酒である」続けて、
→「熱い日本酒」となる。

以上の例文「日本酒の熱いのが…」を「日本酒である熱いのが…」に置き換えると、日本語学習者にとって意味の理解が難しくなる。つまり「N1 の N2」の場合、初級の教科書に出ているのは、前後が名詞のみである。「…日本酒の熱いのが…」のような「の」が準体助詞で長い複雑な例文が教えられていないのである。

また、「けんちゃんのバカ」といって「けんちゃん」と「バカ」が同格ということである。しかし、「けんちゃんであるバカ」と言いかえられないだろう。むしろ「けんちゃんのバカ」は「けんちゃん（が/は）バカ」からであろう。この例文から同格の「N1 の N2 です」はすべて「N1 である N2 です」とはならず、さらに「N2 は N1 である」ともならないことがわかった。このような用法は、日本語学習者にとってはなかなか使いこなせない。同格を使うより、「けんちゃんはバカです。」のほうが中国語母語日本語学習者に馴染みのある使い方である。

『総合日語』によると、格助詞「の」が名詞の間に入る場合、同格の関係も表す。つまり「の」の前後の名詞が同じ意味である（同じものを指す）。一般的に「の」の前の名詞は関係、性質を表す名詞で、後の名詞は固有名詞である。例えば人名などであるというように説明されている。しかし、「けんちゃんのバカ」は以上の説明に当てはまらないことになるだろう。「けんちゃん」は「の」の前の名詞であるが、人名である。「バカ」は固有名詞でも人名でもないが、「の」の後の名詞となっている。

また、以下の例（10）を別の文にしてみる。

例（10）「友人の馬木さんは日本人です。」

教科書の説明によると、「友人」と「馬木さん」が同じ意味である。「友人＝馬木さん」であれば、下の文が成立する。

（10） a. 「友人は日本人です」

（10） b. 「馬木さんは日本人です」

例（10） a と例（10） b は文法的にはどちらも問題がないだろう。しかし、例（10） b は自然な文であるが、例（10） a は漠然的な表し方となっている。

「友人（N1）の馬木さん（N2）」は「友人」と「馬木さん」が同じ意味であるといういかたが適当ではないといえるだろう。前述のように、文法的には、同一の文の中において、文の構成上同じ機能を果たす関係にある。つまり「友人の馬木さんは日本人です。」この同一の文の中に、「友人」と「馬木さん」が文の構成上同じ機能を果たしている関係である。前の N1 は後の N2 を包括する総称的な名称（あるいは総括的な概念）を示す名詞であり、後の N2 は N1 を代表する固有名詞である。「N1＝N2」というより、「N1>N2」ではないだろうか。

では、逆はあるだろうか。

「友人の馬木さん」→「馬木さんの友人」

N1 と N2 の位置を置きかえると、意味が全く変り、同格にはならない。

また、もう一つの例文を見てみよう。

例 (11) 「けんちゃんのバカがやったのだ。」

『総合日語』の説明だと「けんちゃん」と「バカ」が同じ意味ということになる。「けんちゃん＝バカ」であれば、下の文がどうなるか？ 見てみる。

(11) a. 「けんちゃんがやったのだ。」

(11) b. 「バカがやったのだ。」

例 (11) a はどんな問題もないふつうの文であるのに対して、例 (11) b は唐突で不自然な文である。また「友人の馬木さんは日本人です。」と異なり、「けんちゃん」は「バカ」を包括する総称的な名称を示す名詞でもなく、「バカ」は「けんちゃん」を代表する名詞でもない。強いていえば、N2 が N1 の意味補足をし、強く N1 を示すためであるといえるだろう。「けんちゃん」が「バカ」を限定していて、N1 と N2 は同じ機能を果たしているのである。N1 の「けんちゃん」は固有名詞で、N2 の「バカ」は一般名詞であり、「N1=N2」というより、「N1<N2」ではないだろうか。

また、注目すべきことは、他にも同様な表現があり、けんちゃんのバカ、次郎の弱虫、哲平の助平、お父さんの石頭、太郎の一日駅長、先輩のわからず屋…のような、N1 は（けんちゃん・次郎・哲平・お父さん・太郎・先輩など）愛称名詞・人名・呼称名詞などで、N2 は（バカ・弱虫・助平・石頭・一日駅長・わからず屋など）マイナス評価を表す語が出ている例が多いようである。またこれらを「バカのけんちゃん⁶³、弱虫の次郎、助平の哲平、石頭のお父さん、一日駅長の太郎、わからず屋の先輩…」のように逆にしても意味が通じ、慣用句に近い代名詞のように使われるようである。

以上のように見てきたが、同格の「の」を表す「N1 の N2」の場合、前後の名詞の関係をどのように説明すれば、学習者にわかりやすく同格を把握させられるのだろうか、簡単すぎる説明や、混乱させるような説明の仕方は適当ではないと思われる。

⁶³ 後述のように「バカなけんちゃん」ともいう。p. 100 を参照。

4.4.2 「N1 という N2」

日本語の教科書に提示されている「N1 という N2」。

▲『新編日語』(2009) P264

「という」は前の文が後の文を修飾する役割である。

例：①日本で一番高い山は富士山という山です。

②牧野という人からあなたに電話がありました。

③南京路という駅でバスに乗ったのです。

▲『総合日語』(2009) P282

「という」は後にくる名詞を修飾する。一般的にある人あるいは事物を説明したり、質問したりするとき使われる。

例：①「白蛇伝」という京劇です。

②王：田中さんという人を知っていますか。

高橋：いいえ、知りません。どなたですか。

③その田中という方は、お友達ですか。

▲『中日交流標準日本語』(2010) に出ていない。

「N1 という N2」の形式については、初級の教科書の最後の部分に現れる。しかし、後にくる名詞を修飾し、人あるいは事物の説明や質問する場合に使われるというふうに解釈されている。

以上の例文から同じ同格を表す形式でも含まれる意味が異なる。例えば、「友人の馬木さん」と「馬木さんという友人」について、両方とも「馬木さんは友人である」ということを表しているが、前者は N2 の「馬木さん」が N1 の「友人」の代表として現れ、「N1 > N2」である。しかし、後者は N2 の「友人」という範囲で N1 の「馬木さん」はよく知らないときに使われ、「N1 < N2」である。

また、「花の芙蓉」については花の一種であり、代表として現れ、他に花ではない芙蓉があることを含意している。つまり前述のように、「N1 > N2」である。

「芙蓉の花⁶⁴」については、いくつかの咲いている花の中で、芙蓉であることを示している。

「芙蓉という花」については、聞いている人が芙蓉という花を知らない時、使われることが多いだろう。

二つの名詞または名詞相当語句 A、B が AB の順で同格表現を成す場合の意味上の規定関係は、A が B を規定するか、B が A を規定するかのどちらかである。「B という A」という関係にあるならば A が B を規定しており、「B である A」という関係にあるならば B が A を規定している⁶⁵。たとえば、「北京という首都」と「主席である毛沢東」。これらが主語述語関係に立つと、「B という A」の論理上の主語は B であり、「B である A」の論理上の主語は A である。「B という A」同格表現では、「北京」は B で、「首都」は A である。つまり「北京」は主で、「首都」は総称というふうに理解してもよいであろう。またこのような同格表現は学習者にセットで覚えさせれば、形として、まず問題ないであろう。

本論文は、同格の「の」についての調査が目的であるため、「N1 という N2」という同格表現をこれ以上触れないことにする。

4.4.3 「N1N2」

中級、上級にはいると、「われわれ日本人は…」「私たち留学生にとって…」のような例文が読解や聴解などに出てくる。

▲『新編日語』(2009)

同格に関する説明がない。

▲『総合日語』(2009)

同格に関する説明がない。

▲『中日交流標準日本語』(2010)

⁶⁴ 山田敏弘 (2004)。山田は「会長の田中氏」と「バラの花」はどちらも同格と呼ばれ、前の語と後の語は同等である。違いは前者は「田中氏」を、後者は「バラ」を言いたい時に使うことであると述べている。

⁶⁵ 羽根田知子 (1994)「同格語の範疇変化について」『独逸文学』。

同格に関する説明がない。

「同格」の「N1N2」の形式について調べたところ、例文以外、説明がない。しかし、「N1N2」の場合、中国語母語日本語学習者にとってはわかりやすい形であろう。

例 (12) 那时金旺他爹已经死了, 金旺旺兄弟两个, 给一支溃兵作了内线工作, 引路绑票…

例文のような「金旺旺兄弟两个」同格を表している。毛莉 (2014) で述べたように、N1 と N2 は同一関係をいう場合、中国語は「的」がつかない。これらの母語干渉の影響を受けて、「弟の太郎」を「弟太郎」と間違い、「の」を省く例も少なくない。

中国語の場合、助詞の「的」が用いられないため、日本語学習者が「ノある同格」より、「ノなし同格」のほうが習得しやすいであろう。つまり、グラフ 5 で示されている「の」の誤用率から、三年生は 92.50%、四年生は 80.00% であり、上級の学習者が逆に、初級・中級の学習者より同格をマスターできていないことがわかった。

初級の教科書に提示された同格の「の」の説明が曖昧である上に、上級になると説明がなく、ただ教えるほうが「N1N2」は同格であることを伝えるだけとなると、初級で教わった内容は忘れてしまい、ますます混乱してしまうという傾向がアンケート調査のデータから見られる。これも、三年生・四年生になって、逆に同格の「の」の誤用率が高まっている一つの重要な原因ではないだろうか。

学習者のほうも教えるほうも教科書に頼りすぎると、以上のような混乱が生じると思われる。

4.4.4 「N1 の N2」と「N1N2」

今まで、教科書や文法書を通して、同格についてみてきたが、主に「N1 の N2」、「N1 という N2」、「N1N2」の三つの形式で現れる。以上に述べたように、「N1 という N2」のタイプはセットとして覚えれば、大丈夫だろうけれども、次に「N1 の N2」と「N1N2」と二つの形式を中心に見てみる。

「N1 の N2」の同格表現が成立するのは N1 が N2 の資格や別称を表す語がきたとき、つまり N2 の属性や特性を示す場合であり、それは「N1N2」の表現形式と比べ、叙述的で話

しことば的表現となる⁶⁶。しかし、全部の「N1 の N2」の同格表現の「の」が省けるのか、またあらゆる「N1N2」の同格表現（N1 と N2 の間）に「の」を入れてもかまわないだろうか。例文を通して、考察していく。

例（13）「貧乏だけど幸せ——われわれ日本人昭和 25 年～35 年の実写記録」

例文の中の「われわれ日本人」、二つの名詞の間に「の」を入れてみると、「われわれの日本人」となり、全く意味が異なり、変である。「われわれの日本人」は「われわれ（所属機関など）」のグループに所属する日本人というふうに取り出される。また「日本文化は私たち留学生にとって知っておかなければならない」の「私たち留学生」も同じく、「の」が入ると、「私たちの留学生」となり、同格の表現でなくなるだろう。「私たち留学生」は「私たちは留学生である。」ということを示している。しかし、「私たちの留学生」の場合、「私の管轄している（つまり、大学や機関や国などを指す）留学生」という意味が含まれる。

アンケート調査の例文をもう一度見てみよう。

調査問題：「…同僚の鈴木さんが病気になりました」

例文の「同僚の鈴木さん」は「同僚鈴木さん」より自然な日本語であることがわかる。両方とも「同格」であるが、なぜ「われわれの日本人」ではなく、「われわれ日本人」という表現形式が適切なのか、またなぜ「同僚鈴木さん」より「同僚の鈴木さん」のほうが日本語として自然なのかが問題になる。すでに 4.3 で述べたように、「N1 の N2」、「N1N2」の二つの形している「ノある同格」と「ノなし同格」がある。「の」がある場合と「の」がない場合とは一体どのような違いがあるのか、日本語学習者がどのように区別して運用すればいいのかが問題になる。

「N1N2」、「N1 の N2」において、具体的な例を挙げると「われわれ日本人」と「同僚の鈴木さん」とは一体違いがどこにあるだろうか。以下の例文を通して、見てみたい。

⁶⁶ 小林幸江（1996）「同格をめぐる」東京外国語大学。

「N1 の N2」

- ①a 同僚の鈴木さん
- ②a 友人の馬木さん
- ③a 弁護士の河内さん
- ④a デザートのメロン
- ⑤a 学長の張光輝
- ⑥a 弟の太郎
- ⑦a 昨日の日曜日
- ⑧a けんちゃんのバカ

以上の八つの例文をそれぞれ違う表現に換えて、見てみることにする。

「N1 の N2」 → 「N2 の N1」

- ①b 鈴木さんの同僚
- ②b 馬木さんの友人
- ③b 河内さんの弁護士
- ④b メロンのデザート
- ⑤b 張光輝の学長
- ⑥b 太郎の弟
- ⑦b 日曜日の昨日
- ⑧b バカのけんちゃん (バカなけんちゃん)

以上のように、①a～⑧a の「N1 の N2」を①b～⑧b の「N2 の N1」に換えると、①b～⑥b は①a～⑥a とは意味が異なる。⑦b は山田 (2004) のいう「バラの花」の説 (P97 の注 64 を参照) に似ていて、同格でないとはいえないであろう。ニュースでは「みどりの日の昨日 皇太子は…」のような似ているいいかたも出ている。「みどりの日」をいいたいので、前の語に焦点が置かれたのではないだろうか。しかし、「昨日のみどりの日 皇太子は…」だと、「昨日の日曜日」と異なり、「日曜日」は一般語であるが、「みどりの日」は特定されているようにも思われる。また⑧b の場合、ここの「の」は「バカなけんちゃん」といういいかたもあるし、「けんちゃんのバカ」の場合、「の」は「が」で主格を表す

こともある。

「N1 の N2」 → 「N1 である N2」

- ①c 同僚である鈴木さん
- ②c 友人である馬木さん
- ③c 弁護士である河内さん
- ④c デザートであるメロン
- ⑤c 学長である張光輝
- ⑥c 弟である太郎
- ⑦?c 昨日である日曜日
- ⑧?c けんちゃんであるバカ

以上のように、①a～⑧a の「N1 の N2」を①c～⑧c の「N1 である N2」に換えると、①c～⑥c は同格を判断する見分け方法に当てはまるが、⑦c の「昨日である日曜日」より、「日曜日である昨日」のほうが自然なのだろうか。⑧c の「けんちゃんであるバカ」も同じく、「バカであるけんちゃん」ではないだろうか。

「N1 の N2」 → 「N2 は N1 である」

- ①d 鈴木さんは同僚である
- ②d 馬木さんは友人である
- ③d 河内さんは弁護士である
- ④d メロンはデザートである
- ⑤d 張光輝は学長である
- ⑥d 太郎は弟である
- ⑦d 日曜日は昨日である
- ⑧d バカはけんちゃんである

以上のように、①a～⑧a の「N1 の N2」を①d～⑧d の「N2 は N1 である」に換えると、①d～⑦d について、同格であることがわかるが、⑧d の「バカはけんちゃんである」といういかたは「鈴木さんは同僚である」と比べ、「N1」と「N2」順が逆となっている。実

際には「けんちゃんはバカである」の順であるはずであろう。つまり「グループの中にバカがいる」という状況の中で、「そのバカは、他にもないけんちゃんである」ということを表しており、「けんちゃんはバカである」はけんちゃんについてその属性を述べる文である。

以上の八つの例文からそれぞれ四つの表現を通して、同格であるかどうか分析してみた。まとめてみると、以下の表5になる：

N1 の N2	N2 の N1	N1 である N2	N2 は N1 である
①同僚の鈴木さん	△	○	○
②友人の馬木さん	△	○	○
③弁護士の河内さん	△	○	○
④デザートのにんげん	△	○	○
⑤学長の張光輝	△	○	○
⑥弟の太郎	△	○	○
⑦昨日の日曜日	○	?	○
⑧けんちゃんのバカ	?	×	?

表5

(○は同格であること。 △はいい換えると意味が変わる。 ?は検討する必要がある。
×は非文になる。)

表5を見てみると、同じ同格といっても、例文①～⑥は大体今まで述べてきたルールに当てはまるが、例文⑦と例文⑧については、教科書に提示されている説明だと当てはまらなくなり、理解するには難しいようである。①～⑥の「N1」と「N2」の部分の名詞を見てみると、N1は基本的に一般語か概念語であり、N2は人名・固有名詞である。しかし、例文⑦「昨日の日曜日」、⑧「けんちゃんのバカ」では、逆にN1は特定される固有名詞で、N2は複数ある普通名詞となる。この種の同格を、どのように学習者に教えればいいのか、また教科書に書かれている例文と区別しながら、どのように習得させたらいいのかを、検

討する必要があるようだ。

今まで、「N1 の N2」の形を中心として、分析してきたが、「N1N2」とはどのような関連性があるだろうか。またなぜ前述のように、「N1 の N2」の場合が自然であるが、「N1N2」に換えると不自然になるのか。またなぜ「N1N2」の場合、自然な日本語なのに、「の」が入ると意味が変わったりするのだろうか。

以下は「N1N2」と「N1 の N2」を比較しながら、その違いを表 6 で見ていきたい。

「N1 の N2」	「N1N2」
①a 同僚の鈴木さん	①e 同僚鈴木さん
②a 友人の馬木さん	②e 友人馬木さん
③a 弁護士の河内さん	③e 弁護士河内さん
④a デザートのメロン	④e デザートメロン
⑤a 学長の張光輝	⑤e 学長張光輝
⑥a 弟の太郎	⑥e 弟太郎
⑦a 昨日の日曜日	⑦e 昨日日曜日
⑧a けんちゃんのバカ	⑧e けんちゃんバカ
⑨a われわれの日本人	⑨e われわれ日本人
⑩a 私たちの留学生	⑩e 私たち留学生
⑪a 私の石原	⑪e 私石原

N1N2	関係	N1 の N2	関係
同僚鈴木さん	?	同僚の鈴木さん	○
友人馬木さん	?	友人の馬木さん	○
弁護士河内さん	?	弁護士の河内さん	○
デザートメロン	?	デザートメロン	○
学長張光輝	?	学長の張光輝	○
弟太郎	?	弟の太郎	○
昨日日曜日	?	昨日の日曜日	○
けんちゃんバカ	?	けんちゃんのバカ	○
われわれ日本人	○	われわれの日本人	×
私たち留学生	○	私たちの留学生	×
私石原	○	私の石原	×

表 6

(?は検討する必要がある。 ○は同格で自然な表現。 ×は同格ではない。)

以上の表 6 で示されているように、「N1 の N2」については、「の」がある場合と「の」がない場合と表すものが異なる。

例文①～⑧は「の」があるほうがより自然な日本語であることがわかった。それに、「の」がなくても、同格ということは変わらないし、いえないこともない。

しかし、例文⑨～⑪は例文①～⑧と異なり、「N1N2」については、「の」がない場合、同格であるが、「の」が入ると意味が全く変わることがわかった。

なぜ、以上のような現象が生じるのかに注目すべきだと思われる。

まずは「N1 の N2」、「N1N2」の同格関係が成立する場合、N1 と N2 はそれぞれどのような名詞であるか、表 7 にまとめてみる。

表記	同格関係	N1	N2
N1 の N2	同僚の鈴木さん	一般概念語 (総称・資格・呼称 などが含まれる)	人名・固有名詞
	友人の馬木さん		
	弁護士の河内さん		
	デザートのみロン		
	学長の張光輝		
	弟の太郎		
	昨日の日曜日	一般概念語 (特定される)	普通名詞 (複数ある)
けんちゃんのバカ	人名 (特定され、呼称も 含まれる)	普通名詞 (複数あり、マイナ ス感情)	
N1N2	われわれ日本人	複数人称代名詞	一般概念語
	私たち留学生		
	私石原	人称代名詞	人名

表 7

「N1N2」の同格表現では N2 は具体的な実体を示し、N1 は N2 を引き立てるために、加えられたものといえるだろう。つまり焦点は N2 にあり、N1 はそれを補うものということになる。具体的な例を挙げてみると、「われわれ」と「日本人」は「われわれ＝日本人」で、「日本人」は意味の主眼であり、「われわれ」は「日本人」を修飾し、それを主張するためである。つまり「N1=N2」である。「われわれ日本人」＝「日本人であるわれわれ」であるが、「われわれの日本人」について、すでに述べているように、「われわれ（所属機関など）のグループに所属する」の日本人となるであろう。

「N1 の N2」の場合では、すでに 4.1 で述べたように、N1 は N2 を包括する総称的な名称（あるいは総括的な概念）を示す名詞であり、N2 は N1 を代表する名詞である。「N1=N2」というより、「N1>N2」である。具体的な例を挙げてみると、「友人の馬木さんは日本人です。」「友人」と「馬木さん」が文の構成上同じ機能を果たしている関係である。「友

人」は総括的な名称で、「馬木さん」はその代表的なものであるといえるだろう。

小林(1996)は「首都東京は日本の政治・経済の中心である。」「政治家田中角栄はロッキード事件で失墜した。」のような「N1N2」と「N1のN2」の間には書きことば、話しことばの文体的な違いも感じられる⁶⁷と述べている。しかし、以上で見てきたように「政治家田中角栄」と「政治家の田中角栄」は、同じ意味であるが、「われわれ日本人」と「われわれの日本人」⁶⁸は全く意味が異なってくる。書きことばと話しことばの文体的な違いだけではないようである。

二つの違う形をしている「N1のN2」と「N1N2」は両方とも同格を表すことができる。しかし、それぞれ以下の傾向が見られる。

- I. 例文①～⑥のような、「N1のN2」の同格表現では、N1は基本的に一般語か概念語であり、N2は固有名詞・人名である。N2はN1の代表として、提示されている。つまり「N1>N2」である。
- II. 例文⑦⑧のような、「N1のN2」の同格表現では、N1は固有名詞のように特定されるもので、N2は複数ある普通名詞となる。特に、例文⑦の場合、N1とN2の順番が逆になっても、同格表現といえることもある。ここでは「N1<N2」である傾向が見られる。
- III. 例文⑨～⑪のような、「N1N2」の同格表現では、N1はN2を引き立てるために、加えられたものと考えられる。この中のN1とN2の関係については、N1はN2そのものである。つまり「N1=N2」である。

以上でまとめてきた「N1N2」、「N1のN2」に関する説明から、教科書に提示されている同格の「の」の説明が不十分であることがわかった。そして、同格の形も一つではないことから、学習者を混乱させていることがわかった。日本語学習者が同格の表す意味や用法などを十分に理解していないと考えられる。

⁶⁷ 同上。

⁶⁸ 「日本人のわれわれ」「留学生の私たち」といっても問題ないようであるが、「石原の私」といういいかたについてはさらに検討する必要があるようである。今後の課題としたい。

4.5 終わりに

本章では同格の「N1 の N2」、「N1 という N2」、「N1N2」の三つの形式をめぐって論じてきた。特に、日本語学習者を混乱させやすい「N1N2」、「N1 の N2」の二つの形をしている同格表現について、主に分析してきた。各学年における「の」の誤用率を通して、学習者がどの程度同格の「の」を把握しているのかを考察してきた。上級になっても、同格の「の」に関する誤用率が下がらない原因も探ってみた。

中国語では N1（人：N2 と同一関係）+N2（人）の場合、どういうふうに表示しているのか例を見てみる。「那时，比起学校的同学来，比起亲戚叔叔来，我更喜欢这个姐姐。」下線の部分からわかるように、中国語は「的」が不要である。つまり N1 と N2 が同一関係あるいは同一人物の場合、中国語では何も挿入されない。それに、初級の日本語の教科書に、「N1 の N2」という同格表現が提示されている。それで、「太郎の弟」は容易に理解できるが、「弟の太郎」は習得するのに抵抗感が感じるのではないだろうか。ここで、日本語教育はどのように学習者にその抵抗感を無くさせ、「の」を用いる意識をもたせることが大切だろう。

以上でまとめたように、日本語の場合、初級の教科書に提示された「N1 の N2」だけではなく、ほかに「N1 という N2」、「N1N2」の同格表現もあることがわかった。しかし、「N1 という N2」の形は中国で作成された教科書では、同格というふうには扱われていないようである。また「N1N2」の同格表現について、中級・上級になると、例文しか出ておらず、説明も何も書かれていない。これらが学習者がなかなか習得しにくい原因の一つであると考えられる。

本論文で重点的に取り上げた「N1N2」、「N1 の N2」については、その違いを理解させ、適切に運用できるように教えることも改めて検討する必要があると思われる。

第5章「名詞」と「ナ形容詞⁶⁹」を中心に

これまで、アンケート調査の誤用率の高い部分を分析してきたが、母語の影響だけではなく、教科書の提示にも問題があることがわかった。第5章では「イ形容詞」の低い誤用率に対し、高い誤用率が出ている「ナ形容詞」に注目し、形容詞でありながら形の違う「イ形容詞」と「ナ形容詞」であるが、なぜ「ナ形容詞」の誤用率が高いかということと、「名詞」とどのような関連があるのかを考察する。

5.1 はじめに

本論文の最初で述べたように、日本語を教えるとき、短文を作らせたり文章を書かせたりすることが多い。その中に連体助詞の「の」の使い方の間違いが多く見られる。アンケート調査により、以下のような誤用例が現れる。例(1)は穴埋問題の「イ形容詞」の誤用で、例(2)は中国語の文を日本語に訳す問題の「ナ形容詞」の誤用である。

(1) *この鞆は田中さんの妹の赤い(の)鞆に似ていますね。

→这个包很像田中妹妹的红色的包。

(2) 有乐町田中の弟弟太郎是很有名的人。

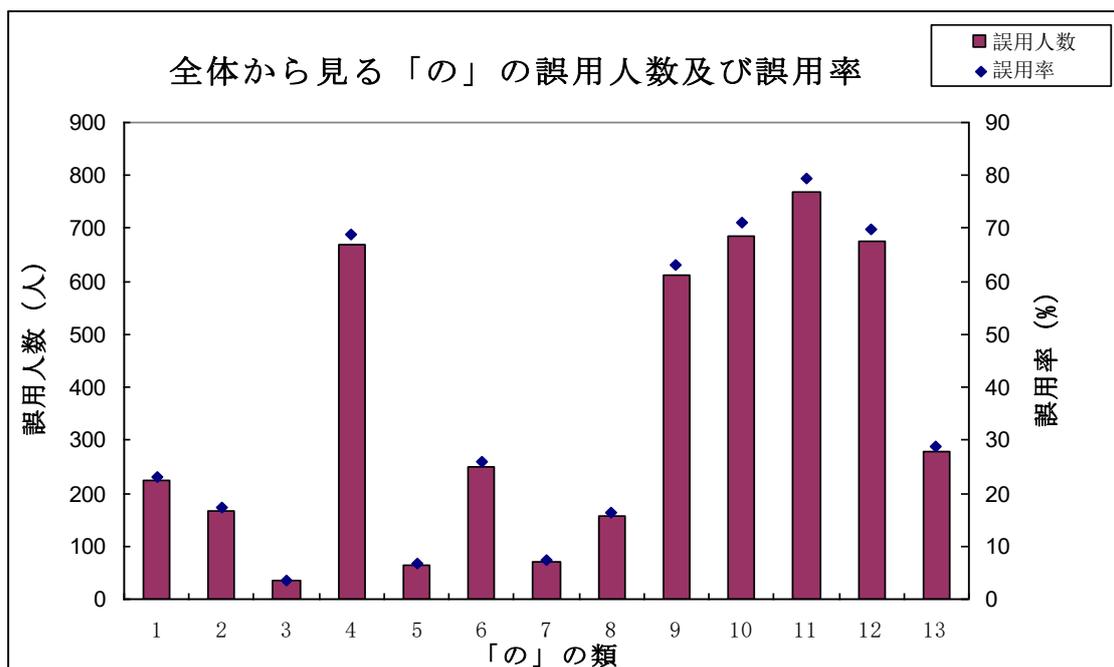
→*有楽町の田中さんの弟の太郎は有名の人です。

周知のように、「*おいしいの食べ物」、「*かわいいの女の子」、「*暑いの日」、「*綺麗な人」、「*静かの海」のようなイ形容詞/ナ形容詞が名詞を修飾する場合、中国語母語日本語学習者は習慣的にその後ろに助詞の「の」をつける誤用がしばしば見られる。それは、中国語では形容詞が名詞を修飾する場合、助詞の「的」がつくことからである。日本語の形容詞といえば、また中国語母語日本語学習者にとって習得の難しいものの一つである。なぜならば、中国語の場合は、日本語の形容詞と異なり、形容詞に活用というものがなく、また「イ形容詞」と「ナ形容詞」の区別がないからである。

⁶⁹ 日本語教育において、「きれいだ」「元気だ」のような、名詞を修飾する時、「な」を用いる形容詞を「形容動詞」、「ナ形容詞」「Ⅱ類形容詞」「形容名詞」などと名づけられているが、本稿では「ナ形容詞」と呼ぶ。

下のグラフ 6 を通して、「ナ形容詞」の誤用について見てみる。

グラフ 6 の 13 番目は、「有名な人」を「*有名の人」と間違えた日本語学習者の人数とその誤用率である。赤い棒グラフが誤用人数を、青い点グラフが誤用率を示しているものである。



グラフ 6⁷⁰ (グラフ 4 再掲：第二問の中国語の文を日本語に訳す問題に見る 13 項目の「の」)

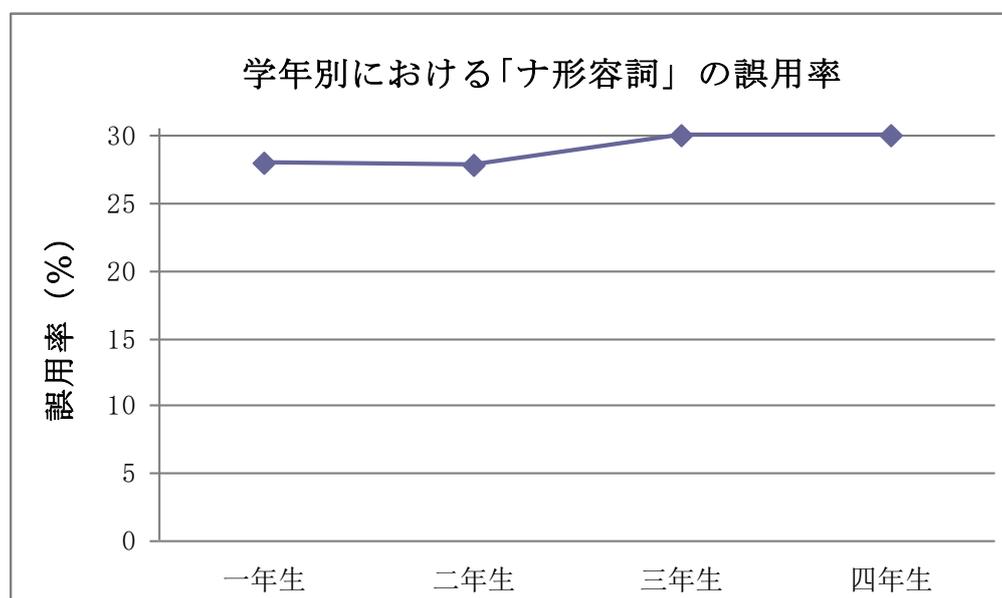
グラフ 6 に現れているように、アンケート調査を受けた有効回答の 968 人のうち 279 人がナ形容詞を間違え、誤用率が 28.82%に達している。この比率は「の」の誤用率の中で、高い方ではないが、決して低いとはいえないだろう。

⁷⁰ グラフ 6 はアンケート調査問題の第二問の翻訳問題に基づき、作ったものである。

前述のように、13 番目について、「有名な人」を「有名の人」に訳した場合、誤用とみなす。

今度のアンケート調査は、「イ形容詞」と「ナ形容詞」の部分において、グラフ 6~8 で示されている結果が出ている。しかし、第一問に「イ形容詞」の考察しか入れなかったこと及び第二問に「ナ形容詞」の考察しか入れなかったことについて、調査に考慮が届かなかったことであり、今後両方とも同じ設問に入れて考察する。

次に、学年別の「ナ形容詞」の誤用率について、「イ形容詞」のと比べながら次のグラフ7とグラフ8をもとに考察してみる。

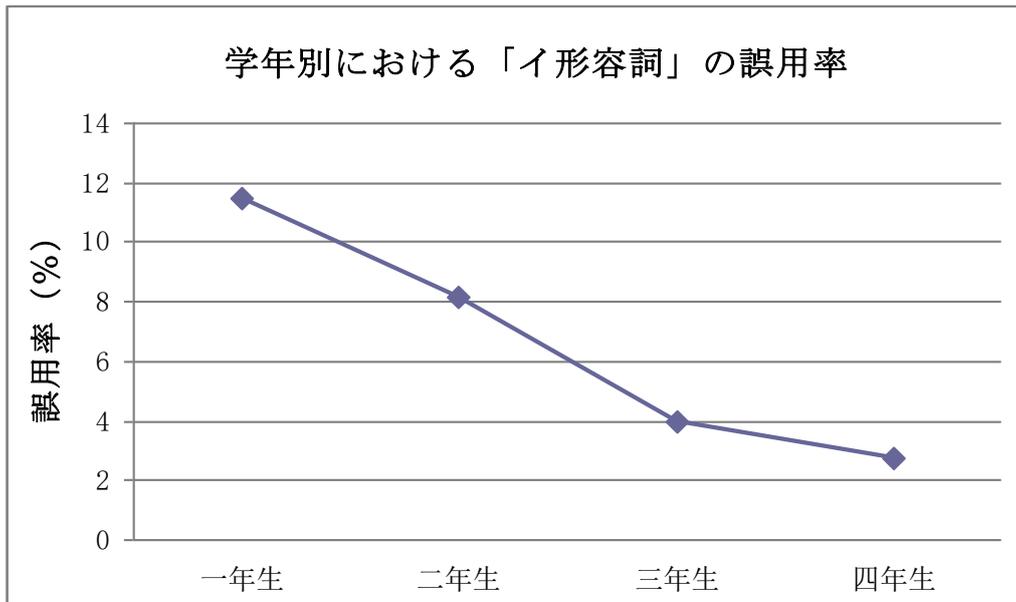


グラフ7

「有名な先生 (*有名の先生)」

グラフ7で示されているように、各学年の「ナ形容詞」に関する誤用はそれぞれ一年生は28.03%、二年生は27.78%、三年生は30.00%、四年生は30.00%である。

では「イ形容詞」の誤用率はどうなっているか、次のグラフ8を見てみる。



グラフ 8⁷¹

「赤い鞆 (*赤いの鞆)⁷²」

グラフ 8 を見てみると、学年別の「イ形容詞」の誤用率は、一年生は 11.46%、二年生は 8.12%、三年生は 4.00%、四年生は 2.73% であり、誤用が減少しているのがわかる。つまり学習時間の長さにしたがって、学習者がほぼ正確に使えるようになっているのである。

「イ形容詞」における「の」の過使用は中国語母語日本語学習者がよく間違える典型的な例として挙げられてきたので、教育現場で重点的に取り扱っていることが考えられる。しかしグラフ 7 とグラフ 8 を比べてみると、「ナ形容詞」の場合一年生から四年生まで、その誤用率はほとんど変わっていないことがわかる。なぜ学年別において、「ナ形容詞」は「イ形容詞」との誤用率がこんなに異なるのかを分析する必要があるのではないだろうか。

5.2 活用からみる「名詞だ」と「ナ形容詞」

「名詞だ」と「ナ形容詞」の活用は次の通りである。ナ形容詞と異なるのは、連体修飾用法でナ形容詞が「ナ」で修飾するのに対し、名詞が連体助詞の「ノ」を用いる点である。

⁷¹ グラフ 8 は第一問の助詞の「の」を正しく入れる穴埋問題で、グラフ 6 は第二問の中国語文を日本語文に訳してもらう問題である。

⁷² 「赤い鞆」を「*赤いの鞆」と間違えることである。

	名詞+だ	ナ形容詞
辞書形	雨だ	元気だ
ナイ形	雨ではない（じゃない）	元気ではない（じゃない）
バ形（条件形）	雨なら	元気なら
テ形	雨で	元気で
タ形	雨だった	元気だった
タラ形	雨だったら	元気だったら
タリ形	雨だったり	元気だったり
連体修飾用法	雨の（例：雨の日）	元気な（例：元気な人）
副詞的用法	雨に	元気に

表 8⁷³

表 8 からわかるように、日本語のナ形容詞の形から見ると、形容詞というより、名詞に近い。そして、活用についても連体修飾用法以外、名詞と同じであることがわかる。中国語の場合、連体・連用修飾による「ナ形容詞」と「イ形容詞」という区別がないため、語尾が「イ」と決まっている「イ形容詞」は覚えやすい。しかし「ナ形容詞」は一見形が「名詞」に似ているため、連体修飾の場合「ナ」を用いるのか、「ノ」を用いるのか迷ってしまう。

「自由」・「幸せ」・「綺麗」「静か」を例にとり、大辞林（2006・第三版）を引いてみると、以下のように記述されている。

「自由」（名・形動）

例文：①自由な社会の実現。

②自由がきく

⁷³ 国立国語研究所（2001）『日本語教育のための文法用語』。

「幸せ」(名・形動)

例文：①幸せな生涯

②友人の幸せを祈る

「綺麗」(形動)

例文：①綺麗な景色

②綺麗に忘れてしまう

「静か」(形動)

例文：①静かな夜

②静かに話す

以上の四つの例から「自由」と「幸せ」は名詞と同時に「ナ形容詞」の機能を持っているのに対し、「綺麗」と「静か」は「ナ形容詞」の機能しか持っていないことがわかった。しかし、形から見ると「自由」と「綺麗」、「幸せ」と「静か」などの二種類に分かれ、どちらが「名詞」かどちらが「ナ形容詞」か同じ漢字系の中国と日本であるが、活用のない中国語に慣れてきた中国語母語日本語学習者にとってはなかなか「名詞」と「ナ形容詞」の区別が習得できない。

5.3 教科書に現れる「ナ形容詞」

▲『新編日語』(2009)

第四課 P61 から「ナ形容詞」が現れる。

「ナ形容詞」は形容動詞と呼ばれ、物事の性質や状態などを表す語である。形容動詞は限定語とする場合、語尾の「ダ」が「ナ」になり、形容動詞の「連体形」と呼ばれる。

例文：あのたてものはきれいですね。

あのきれいなたてものはだいがくのゲストハウスです。

第五課の「有名」(形動⁷⁴)というふうに提示されているが、名詞という品詞がかかれていない。つまり、教科書に一部分の「ナ形容詞」が「名詞」の品詞も持っていることが説明されていない。しかし、第十一課に出る「得意」と第十二課にでる「一生懸命」について以下のように提示されている。

「得意」(名・形動) / 「一生懸命」(形動)

なぜ同じ二つの品詞を持っている語が教科書に提示されるとき、統一されていないのだろうか。またなぜ「ナ形容詞」と「名詞」と両方とも提示される場合、その違いについて説明されていないのだろうか。

▲『総合日語』(2009)

第六課 P69 から「ナ形容詞」が現れる。

「イ形容詞」を「A_I」、「ナ形容詞」を「A_{II}」と表記し、それぞれⅠ類形容詞、Ⅱ類形容詞⁷⁵と呼ばれる。

名詞を修飾する連体形の場合、以下の表9にまとめられている。

	辞書形 ⁷⁶	連体形
Ⅰ類形容詞	大き・い (語幹+語尾)	大き・い (語幹+語尾)
Ⅱ類形容詞	立派 (語幹)	立派・な (語幹+語尾)

表 9⁷⁷

(「ナ形容詞」の表記について、『大辞林』にも教科書にも「立派だ」ではなく、「立派」のように語幹の部分だけ提示されている。例えば『総合日語』には「複雑」/<形Ⅱ>/复杂(的)というふうに提示されている。「名詞」のような提示の仕方は、「ナ形容詞」を習得しにくい一つの原因だと考えられる。)

⁷⁴ 形容動詞の略したいいかたである。
⁷⁵ イ形容詞・ナ形容詞とも呼ぶ。
⁷⁶ 中国語の説明では「词典形」と呼ぶ。
⁷⁷ 『総合日語』 p.70。

例文：図書館はあの白い建物です。

立派な図書館ですね。

第六課の単語表に出ている「複雑」も（形Ⅱ）と提示されている。名詞という品詞についても言及されていない。しかし、『新編日語』と同じように、第七課の「便利」には（名・形Ⅱ）と、「有名」には（形Ⅱ）と提示されている。

▲『中日交流標準日本語』（2010）

第十課 P124 から「ナ形容詞」が現れる。

「ナ形容詞」は『総合日語』と同じく、Ⅱ類形容詞と呼ばれる。述語とする場合、以下のような例文が出されている。

例文：京都の紅葉は有名です。

この町はにぎやかでした。

この通りはにぎやかではありません。

昨日は暇じゃありませんでした。

「名詞」を修飾する時、「Ⅱ類形容詞＋な＋名詞」の形になる。

例文：奈良は静かな町です。

『新編日語』・『総合日語』と異なり、『中日交流標準日本語』の単語表に出ている「元気」、「便利」、「上手」、「下手」などの全ての「ナ形容詞」について、（形Ⅱ）というふう提示されている。

以上の教科書に書かれている「ナ形容詞」に関する内容について、以下の三点にまとめられる：

I. 呼び方が（三つの）教科書によって異なる。

	名称	表記
新編日語	形容動詞	形動
総合日語	Ⅱ類形容詞 (ナ形容詞)	形Ⅱ
中日交流標準日本語	Ⅱ類形容詞	形2

表 10

- Ⅱ. 「ナ形容詞」が名詞を修飾する時、「ナ形容詞+な+名詞」の形になると説明されている。
- Ⅲ. 『新編日語』と『総合日語』には「ナ形容詞」と「名詞」の両方の品詞を持つ語を、(形動) / (形Ⅱ) あるいは (名・形動) / (名・形Ⅱ) のように提示されているのに対し、『中日交流標準日本語』には両方の品詞を持つ語については、片方つまり(形2) しか表記されていない。

以上でまとめたように、すべての教科書には「ナ形容詞」が名詞を修飾するとき、「ナ形容詞+な+名詞」の形になると説明されている。「自由」のような「ナ形容詞」と「名詞」の二つの品詞を持っている語を、教科書によりそれぞれ違う提示の仕方がされていることがわかった。

しかし、なぜ教科書により、提示の仕方がこんなに異なるのか、またなぜ一部分の「ナ形容詞」の「名詞」の用法について、『新編日語』と『総合日語』のように、教科書が提示したりしなかったりするのだろうか。あるいは『中日交流標準日本語』のように、全く提示しないのだろうか。

5.4 「名詞」と「ナ形容詞」の境界線

吉川(1999)によると、日本語教育で形容詞といわれているものには、「イ形容詞」と「ナ形容詞」がある。前者は、ふつう単に形容詞といわれ、後者は形容動詞といわれてい

る。文法的に見ると、形容動詞つまりナ形容詞は、ほとんど名詞と同じ振舞いをする。“形容名詞”あるいは“名詞形容詞”といってもいいくらいである⁷⁸。「名詞」と「ナ形容詞」とは文法上で、とても似ているということである。

では、下の語について、どれが名詞かどれがナ形容詞かあるいはどちらもあるか。

- | | | | |
|-----|-----|------|-----|
| ①静か | ②元気 | ③病気 | ④無名 |
| ⑤有名 | ⑥親切 | ⑦丈夫 | ⑧自由 |
| ⑨幸せ | ⑩子供 | ⑪きれい | ⑫別 |
| ⑬普通 | ⑭味 | ⑮ピンク | ⑯最高 |

『大辞林』(2006)によると、答えが以下のようになる：

- | | | | | | | |
|--------|---|-----|-----|------|-----|------|
| 名 詞 | ： | ③病気 | ④無名 | ⑩子供 | ⑪味 | ⑮ピンク |
| ナ形容詞 | ： | ①静か | ⑦丈夫 | ⑪きれい | | |
| どちらもある | ： | ②元気 | ⑤有名 | ⑥親切 | ⑧自由 | ⑨幸せ |
| | | ⑫別 | ⑬普通 | ⑯最高 | | |

しかし、「静か」は「ナ形容詞」なのに、「静かな海」というが、「静かの海」という表現もある。

また「元気な人」というが、「元気を出す」という表現がある。「幸せを感じない」、「別の人に頼んでみる」、「ごく普通の家庭に育つ」のような表現もある。「幸せな飲物」と「幸せの飲み物」とは一体どのような違いがあるだろうか。

さらにこれらの語は名詞なのに、「無名な人」をいう人といわない人がいた。「子供の私」ではなく、「子供な私」という。「味」は「この料理は味がいい。」として使われることからわかるように、名詞であるが、コマーシャルで「味なことやる…」とナ形容詞的に使われ、一時期流行ったことがある。「きれい」は「味」とちょうど逆でナ形容詞であるのに、「きれいをまもる」、「きれいの秘密」のように名詞として使われ、それがまたコマー

⁷⁸ 吉川武時(1999)『日本語文法入門』。

シャルやキャッチコピーでしゃれたいいかたとして使われている。

以上の例からわかるように、ナ形容詞であっても、名詞として扱われている場合もあった。またナ形容詞でなく、名詞であっても、その連体形が「ナ」であるものもあった。つまり現代日本語において、名詞とナ形容詞の連体修飾するとき、「ノ」をとるか「ナ」をとるか、ゆれがあることである。さらに時枝（1950）は、名詞として使われるものの存在を理由のひとつとして、ナ形容詞を否定し体言とするのである。

5.4.1 「ナ形容詞」も「名詞」も両方の品詞を持つ語

芳賀（1962）は、「イ」型のほうは、「青い」以下、もともとからの日本語——“やまとことば”ばかりだが、「ダ」型のほうを見ると、「静かだ」「爽やかだ」のような“やまとことば”のほかにも、「愉快だ」「荘重だ」「軽薄だ」「具体的だ」「消極的だ」のような、漢字の音を組み合わせで作った＜漢語＞があり、また「スマートだ」「タフだ」「ドライだ」「エレガントだ」「シックだ」といった＜外来語＞があり、なかなかヴァリエティーに富んでいると述べている。

「ナ形容詞」が子音を伴わない母音の「イ」で終わる「イ形容詞」と異なり、いろいろな終わり方があり、名詞からの派生が多く、また漢語起源のものが多い。西洋語からも「ホットな」、「ユニークな」など種々のものから作られている。つまり「ナ形容詞」は、造語力があるため、外来語などを取り入れ、形容詞とすることができる。語幹の部分からナ形容詞のような語が中国語母語日本語学習者から、名詞と同じようなものだと思われる。

名詞とナ形容詞の違いは曖昧であり、名詞とナ形容詞、どちらでもいいと認識されているものをいくつか次に挙げる。

ナ形容詞と名詞両方とも使える語：

元気な人	元気の源
平和な日常	平和の象徴
幸せな人	幸せの条件
健康な子供	健康の秘訣

以上のような、連体修飾のとき「ナ」も「ノ」も使える語が少なくないであろう。それ

ら以外、安全、便利、楽などがある。

しかし、これらのナ形容詞も名詞も両方の品詞を持っている語を見分けるのは中国語母語日本語学習者にとっては大きな課題である。前述のように、ナ形容詞はイ形容詞と異なり、決まった形をしておらず、バラエティーに富んでいる。また 5.3 で述べていたように、一部分の「ナ形容詞」の「名詞」の用法について、『新編日語』と『総合日語』のように、教科書が提示したりしなかったりである。このような、教科書の提示の仕方が学習者を混乱させやすいことになるのではないだろうか。結果的に教科書に明確に提出されていない場合、「元気な人」もあれば、「元気の秘訣」もあることから、両方とも使えるので、「有名な先生」があるなら、「有名な先生」もおかしくないであろう。

また、『中日交流標準日本語』のように、全く提示しないこともある。これは学習者を混乱させはしないだろうが、教科書に「別の人」のような例文が現れると、どのように説明すればいいのか、教えるほうは考えておく必要があるようだ。

5.4.2 「ナ形容詞」の名詞的扱い方について

「きれい」は本来ナ形容詞であるが、「きれいの秘密」のようなキャッチコピーはよく見かける。また「お茶は幸せな飲み物です」と「お茶は幸せの飲み物です」という表現もある。これらのようなセリフやフレーズを見ると、留学生あるいは日本語学習者はどのような思いをするのだろうか。

ナ形容詞が、「ナ」をとるか「ノ」をとるか、「ナ」「ノ」どちらもとれるかの判断については、日本人に聞いたところではかなり個人差があるようである。しかし、「ナ」と「ノ」では、全く意味が同じとはいえないようである。

「自由な女神」と「自由の女神」

「自由な女神」は、女神自身が「自由」なのであるが、「自由の女神」のほうは自由ではない。ただ一つ概念あるいは一つの象徴として存在している。「自由の女神」の場合自由が名詞で、「自由な女神」の場合自由がナ形容詞である。「自由な女神」には女神が自由であることを表しているのに対し、「自由の女神」には女神が自由を象徴している。

では、「自由な女神」と「自由の女神」について、それぞれ中国語とはどのように対応

しているのでしょうか。

(日)		(中)
自由の女神	⇒	自由女神
自由な女神	⇒	自由的女神

以上の日本語に対する中国語訳を見てみると、「自由の女神」の「自由」が名詞の場合、中国語の訳が「自由女神」となり、「的」が用いられていない。しかし「自由な女神」の「自由」がナ形容詞の場合、中国語の訳が「自由的女神」となり、「的」がつく。「自由女神」は一語であり、「自由的女神」は「自由」が「女神」の自由の状態・程度を表している。日本語の場合には「ノ」と「ナ」をどちらをとるかによって、意味が異なってくるのに対し、中国語の場合には「的」を入れるか省くかということになる。しかし、以下のような場合だと、日本語学習者はどのように区別すればいいのだろうか。

(日)		(中)
健康の方法	⇒	健康的方法
健康な方法	⇒	健康的方法

日本語の場合は、意味は異なるが、「ノ」と「ナ」のどちらも用いられるのに対し、中国語の場合は、「ノ」と「ナ」のどちらも「的」で表すので、日本語学習者は「的」を日本語にする場合、「ノ」か「ナ」か混乱してしまうだろう。

中国語母語日本語学習者にとって、ナ形容詞と名詞の二つの品詞を持つ語がある場合、それらを使いこなせるようになるのは難しいであろう。「自由の女神」があり、また「自由な女神」もあるのである。教科書ではナ形容詞の後に「ノ」がつくのと「ナ」がつくのと、どのような違いがあるのか、そこまで考慮されていない。

また、以下のような会話が見られる。

ライターを悪戯してしまった五歳の娘に対し、父親が「バカな娘」と叱るつもりだったろうが、なぜか「バカの娘」といつってしまった。娘は素早く「パパはバカなのね」といい

かえした会話である。(日)

「バカなやつ」、「そんなバカな話はない」のように、名詞を修飾する場合、「ナ」をつけるというふうに覚えた日本語学習者だが、「誰の娘？」→「バカの娘」のような、限定される使い方は、新鮮であろう。

以上のような「バカな娘」もあれば、「バカの娘」もある。しかし、「有名な先生」はいうのに対し、「有名の先生」はいわない。これらは、学習者の頭を悩ませるのではないだろうか。

さらに、前述のように、『新編日語』と『総合日語』には「ナ形容詞」と「名詞」の両方の品詞を持つ語を、(形動) / (形Ⅱ) しか提示されていないのと、(名・形動) / (名・形Ⅱ) のように両方とも提示されているのがある。このような統一されていない教科書の提示の仕方も適当でないといえるのではないだろうか。このことが、本論文のアンケート調査の図7と図8の結果に見るナ形容詞の誤用率がイ形容詞より高い原因の一つと考えられる。

5.4.3 「名詞」のナ形容詞的扱い方について

名詞が名詞を修飾する時は、助詞の「の」を使うと日本語学習者に教える。しかし、「大人な対応」のような、「大人」は名詞であるのに、「な」で名詞を修飾する。

名詞のナ形容詞的な扱い方として、つまり「名詞な名詞」、インターネットで以下のような例があらわれる：

例 (3) A : 「ビールにする？ 日本酒にする？」

B : 「…ん～、今日はワインな気分かな」

例 (4) (クリスマスツリーやきれいなイルミネーションを施した街路樹を見て)

「うわ～、クリスマスな感じだね。」

例 (5) 「味な事を言うね」

例 (6) 「俺、毎日 インターネットな生活…」

例 (7) まだまだ子供な私に…

例 (8) この部屋には重い病気な人がたくさんいます。

以上、いくつか「名詞な名詞」の例を挙げた。今まで、ナ形容詞が名詞を修飾する時、「ナ形容詞+な+名詞」という形で教わってきた日本語学習者には混乱以外の何ものでもない。そのネイティブしかわからない微妙なニュアンスをもつ名詞のナ形容詞的扱い方が学習者を迷わせるのではないだろうか。一体「きれい」はナ形容詞なのか名詞なのか、「子供」は名詞なのかナ形容詞なのか、区別がつかなくなるだろう。これにはナ形容詞と名詞を区別する基準や方法が必要だと考える。

「子供の私」と「子供な私」を例にして分析してみる。「子供」という言葉はそもそも名詞であることには疑問の余地がない。

「子供の私」については、「子供である私」のように、同格である。「子供」と「私」が同じ機能を果たしている。つまり、「私は子供である」というふうに理解すればいいのであろう。

「子供な私」については、「私は子供ではない」が「子供っぽい」、「子供のような私である」ということであらう。

名詞に「ナ」がつくと、その名詞を帯びた状態や性質などが表せる。「名詞な名詞」の名詞のナ形容詞的扱い方の例はまだ限られている言葉にしか現れないが、「名詞」と「ナ形容詞」において、「ノ」と「ナ」の使い方を見分けるためにも、日本語学習者には知っておいたほうがいいかもしれない。

5.5 終わりに

これまで、「ナ形容詞+な+名詞」、「ナ形容詞+の+名詞」、「名詞+な+名詞」につい

て見てきた。周知のように、中国語には「ナ形容詞」というカテゴリーは存在しない。名詞が名詞を修飾する場合、前後の語の意味合いによって、「的」が用いられるか用いられないかが決まる。しかし、形容詞が名詞を修飾する場合、必ず「的」がつく。日本語のように形容詞に「イ形容詞」と「ナ形容詞」に分かれていない。そのため、中国語母語日本語学習者にとっては、形は名詞に近いが、用法が違うナ形容詞は覚えるのも大変であるし、ナ形容詞と名詞の両方の品詞を持っている語はさらに習得が難しいのである。

例えば、

(日)		(中)
特別な人	⇒	特别的人
特别の人	⇒	特别的人

「特別な人」の「ナ」がつく場合、ナ形容詞で、一般と異なっていることを示している。「特别の人」だと、「特别」が名詞になり、だれか一人に限定されている意味合いが入っているだろう。

しかし、それに対応する中国語の訳を見ると、全く同じである。学習者にどのようにその違いを教えればいいのかも考えなければならないのである。

もう一組みの例を見てみよう。

(中)		(日)
有名的老师	⇒	有名な先生
有名的老师	⇒	有名の先生*

「特别的人」について、日本語には二つのいいかたがあるが、「有名的老师」について、日本語では「有名の先生」といういいかたが非文になる。日本人が名詞とナ形容詞をどこまで線引きしているのだろうか。一つの中国語の表現であっても、それぞれ日本語になると、二つの表現があったり、一つの表現しかできなかつたりする。中国語を母語とする日本語学習者がアンケート調査で示しているように結果的に両方とも「ノ」をとるのも、基

本的な名詞とナ形容詞の使い分けを習得していないことではないだろうか。また 5.4.3 で述べたように、名詞でも「ナ」をつけて名詞を修飾する新しい日本語ができている。

以上のような問題をどのように正確に理解を深めるのか、教える側としては工夫をする必要があると思われる。

第6章 「の」から「が」「を」への誤用

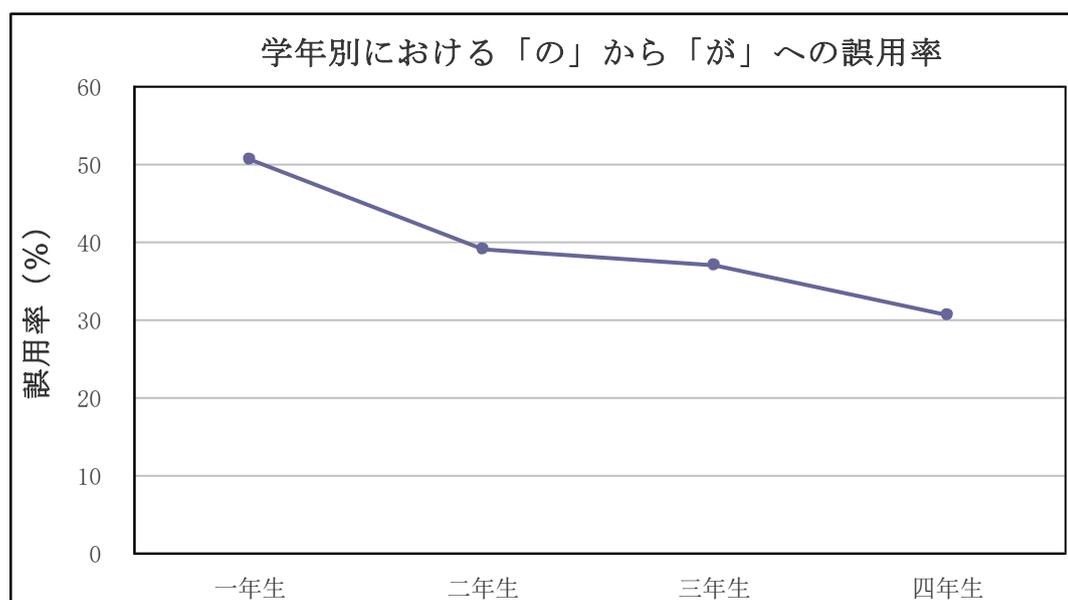
6.1 はじめに

本調査は前述のように、イ形容詞、ナ形容詞、また「が」「を」(P18 寺村 (1992) を参照) の役割を担う「の」にもよく誤用が見られるので、アンケート調査の問題に入れた。

グラフ 9⁷⁹①、②は学年別における「の」とすべきところを「が」「を」とする誤用である。

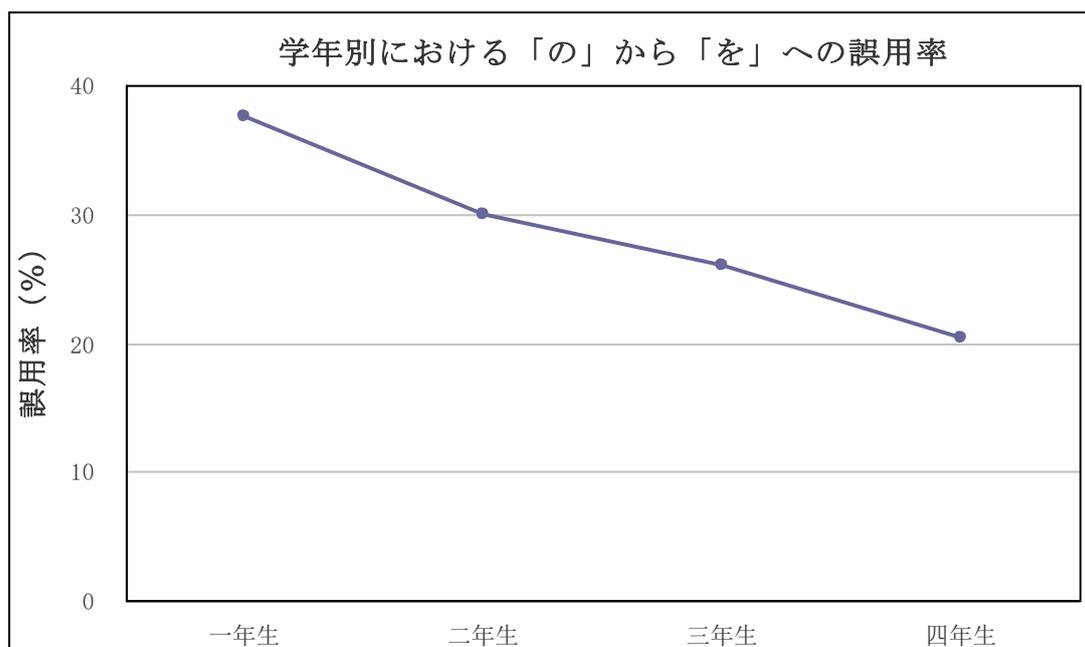
調査問題：①「…赤ちゃん（ ）泣き声が気になります。」

②「…郵便袋（ ）荷作りをしてやりました。」



グラフ 9① (学年別における第一問の14項目「の」のうち、14番目の誤用率)

⁷⁹ 調査問題の①について「の」を入れるべきところに「が」を、②について「の」を入れるべきところに「を」を入れる誤用以外；①のところに「は」を、②のところに「で」を入れる日本語学習者がそれぞれ18人、20人いた。しかし、いずれも20人以下のため少ないと判断し、取り上げないことにする。



グラフ 9② (学年別における第一問の 14 項目「の」のうち、14 番目の誤用率)

グラフ 9①とグラフ 9②で示されているように、学年別の「の」から「が」「を」への誤用率を見てみると、この部分は日本語学習者の学習時間により、誤用が減少していることがわかる。しかし学習者がなぜ助詞の「の」と「が」「を」を混同するのかが疑問である。

今まで、「の」と「的」の対応・不对応について見てきたが、他の助詞との関連について、触れていない。グラフ 9①とグラフ 9②のような「が」「を」の主格や目的格を表す助詞と混同する場合、学習者はどういうふうに「が」「を」と連体助詞の「の」を認識しているのかを考えていきたい。

6.2 「が」「を」から「の」に

寺村⁸⁰ (1992) によると、「ノ」のもつ特性は、それが単に連体的である。つまり用言の内容を限定・特定化するのでなく、後続の名詞の内容を限定することだけで終わるのではない。それは、後続の名詞が内容の上で用言的である。つまり用言の名詞化したものであるとき、その内容に対して、あるいは「ガ」のような、あるいは「ヲ」のような関係に立っていることを含み得る点にあると述べている。

⁸⁰ 寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』pp. 237。

例：

(1) 「が」 格

芥川が自殺する → 芥川の自殺

彼が結婚する → 彼の結婚

(2) 「を」 格

南ベトナムを解放する → 南ベトナムの解放

日本語を勉強する → 日本語の勉強

以上のように、例文 (1)、(2) は「が」と「を」が「の」に替えて、簡潔に表すことができる。

しかし、それは日本語学習者の誤用にどういう関係があるのか、まず「の」から「が」への誤用を見てみたい。

6.3 「の」から「が」への誤用について

6.3.1 アンケートから見る誤用

グラフ 9①で示されているように、アンケート調査の結果から、「…赤ちゃん（ ）泣き声…」の誤用について、「の」を入れていない学習者はほとんど「が」を入れていた。ここの部分の誤用について、以下のことが考えられる。

I. 「赤ちゃんの（が）泣く/声」のような「(主語+述語) +名詞」の連体修飾部においての助詞の使い方について、日本語学習者が「の」より、「が」に慣れていることが考えられる。

II. 日本語学習者が「動詞連用形（動詞ます形のこと、以下は動詞連用形と呼ぶ）+

名詞」から作られた複合名詞が習得できていない。

Ⅲ. 教科書において、「動詞連体形＋名詞」についての文法説明がされているが、「動詞連用形＋名詞」の形についての文法説明がされておらず、一つの単語として提示されているだけである。日本語学習者は正しい使い分けができず、混用していることが考えられる。

日本語学習者に最初に動詞を教えるとき、活用で五段動詞、一段動詞、カ変動詞、サ変動詞という四種類に分けて覚えさせる。また機能により、自動詞と他動詞に分けて教えるのが一般的である。

大体以下のようにセットで教える：

「主語が～を他動詞」と「主語が自動詞」という形である

学習者の誤用について、以下の形成過程になると考えられる：

「赤ちゃんの（が）泣く声」→「赤ちゃんが泣く声」→「*赤ちゃんが泣き声」

しかし、なぜ「泣き声」は名詞なのに、学習者が「の」ではなく、「が」を入れるのだろうか。

6.3.2 「の」より「が」を好む

「花が咲く」、「雨が降る」のような表現における主語「花」、「雨」に対する述語「咲く」、「降る」がそこでいい切りになるときは「が」が用いられるが、述語がそこでいい切りにならず後に続く場合は、すなわち、連体修飾句の場合は「～が～（活用語連体形）＋（体言・準体助詞・形式名詞）」または、「～の～（活用語連体形）＋（体言・準体助詞・形式名詞）」の形が用いられる⁸¹。

⁸¹ 国際交流基金日本語国際センター(1997)『教師用日本語教育ハンドブック 文法Ⅰ』。

いくつか例文を挙げてみる：

- (1) ほんとうに気持ちの（が）いい朝です。
- (2) 雨の（が）少ない地方で多く作られています。
- (3) 滝廉太郎は、日本の（が）生んだ名作曲家で、二十四歳の若さでなくなりましたが、…
- (4) 青年の（が）いなくなった日から、老人はぼうぜんとした日を送りました。
- (5) 季節に関係の（が）ない病気で恐ろしいのは、結核である。
- (6) 社会福祉国家として有名なスウェーデンの（が）誇るべきものである。
- (7) 女権運動の（が）盛んな国である。
- (8) この度は競争率の（が）激しい東京外国語大学にご入学なされたとのこと、ほんとうにおめでとうございます。

以上の例文は、括弧の「が」により、おきかえられるものである。つまりこのような例文の場合、「の」でも「が」でも文法的に成立し、意味的にもほとんど同じであろう。

しかし、中国語母語日本語学習者は「の」を使用するより、「が」のほうが使いやすいようである。

例：

- (9) 魚が好きです。
→魚の好きな李さんです。

のように、例文をあげ、説明されることが多いかと思われるが、日本語学習者に出された宿題や作文には「魚が好きな李さんです」のような、「が」を好んで用いる学習者のほうが圧倒的である。

なぜ日本語学習者が「の」より「が」を用いるのか、『総合日語』⁸²（2009）には連体修飾従属句の主格は「が」で示すが、通常「の」におきかえることができる。しかし、もし従属句の主語の名詞と被修飾語の名詞の間、多様な成分がある場合、誤解を招きやすいのであれば、「が」を用いたほうがよいというふうに簡単に説明されている。日本語学習

⁸² 説明は中国語から直訳したものである。p.293。

者としては誤解を招くことを怖がり、誤用が出ないように「が」を用いたほうがよいという説明に影響され、「の」より「が」をとることにするのであろう。「の」と「が」の区別について、さらに説明する必要があると思われる。

次の例文を見てみる。

(10) 雨 (が/の) 降り出すのと同時に、雷も鳴り始めた。

(11) 新社長 (が/の) 就任するのにもとめない、社屋が改装された。

(12) 私はコーヒー (が/*の) 好きなのです。

(13) この家は交通 (が/*の) 便利なのに、なかなか買い手が見つからない。

以上の (10)、(11) は「が」、「の」両方とも使えるのに対し、(12)、(13) は「が」しか使えない。(10)、(11) について、Hiraiwa (1998) は述語が連体形であることが主格の「の」の生起する直接の要因ではなく、名詞性の被修飾成分が存在することが主格の「の」の生起とかかわっていると考えられると述べている。だとすると、(12)、(13) が説明できなくなる。

大島 (2010) は (12)、(13) についてこのように述べている。文末の「のだ」はモダリティ成分として一体化しており「の (被修飾成分) +だ」と分析することができないためである。「はずだ」「わけだ」なども同様に捉えることができると述べている。

しかし、これらの理論を初級・中級の学習者に説明すると、一層学習者を混乱させるのではないかと思われる。

教科書においても、中国の大学で主に使用されている『新編日語』(2009)、『総合日語』(2009)、『中日交流標準日本語』(2010) には「が」と「の」の使い分けについての詳しい説明が見当たらない。

6.3.3 教科書の説明不足：(動詞活用形) に後接する表現形式において

6.3.1 のⅡで述べたように、「動詞連用形」いわゆる動詞の変形の後、名詞と結合し、新しい名詞ができるが、中国語母語日本語学習者はこの表現形式を習得していないといえ

るだろう。なぜならば、『総合日語』、『新編日語』、『中日交流標準日本語』の「動詞連用形」に関する文法説明を見てみると、動詞連用形いわゆる用言に接続する形は補助動詞と結合し、新しい文型をつくと説明されているだけである。

例：

(14) 「動詞連用形+はじめる」

→来週から、わたしはダンスを勉強しはじめます。

(15) 「動詞連用形+出す」

→子供は急に泣き出しました。

(16) 「動詞連用形+続ける」

→彼女は10時間ぐらい眠り続けた。

以上は『標準日本語』に出されている文法の説明である。これらは、一つの文型として、学習者が覚えやすいようにルールを提示し、使用方法も説明されている。

また動詞連体修飾いわゆる体言に接続する形、連体形については、「動詞た形」、「動詞ている形」、「動詞る形」が名詞を修飾し、名詞句をつくるというふうに説明されている。

例：

(17) 人間の暖かい心を伝える映画が好きです。 『新編日語』

(18) 焼いた魚と煮た魚は好きです。 『新編日語』

(19) あそこは、李さんがいつも行く喫茶店です。 『総合日語』

(20) 京劇の学校に通っている友達が、初めて舞台に立つんです。 『総合日語』

以上の「伝える映画」、「焼いた魚」、「煮た魚」、「行く喫茶店」、「通っている友達」のような動詞の連体修飾が名詞句を作るのを、学習者に覚えさせることが基本となっている。

以上で述べたように、教科書には「動詞連用形＋用言」及び「動詞連体形＋体言」の二つの形が基本文型として提示されている。

しかし、「動詞連用形＋名詞」に関する説明や例文などは以上の三つの教科書には見当たらない。

6.3.4 「動詞連体形＋名詞」と「動詞連用形＋名詞」

「動詞連体形＋名詞」という形はすでに 6.3.3 で述べたように、名詞句を作ることができる。しかし、「動詞連用形＋名詞」という形に関する説明が提示されていないなら、教科書にどのような形式で現れるだろうか。

実はかなりはやい段階で単語の形として提示されているのである。

例：

かいもの	たべもの	のみもの	たてもの
かえりみち	いかた ⁸³	やきにく	消しゴム
……			

以上の単語は「動詞連用形＋名詞」からなる名詞の組み合わせであるが、教科書にはそこまで説明されず、ただ名詞というふうに括弧付け、説明が加えられる。このような提示の仕方は学習者には「動詞連用形＋名詞」という考えはなく、一つの名詞だと認識している。

しかし、動詞はその連用形のみで動作名詞を作ることができる。いわゆる和語である。いくつか例を見てみよう：

例：

⁸³ 「～かた」について、『総合日語』第 16 課、『中日交流標準日本語』第 22 課には説明されているが、『新編日語』には単語表以外、説明が見当たらない。ほかの「動詞連用形＋名詞」の形について単語としてしか提示されていない。しかし教科書に提示されている説明は以下のようなものである。「動詞の「ます」の部分を取り、「かた」を加え、「～する方法」という意味である。」教科書の説明によると、「動詞連体形＋名詞」の説明を中心とするのではなく、「かた」の説明に偏っているように思う。

V		N
泳ぎます	→	泳ぎ
遊びます	→	遊び
話します	→	話し
読みます	→	読み
……		

以上の右の名詞について、「動詞連用形」はその形で動作名詞となることが多く、さらに名詞と接合して複合名詞が作られる。これはまた動詞の連体形が名詞を修飾する場合と、どのような違いがあるのか。これは、名詞句と名詞の違いであり、その前に入れる助詞が違って来る。

「動詞連体形+名詞」と「動詞連用形+名詞」について、以下グループAとグループBを見てみる：

A		B
笑う声	→	笑い声
泣く声	→	泣き声
笑う話	→	笑い話
作る笑い	→	作り笑い
悩むこと	→	悩み事
習うこと	→	習い事
飲む薬	→	飲み薬
……		

以上のような「動詞連用形+名詞」が「複合名詞」を作ることができる。形から見ると、BグループはAグループに似ている。そして、Aグループは動詞連体形が名詞を修飾し、名詞句を作るのに対し、Bグループは動詞の連用形が名詞と結合し、複合名詞を作る。ある程度規則的に作られている形である。つまり両方とも名詞的扱いでも問題ないのである。例文を挙げる：

(21) 隣の部屋から杏子 の/が 笑う声が聞こえます。

(22) 隣の部屋から杏子 の 笑い声が聞こえます。

(23) 悩む事はあまりしたくないですね。

(24) 李さん、何か悩み事でもありますか。

例文 (21) ~ (24) を見ると、(21) は名詞句なので、「の」と「が」両方とも用いられるのに対し、(22) は名詞なので、「の」しか用いられない。(23) と (24) は名詞句と複合名詞が主語になるので、問題ない。しかし「…赤ちゃん()泣き声…」の括弧に「が」を入れる学習者が出ていることから、すでに言及した「動詞連用形+名詞」のような語構成について、学習者を混乱させないように、説明を加えるべきではないかと考えられる。例文 (21) と (22) の違いについても言及することが必要だと思われる。学習者はこのような用法が理解できておらず、誤用が生じてしまうのではないだろうか。

教科書では、動詞の連体形が名詞を修飾する連体修飾による名詞句は提示されているが、動詞の連用形と名詞との結合による複合名詞には説明も少なく、この二つの名詞句の違いにも言及されていない。「笑う声と笑い声はどのような違いがあるか？」と聞かれたら、正確に答えることは難しく、運用面では混乱が生じてしまう可能性がある。学習者の立場になり、詳しく説明し意識させたいうえで、常用的な動詞連用形と名詞の結合する名詞句をわかりやすく理解させることが必要である。

6.4 「の」から「を」への誤用について

6.4.1 アンケート調査のデータから以下のことが考えられる：

- I. サ変動詞の使い方がよく理解できていない。
- II. 動詞連用形は造語力があるが、「名詞+連用形」の複合語は、ある程度慣習的なもので、自分で勝手に作ることはできない。そして、新しくできた複合語は名詞であったり、動詞であったりする。これらの使い方を理解していないと、誤用がでてしまうと考えられる。

Ⅲ. 動詞連用形と組み合わせでできた語について、名詞としてしか使わないのと、名詞と動詞の両方の品詞をもつ語があって、その使い分けは日本語学習者にとって極めて難しいことである。また動詞連用形が動詞と結合し、新たな複合動詞を作る。さらにその複合動詞の連用形が名詞として扱われる。学習者がこれらの複合の形式を区別できず、混乱していると考えられる。

サ変動詞はカ変動詞と違い、カ変動詞は「来る」一つしかないのに対し、サ変動詞は「動作名詞」と「する」との組み合わせでたくさんのサ変動詞ができることである。

以下はその例である：

勉強する	運動する	散歩する	通学する	食事する
信用する	感心する	反対する	意見する	入学する
仕事する	…			

これらのサ変動詞は「～をする」という形にいかえることができる。

「勉強する」→「勉強をする」

「運動する」→「運動をする」

「散歩する」→「散歩をする」…

「勉強する」の場合は、「勉強」という動作性の名詞に「する」をつけて、複合動詞⁸⁴としたものであるが、「勉強をする」の場合は、「する」という形式的な動詞の内容を「を」が示しているものである。

「日本語を勉強する」ときの「日本語を」は「勉強する」の内容あるいは対象を示すもので、ちょうど「勉強をする」の「勉強を」と同質のものである。「日本語を」のように

⁸⁴ 複合動詞とは二つ以上の単語から成る複合語であり、複合語を構成する単語全てか、または後部の単語が動詞であって全体として動詞の役割を果たすものである。複合動詞の形態は動詞＋動詞、名詞＋動詞、副詞/擬態語＋動詞、動詞テ形＋動詞となる。例えば、走り出す、根ざす、執筆する、べとつく、持っていくなど。

述語の内容を示す「日本語を（勉強する）」と「勉強を」のように形式的な動詞「する」の内容を示す「勉強を（する）」のような目的語の共存は許されない。

述語が「勉強する」であったら、「日本語を勉強する」でよいわけだが、述語が「する」であったら、「日本語の勉強をする」としなければならない⁸⁵。

日本語学習者がこのようなサ変動詞を習得する過程で、「日本語を勉強する」がよいか「日本語の勉強をする」がよいか迷ってしまうことが多い。さらに「日本語の勉強する」のような誤りをおかす学習者もいる。

6.4.2 「～を他動詞/他サ変動詞」から見る誤用の可能性

サ変動詞においては、「を」の位置が変わることが以下の誤用につながるのではないかと考えられる。

「荷作りする」→「郵便袋を荷作りする」→「*郵便袋（を）荷作り」

教科書の提示からわかるように、「～の名詞をする」という形より、「～を動作名詞する」という形が使いやすいようであり、サ変動詞の前に「を」が用いられることが多い。

なぜならば、他動詞を教える時、前述のように、

「主語が～を他動詞」

という文型のセットで学習者に教えることが主流である。他動詞の中、サ変動詞はまた「自サ」と「他サ」に分かれる。つまりサ変動詞で他動詞の場合、

「主語が～を他サ変動詞」

という形になる。周知のように、目的語を表す場合、助詞の「を」が用いられる。しかし目的語の共存は許されないため、「を」ではなく、「の」が用いられる。こういう点が日本語学習者を混乱させ、誤用を起ししやすい原因の一つだと考えられる。

また、「荷作り」は名詞と動詞の連用形を組み合わせたものであり、名詞でありながら、

⁸⁵ 国際交流基金日本語国際センター(1997)『教師用日本語教育ハンドブック 文法 I』。

サ変動詞の機能を持っている。

同様なものがいくつかあげられる：

C：

(25) 日本でも、これからは、おいしい栄養食品であるチーズを手作りし、我が家特製のチーズの味を楽しむのもよいものです。(我)

(26) 情報を把握しただけでは、まだ密航者にはなれない。スネークヘッドはあくまでも密航を手引きする人間であって、密航者が密航先に根を張って暮らせるようになるまで面倒を見ることはない。(蛇)

(27) そして、アズサミコが亡き魂の消息を物語りするのを聞いて、泣き崩れている。
(日)

Cグループの「手作り」、「手引き」、「物語り」のような名詞もサ変動詞も両方の品詞を持つ語であった。名詞の役割を果たす場合、「の」が用いられるが、動詞として現れる場合、助詞の「の」ではなく、「を」が用いられる。しかし同じような組み合わせでも、名詞の品詞をもっているが、サ変動詞の品詞を持っていない語もある。

D：

(28) I Dまで晒して、バカ丸出しだよね。(ネ)

(29) 君はもっと物分りがいいと思っていたのに… (大)

Dグループの「丸出し」、「物分り」はCグループと形が類似しているが、サ変動詞ではない。これらの形が似ているのに、使い方が異なる日本語が学習者を悩ませることも事実であろう。長い文において、サ変動詞の「～を動作名詞する」の形として理解し、覚えているので、「を」を入れることが習慣的になったのであろうか。結局、決まった文型としての覚え方が自動的に「する」を無視して、「を」だけ残すこととなった誤りであろう。つまり、前述のように、「荷作りする」→「郵便袋を荷作りする」→「*郵便袋(を)荷作り」のような誤用が出てくるのであろう。

6.4.3 「動詞連用形」から「名詞」に

すでに、6.3 で述べたように日本語の動詞の連用形は名詞として使われることが多い。カ変動詞を除いて、以下のように、三つのグループに分けられる。

五段動詞：

休みます→休み	泳ぎます→泳ぎ
遊びます→遊び	暮らします→暮らし
手伝います→手伝い	座ります→座り

一段動詞：

はじめます→はじめ	助けます→助け
教えます→教え	考えます→考え
疲れます→疲れ	迎えます→迎え

サ変動詞：

勉強します→勉強	導入します→導入
解決します→解決	批判します→批判
代弁します→代弁	運動します→運動

サ変動詞の語幹は⁸⁶名詞として扱うことができる。教科書の単語表にも表記されているが、五段動詞及び一段動詞の連用形の語幹も名詞として扱えるという説明が見当たらない⁸⁷。つまり、学習者は五段動詞と一段動詞の連用形に名詞の役割があることを知らないといえる。

6.4.4 「動詞連用形」に関連する複合語

動詞連用形は「形容詞」・「動詞連用形」・「名詞」などと結合し、新しい名詞を生み出す。

例：

⁸⁶ 「します」をとり、名詞の部分をさす。

⁸⁷ すべての動詞の語幹が名詞になれるわけではない。たとえば、見る→見ます→*見 使わない。

はやく+おきます → はやおき
ふります+はじめます → ふりはじめ
ふたり+のります → ふたりのり

以上の「はやおき」、「ふりはじめ」、「ふたりのり」のような組み合わせから動詞連用形が他の品詞をもつ語と複合名詞及び複合動詞が作れる。これらの複合名詞及び複合動詞を正確に運用することが重要なことだと思われる。複合語の多様さが学習者の混乱を招いているといえる。次の例文を見てみよう。

(30) 晩御飯をたべすぎると胃が痛くなる。

(31) あなた、たべすぎよ。

例文の(30)は日本語教育において教えられてきた基本文法であるのに対し、(31)のような使い方は学習者にとって誤用が生じやすいようである。なぜだろうか、教科書に以下のように説明してある。

たべ(ます)+すぎます → たべすぎます

つまり、「たべすぎる」を一つの文型として教えられ、学習者は動詞の形としてしか教わっていない。しかし「動詞連用形+補助動詞」の場合、その複合動詞の連用形がさらに一つの名詞となることについては、あまり教えられていないようである。すると、

「主語が名詞を動詞連用形+すぎる」というセットになる。

文型のセットで学習者に覚えさせることはそれなりの効果があることが否定できない。しかし学習者が一つの型にしばられると、誤用も生じやすいのであろう。すると、

* 「胃が痛くなるのは冷たいものを飲みすぎだよ」

のような間違いを犯しそうである。

6.4.2 で述べたように、D グループの語は名詞の品詞しか持っていない。つまり、前の語と D グループの語の結合の場合、「の」でつなげる。しかし少ないが、以下のような例外も見られる。

(32) 老いというものが、全てを物分りよく、うなずかせているのかもしれないと思った。

(経)

(33) 主食，主菜，副菜をそろえて日常の生活活動に見合ったエネルギーを、食べすぎに気をつけて，… (シ)

(34) 英語は日本語よりも率直になる傾向があるから、結構、不快感を丸出しで、クレームを書いてもいいのだろうか。(E)

これらの複合名詞の動詞的な使い方をどのように、うまく日本語学習者に説明すればいいのかがまた問題になる。

また外国語の文法を習得するのに、決まった形の文型を覚えさせることは基本である。

例 (35) 友人を見送りに行く

のような動詞の連用形で目的を表すなどのような文型も少なくはない。

6.4.1～6.4.4 で述べたように、動詞連用形が名詞と結合し、新しい語を作る。そのできた新しい語について、名詞としてしか使えない場合と名詞としてもサ変動詞としても使える場合がある。日本語学習者は両者の使い分けができていないから、助詞を正しく入れられないのではないかと考えられる。

特に、日本語の助詞は難しく、日本語学習者がよく間違えるため、教えるほうはその助詞と動詞などをセットとして教えることが多い。このような助詞とセットで覚えさせることは、文型を習得しやすいだろうが、一方、学習者の中で固定化してしまい、誤用もおきやすくなるのではないだろうか。「動詞連用形」の名詞化やその複合語に関する説明や練習などを導入する必要もあると考える。

6.5 終わりに

本章は「の」とすべきところを「が」「を」とする誤用についての考察である。日本語の助詞は役割により分類され、その使い方が中国語母語日本語学習者にとって複雑で習得しにくいものの一つである。教科書の提示や教える側の説明だけで、十分にその言語のいろいろな現象をカバーできないのが現状である。助詞に関する誤用が中国語母語日本語学習者にとって、乗り越えられない難関の一つである。

また「動詞連体形＋名詞」と「動詞連用形＋名詞」について、教科書には主に一般的で規則である「動詞連体形＋名詞」を提示しているのに対し、「動詞連用形＋名詞」の形についての説明が足りず、名詞という形で提示されている。「動詞連用形＋名詞」という形は一つの名詞だと認識するだけではなく、その仕組みも修得させなければならないと考えられる。「サ変動詞」も前述のように、「日本語を勉強する」と「勉強をする」と「日本語の勉強をする」とはどのような関連またはどのように区別するのかを日本語教育の現場で教えなければならないと思われる。

第7章 「N1のN2の…のN」の形から見る「の」と「的」

これまで、連体助詞の「の」の誤用について、アンケート調査に基づき中国語母語日本語学習者の「の」の誤用率の高い部分を中心に分析してきたが、本章では文の中に複数の「の」が現れる場合にはどうなるかを検討する。一文の中に連続して「の」が現れる場合、中国語の「的」とどのような対応となるか、またどのように「的」が現れるのかを分析する。

7.1 はじめに

まず、日本語学習者が中国語から日本語に訳した文を見てみる。

例 (1) 「参考了研究室前辈的笔记。」⁸⁸

→ 「*研究室先輩のノートを参考にしました。」

例 (1) は日本語を専攻している学習者の翻訳したものである。下線の部分でわかるように、日本語学習者が「研究室前辈」をそのまま「研究室先輩」と、中国語の原文をそのまま訳し、中国語を日本語に置き換えたスタイルになっている。つまり、中国語の文の「的」と同じように、「研究室の先輩のノートを参考にしました」から、「先輩のノート」の「の」を残し、「研究室の先輩」の「の」を抜かした。なぜ中国語母語日本語学習者は「の」を抜かすのであろうか。これは、日本語の場合は「の」が二つ使用されているのに対し、中国語の場合は「的」が一つしか使用されないことから、母語である原文の影響を受けていると思われる。

先行研究で述べたように、これまで金 (1990)、刑 (1999)、方 (2004)、秦 (2006)、張 (2009)、于 (2010) 等によって、連体修飾における中国語の「的」と日本語の「の」を中心に、比較研究が行われてきた。しかしこれらの研究は「名詞+の/的+名詞」の形から、中国語の「的」と日本語の「の」の対応と非対応について論じられているものが多い。名詞と名詞との連結でその前後関係に注目するか、修飾部だけに注目するのがほとんどであり、修飾部の分類の仕方がそれぞれに異なっている。また中国語の「的」と日本語の「の」

⁸⁸ 後に日本語学習者のこの誤用を本アンケート調査の第三問に入れた。

との対応・非対応について、主に「的」が省略可能かどうかを論じている。しかし、名詞と名詞の前後の関係だけからでは省略可能かどうかいいきれないとする。

「名詞+の/的+名詞」に関する前後の意味関係は重要なことであるが、今回は「の」と「的」が一文の中に複数ある場合（「名詞1+の+名詞2+の…+名詞N」の形をとる「の」の連体修飾の場合、以下「N1のN2…のN」と表記）を分析するため、前後の意味関係は分析の対象としない。

これまでの研究論文を見ると、「N1のN2…のN」のような「の」の連続についての研究がまだ少ない。本研究は日本語教育の視点から「N1のN2…のN」を中心にし、「的」とどのように対応しているのか、また文の全体的な構成から、「の」と「的」がどのような関連を持っているのかを考えていきたい。

7.2 教科書における「の」が連続する場合の説明

先行研究には連続の「の」に関する研究は多くないが、中国の大学で主に使われている教科書『新編日語』、『総合日語』、『標準日本語』ではどういうふうに説明されているのかをしてみる。

▲『新編日語』（2009）

連続の「の」が最初に現れるのは第八課 P146 の読解文である。

…五月五日は男の子の祭りです。この日にこいのぼりを立てます。七月にはたなばたがあります。八月の中旬はお盆です。九月の満月の日にお月見をします。（以下略）

教科書の「の」に関する文法解説は、簡単に「の」は中国語の「的」に相当すると説明されている。名詞が連続する場合、「の」がどうなるかについての説明が見当たらない。

▲『総合日語』（2009）

連続の「の」が最初に現れるのは第五課 P45 の基礎練習である。

→私は学生です。

→私は京華大学の日本語学科の学生です。

(以下略)

教科書の文法解説は「の」に関して、名詞の後に接続するというふうに説明されている。しかし、名詞が連続すると、「の」がどうなるかについての説明は見当たらない。

▲『中日交流標準日本語』(2010)

連続の「の」が最初に現れるのは第四課 P57 の応用文練習である。

李：地下鉄の駅はここですね。

小野：ええ、そうです。JRの駅の隣に地下鉄の駅があります。

(以下略)

「の」に関する説明にも、名詞が連続する場合、名詞と名詞の間に「の」をつけるという説明が書かれていない。

以上の教科書の「の」に関する説明から、「の」が中国語の「的」に相当するか簡単な例文が出されるのがほとんどであることがわかった。名詞がいくつか連続して現れる場合、その名詞と名詞の間に「の」をつけなければならないという説明が提示されていない。このことから、「の」に関しては存在文などの定型文ほど重要ではないと思われるのか、説明が見当たらない。

日本語学習者に名詞が名詞を修飾するとき、「の」を入れるというふうに教えれば、実際に運用する場合、「の」を抜かしたりしないはずであるが、なぜ例文(1)のような「の」が抜ける誤用がでるのだろうか。

7.3 アンケート調査のデータに見る「の」と「的」

前述のように、日本語学習者が「の」をどの程度習得できているのかを把握するため、アンケート調査を実施した。その中の第三問と第四問は日本語の「の」が連続する場合、

③ ④

③の「の」の前後の名詞関係及び④の「の」の前後の名詞関係はそれぞれ前述（第2章）の2.5.1.1と2.5.2.4に当てはまる。

図12：「研究室の先輩のノートを参考にしました。」

N1 N2 N3

N1は場所で、N2は人で、N3は物である。つまり、

「組織集団+の+人+の+物」

⑤ ⑥

⑤の「の」の前後の名詞関係及び⑥の「の」の前後の名詞関係はそれぞれ前述（第2章）の2.5.2.3と2.5.1.1に当てはまる。

以上の三つの設問の「の」について、本章では日本語学習者において、日本語の「の」が連続するのに対し、中国語の「的」が用いられる数を考察するための分析であるので、毛莉（2014）で分類した12種類の「の」およびその前後の関係は考慮しない。

図10～図12の日本語の中国語訳について、後述のように、中国語の言語表現では、焦点におかれる語の前後に「的」がつくので、一般的に一つの「的」が用いられるほうが、より自然な中国語の表現形式とされる。但し、文の意味理解に妨げることがなければ、訳さないこともある。

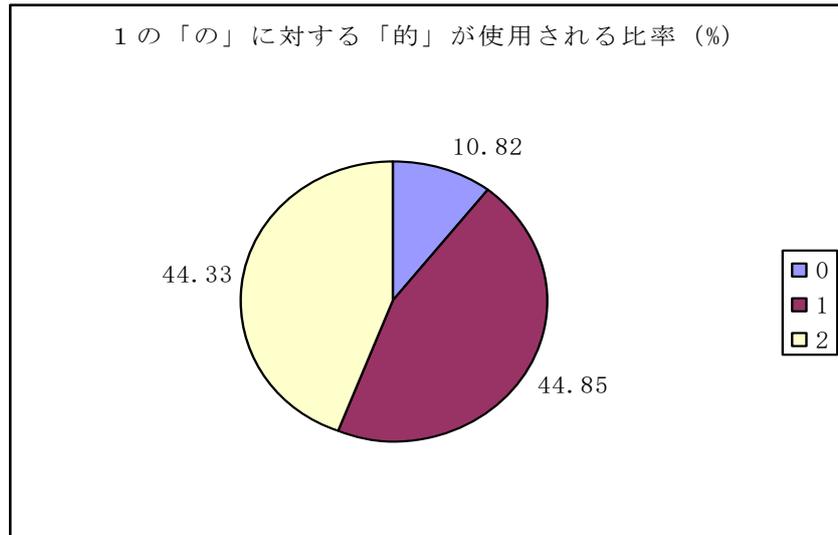


図 10

(2008年10月25日には麻生太郎内閣総理大臣の記者会見の中継を放送します。)

図 10 では、「の」を「的」に訳さなかったの (0) は 103 人で 10.82%、一つしか訳さなかった (1) ののは 435 人で 44.85%、二つに訳した (2) ののは 430 人で 44.33%である。

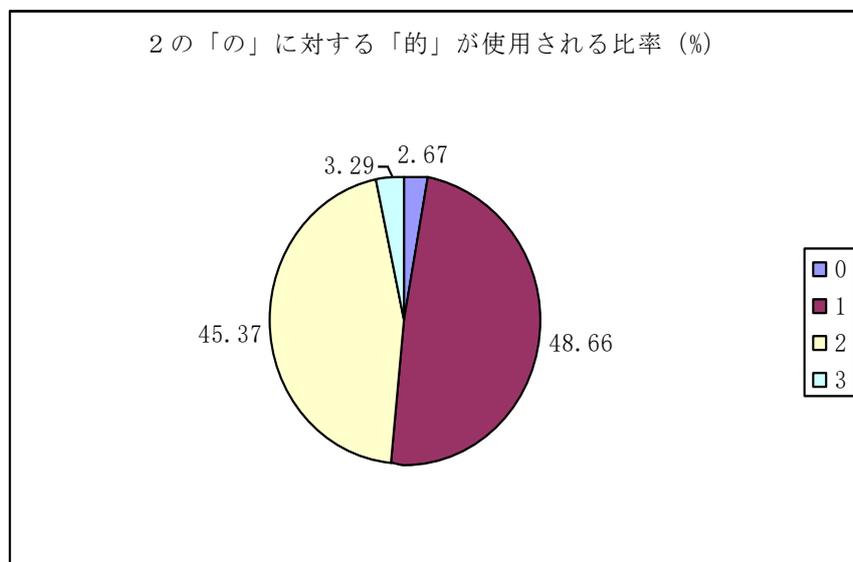


図 11⁹⁰

(田中さんは自分のシャツの白い袖口を見て驚きました。)

⁹⁰ 「的」が三つ訳される場合、中国語の形容詞が名詞を修飾するとき、「的」がつくからである。本調査では分析に入れない。

図 11 では、「の」を「的」に訳さなかったの (0) は 26 人で 2.67%、一つしか訳さなかった (1) のは 471 人で 48.66%、二つに訳した (2) のは 439 人で 45.37%で、三つに訳した (3) のは 32 人で 3.29%ある。

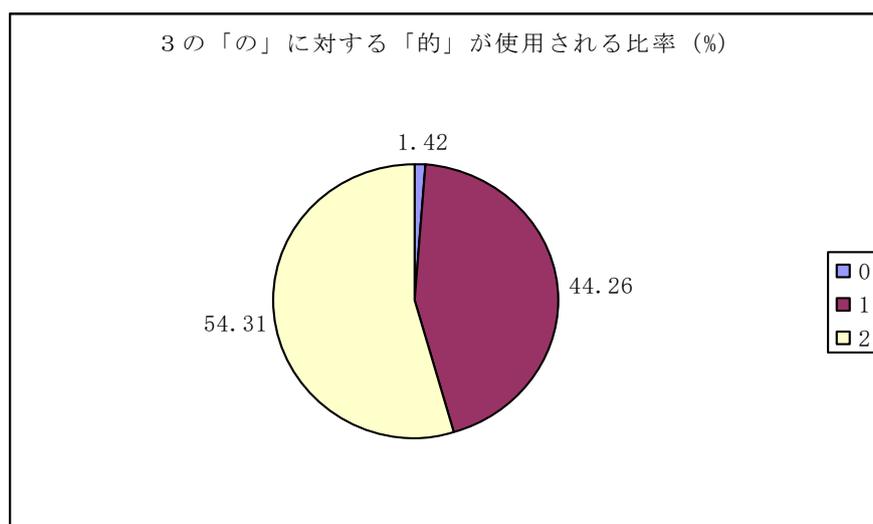


図 12

(研究室の先輩のノートを参考にしました。)

図 12 では、「の」を「的」に訳さなかったの (0) は 14 人で 1.42%、一つしか訳さなかった (1) のは 428 人で 44.26%、二つに訳した (2) のは 526 人で 54.31%である。

以上の図 10、図 11、図 12 から次のような傾向が見られる。但し、「の」が連続する場合、「的」が訳されなかったり、一つしか訳されなかったり、そのまま全部「の」を「的」に訳されたりしている結果が示されているが、本調査に挙げられた三つの例文について、「的」を訳さない部分は非文とはいえないが、答えた人数とその比率が少ないため、まれな例だと判断され、分析から外す。

- I. 日本語の文を中国語に訳すときに「の」をそのまま「的」に訳すか、また中国語の言語習慣の影響を受け、焦点におかれる語の前のみ「的」をつけるという二つのパターンに分かれる。つまり「の」をそのまますべてを「的」に訳すこともあれば、「の」

を訳す必要はないと判断され、訳さないこともある。例えば、図 12 の「研究室の先輩のノートを参考にしました。」の下線の部分は「研究室前赴的笔记…」、「研究室的赴前的笔记…」のように訳されている。図 10、図 11 も同様である。

Ⅱ. 「の」を無視し、全然訳されない部分もあるが、中国語の「的」は日本語の「の」と異なり、日本語は名詞がいくつ続いて現れても、その名詞の間に「の」を入れなければならないのに対し、中国語では「的」を入れなくても、意味の理解に支障が出ない。例えば、図 10 の「2008 年 10 月 25 日には麻生太郎内閣総理大臣の記者会見の中継を放送します。」の下線の部分を「…麻生太郎内閣総理大臣记者招待会直播…」というふうに訳した学習者の比率は 10.82%である。図 10 と同じく「的」の用いられない使用率について、図 11 は 2.67%、図 12 は 1.42%であり、比率が低いいため本研究では扱わない。

Ⅲ. 教科書に提示されている「の」が「的」に相当するという解説について、学習者により理解がそれぞれである。簡単に「の」が「的」に等しいと考え、そのまま「的」にする傾向がある。また日本語では「の」をつけなければならないが、中国語では文脈によって省略されることが多いため、「の」を避ける傾向がある。例えば、図 10「2008 年 10 月 25 日には麻生太郎内閣総理大臣の記者会見の中継を放送します。」の下線の部分を「…麻生太郎内閣総理大臣的记者招待会的直播…」のように「の」をそのまま「的」に訳すか、またⅡで述べたように、「的」を全く訳さない学習者もいれば、次のように、「…麻生太郎内閣総理大臣记者招待会的直播…」一つしか訳さない学習者も多い。

Ⅳ. 図 10～図 12 の連続の「の」に対し、「的」が一つに訳される比率はそれぞれ図 10 は 44.85%、図 11 は 48.66%、図 12 は 44.26%であり、二つに訳される比率はそれぞれ図 10 は 44.33%、図 11 は 45.37%、図 12 は 54.31%である。ほとんど二つのパターンが五割近くを占めていることがわかった。アンケート調査のデータから、名詞が名詞を修飾するとき「の」が必須であるのに対し、「的」はそうでないことがわかった。

7.4 日中相互翻訳から見る「の」と「的」の違い

アンケート調査により、「の」の運用について、四つの傾向が見られるが、実際に「の」が連続する場合「的」がどのように対応するのかをしてみる。

第2章では「名詞+の/的+名詞」の形の「の」と「的」の対応・不对応について分類したが、「N1のN2…のN」のように二つ以上の「の」が連続する場合においても、日本語の「の」と中国語の「的」が対応するかしないかを分析する。本章では実際の日中相互翻訳版の小説からいくつか例文を取り上げて、主に7.4.1～7.4.3を通して考察する。

まず、以下の連続の「の」が出る場合の二例をしてみる。

中→日

例(2) “没，没有写什么。”妈妈脸上忽然一阵惊慌，忙去掩桌上的纸头。(傷)

→「あ、何でもないのよ」母はあわてて机の上の書きかけの紙をかくす。

日→中

例(3) 先日の実験において、パナソニック社の携帯電話の性能の12.5%の向上を確認した。(実)

→经日前的实验，证实了索尼公司的手机性能提高了12.5%。

以上の例文のように、日本語の「の」が三つ乃至四つについているのに対して、その中国語訳には「的」がいずれも一つしかついていない。つまり「の」の必須に対して、「的」は省略される傾向が強い。しかし、連続の「の」がある場合、「的」がどう対応するか、またどのように省略されるか。以下のパターンに分かれる。

7.4.1 日本語の「の」が複数出る場合に、中国語の「的」が中心語の前につく

以下の例(4)～(9)をしてみる。

例(4) 印家厚瞅着自己白衬衣的袖口，暗暗摆着自己工作的优越性，尽量对大家的发言充耳不闻。(生)

→印家厚は自分のシャツの白い袖口を見て、ひそかに自分の仕事の優越性を数え

立て、なんとか皆の発言から耳をふさごうとしていた。

例 (5) 厂领导认为严重影响了全厂职工的生产积极性。(生)

→そのことが全工場の職員工員の生産積極性に、深刻な影響を及ぼしていると、
工場の指導部は考えた。

例 (6) 她伸手掸掉了他背上的脏东西。(生)

→雅麗が手を伸ばして、印家厚の肩の汚れをはたいて落とした。

例 (7) 我们学校的宣传橱窗里挂着她的照片。(ク)

→僕たちの学校の広報掲示板に彼女の写真が掛かっていた。

例 (8) “你听见了吧？”又给她讲了一会婚姻自由的法令，说小芹跟小二黑订婚完全合法，…

(小)

→「聞いただけろう」といって、結婚の自由の法律についてしばらく説明し、小芹と
小二黒の婚約は完全に法律に合っているといい、…

例 (9) …她见里头有外国男女讲恋爱的插图，… (ク)

→なかに、外国人のラブシーンの場面のさし絵があった。

例 (4) を中心に分析してみる。中国語文では、「的」が一つしか使用されていないのに、日本語文は二つの「の」に訳されている。前述のように、語レベルで「名詞+の/的+名詞」の組み合わせで分析してきたが、「自己的衬衣（自分のシャツ）」、「自己的工作（自分の仕事）」は所有の範囲に入るので、「的」が必要とされ、「自己的衬衣」、「自己的工作」となる。また「自己的衬衣（自分のシャツ）」、「自己的工作（自分の仕事）」はそれぞれ「白袖口（白い袖口）」、「优越性（優越性）」を修飾するので、中国語では「自己的衬衣的白袖口」、「自己的工作的白袖口」になるはずである。しかし、実際には違い、例文にあるように、「自己衬衣的白袖口」、「自己工作的优越性」両方とも一つ目の「的」がついていない。

「自己白衬衣的袖口」と「自己工作的优越性」には以下のような形成過程があると考え

られる。

「自己的袖口」 + 「白衬衣的袖口」 → 自己 ∅ 白衬衣的袖口

「自己的优越性」 + 「工作的优越性」 → 自己 ∅ 工作的优越性

日本語は「名詞+の+名詞+の+名詞」の形で、「の」を省いてはいけない。しかし中国語の場合は語と語の結合するルールがここで働かなくなっている。

以上の分析によると、「自己的袖口」+「白衬衣的袖口」には「自己」と「白衬衣」が「袖口」を修飾している。同じく「自己的优越性」+「工作的优越性」には「自己」と「工作」が「优越性」を修飾している。「袖口」、「优越性」はフレーズの中心となっていることが考えられる。つまり、文の焦点が最後の名詞に置かれていることである。いいかえれば、焦点は「袖口/白い袖口」、「优越性/優越性」にある。

本論文ではこれらの焦点に置かれる名詞を「中心語」と呼ぶ。中国語の場合は、中心語を目立たせるため、その修飾語部と中心語の間に「的」がつくが、修飾部の名詞と名詞の間に「的」が省略される傾向がある。

もし全部の名詞の間に「的」をつけると、以下のようになる。

「自己的白衬衣」 + 「白衬衣的袖口」 → ? 自己的白衬衣的袖口

「自己的工作」 + 「工作的优越性」 → ? 自己的工作的优越性

中国語の場合、全ての名詞の間に「的」がつくと、中国語の文として不自然で、焦点がわかりづらくなり、文の定まりがわるく、長々と続き、不安定な印象を与えてしまうのである。

日本語の場合は「自分のシャツの白い袖口」、「自分の仕事の優越性」のように、全てに「の」がつかないと非文になる。膠着語の日本語には助詞の助けがないと、文として成立しないが、孤立語の中国語は異なり、日本語ほど助詞の「的」に依存していないのであろう。それゆえ、中国語母語日本語学習者が文章を書いたり訳したりするとき、「の」を連続で入れなければならないところで、抜かしてしまうケースがしばしばある。「自分シャツの白い袖口」、「自分仕事の優越性」のように「の」を省いてはいけないところを省いて

しまう傾向がある。

以上のように、日本語の「の」の用法と異なり、中国語は、「的」の使用を最小限にしようとする傾向がある。そして「的」の使用は、ある程度任意なのである。

7.4.2 日本語の「の」が複数出る場合に、中国語の「的」が限定語の後にくる

例 (10) ～ (12) を見てみる。

例 (10) …她要亲自把彩袖驮到小柳巷的巩爱华家，… (ク)

→自分で、彩袖を小柳巷の鞏愛華の家まで乗せて行くつもりだった。

例 (11) 休养所的汽车驾驶员完全了解每一个初到这里的客人的心理，他介绍说。(海)

→ 保養所の車の運転手は初めてここへ来る客だれしもの心理を読み切っていて、そう教えた。

例(12) 接待处的一个女干部路过铁狮子桥，看见那个顾庄来的姑娘坐在铁狮子桥的桥堍下，

… (ク)

→ 受付所の一人の女性幹部が、鉄獅子橋を通りかかった時、あの顧村から来た娘が、橋のたもとにいるのを見かけた。

例文 (10) を中心に見てみる。例 (10) は、7.4.1 で述べた「中心語」の場合と状況が違う。では、なぜ例 (4) は

「自己的袖口」 + 「白衬衣的袖口」 → 自己 ∅ 白衬衣的袖口

のような分析方法で問題ないのに、例 (10) は異なるのであろうか。例 (4) と同様に分析すると以下ようになる。

「小柳巷的家」 + 「巩爱华的家」 → ? 小柳巷 ∅ 巩爱华的家

しかし、例文を見ると、一つ目の「的」ではなく、二つ目の「的」を落とせる⁹¹。なぜならば、張麟声（2008）にあるように、日常生活との関連が緊密な場合、「的」がいらぬのに対し、人の認知領域で緊密ではない場合、「的」が省けない⁹²。つまり例（10）には「小柳巷」、「巩爱华」、「家」の三つの語の間、「巩爱华」と「家」の関連が「小柳巷」より緊密である。また「小柳巷」が場所を示す名詞として、「巩爱华」と「家」を限定修飾している。毛莉（2014）で分析したように、場所を限定して後の名詞を修飾する場合、（一語あるいは決まっていたいいかたを除き、）その後の「的」は普通省略されない。だから例（10）の形成過程が、例（4）と異なり、以下のようになるのではないだろうか。

（巩爱华的家） → （小柳巷的（巩爱华的家）） → 小柳巷的巩爱华の家

以上で表されるように、日本語の「の」と異なり、中国語の「的」は連続を避けようとする傾向が強い。「的」が中心語の前であっても、限定語の後であっても、構文上では、「的」の連続使用を好まないということであろう。

同一文の中に「的」がいくつか連続で用いられると、文の焦点が分散させられてしまい、文の意味の理解を妨げると考えられる。「的」を多く使用することによって、緊密の度合いにより結合された名詞等が逆に構造上の緊密関係を壊してしまい、文の意味を正確に理解するのが難しくなり、かえって混乱させ、意味が読み取れなくなる可能性もある。

しかし、日本語の場合、どうなるか、以下の例（13）と（14）を見てみよう。

例（13）その時裏の崖の上の家主の家の御嬢さんがピアノ（ヤ：ママ）を鳴らし出した。

『門』

→这时，他听到崖上房东家的小姐在弹钢琴⁹³。

例（13）にあるように、日本語の場合、「の」の連続使用によって、文が短くなり、簡潔に表現ができる。

⁹¹ 「落とせる」（杉村・1997）という使い方はすでに使われているので、本論文ではそのまま使う。

⁹² 張敏(2008)「自然句法理論与漢語語法象似性研究」。

⁹³ 陳徳文訳（1979）。

もし例文 (13) を「の」ではなく、動詞でつなげると、以下のような文になるだろう：

例 (13) a その時、裏にある崖の上に建っている家の家主の御嬢さんがピアノを鳴らし出した。

以上の例 (13) は明らかに例 (13) a より、簡潔で意味が理解しやすいのではないだろうか。

また、もう一組の例 (14) a、(14) b、(14) c を比べてみよう：

(14) a. 田中の牛革のルイヴィトンの花模様の鞆…

(14) b. 田中が持っている牛革でできたルイヴィトンの花模様がある鞆…

(14) c. *田中牛革ルイヴィトン花模様の鞆…

例 (14) c は「の」の脱落で、非文になる。例 (14) a と (14) b では、「の」でつないだ前者のほうが、簡単で深く考えずに意味がわかるだろう。逆に後者は冗長ですわりが悪いのではないだろうか。

前述のように、「の」の使用・不使用は文法上の決まりに従うことになるが、。中国語の場合、「ピアノを鳴らし出した」の主語「御嬢さん」、つまり焦点となる語の前にのみ「的」をつければよいことになる。

このように、日本語の「の」は連続して出るのに対し、中国語の「的」は文の構造や使用する側の判断に任され、任意的といえる。文の意味の理解を妨げない限り、使用されない傾向も 7.4.3 に見られる。

7.4.3 日本語の「の」が複数出る場合に、中国語の「的」が使用されない

例 (15) 又说，巩爱华家旁边就是派出所，她又是先进人物，你哥哥敢到她家去闹，派出所就把他绑起来！（ク）

→鞏愛華の家の傍には派出所があつて、あの子は先進的人物だから、兄さんが押

しかけたら、兄さんの方が縛られちゃうよ！

例（16）送给区武委会主任按军法处理！（小）

→区の武装委員会の主任に引き渡して、軍法会議にかけて処分してもらうんだ！

例（17）班里评三好生，我几乎是全票通过，可班委会研究时刷下了我。（生）

→模範生を選出することになって、私がほとんど満票で通ったのだけれど、班の委員会の審査で削られてしまいました。

例（18）照出了四人帮糟害我们下一代的罪恶…（ク）

→われわれの次の世代を傷つけた「四人組」の悪事を映し出した。

例（19）次の日の朝、ランドセルをしょって家を出た僕の前に、彼女が現れた。（新）

→第二天一早，我背着书包走出家门时，她出现在我的面前。

以上の例文を見てみると、日本語の「の」は二つ使われているのに対し、中国語の「的」は一つも使われていない。ここでもやはり、日本語の「の」と異なり、中国語の場合、「的」の連続を避けようとする傾向があることが分かる。

朱徳熙（1981）は、名詞が名詞を修飾する修飾構造において、単独に取り出された場合には必須である“的”の使用が、より大きな構造に包含されると任意的になる現象を指摘した⁹⁴。「的」の使用・不使用については、任意的であることが、研究者をいかに悩ませるかがわかる。つまり、日本語の「の」が連続して出る場合、「の」は欠かすことができないが、中国語の場合、「的」の使用・不使用は任意となるのである。

しかし、以下のような特例もある。

例（20）（中）父亲的父亲的父亲⇒父亲的父亲/的父亲；父亲的/父亲的父亲

（日）父の父の父⇒父の父/の父；父の/父の父

⁹⁴ 日本語は杉村博文（1997）「名詞性連体修飾語と構造助詞“的”」を参照。

例(20)のような特別な場合もある。連続の「の」と同じように「的」が漏れなくつくことがあり、意味も全く同じである。一つ目の「の」で区切っても、二つ目の「の」で区切っても意味が変わらない。つまり同じ文中で同じ名詞の場合では、中国語の「的」構造の文が無限拡大ができる⁹⁵という説もある。しかし、「的」の連続の文には適用されていないようである。

ここまで見てきたように、連続の「の」と「的」については、大きな違いがあることがわかった。日本語学習者にとって、「的」の任意的な使い方が日本語の学習にも持ち込まれたことに

繋がっているのではないかと考えられる。「名詞+的+名詞」の語レベルではある程度ルールがあり、中国語の「的」と対照して勉強してきた日本語学習者であるが、連続の場合、混乱してしまう傾向が見られる。それは、中国人は「的」が連続する場合、その使用を避けようとするからである。教科書に提示されている日本語の「の」が中国語の「的」に相当するという説明については、日本語学習者がそれに頼りすぎると、「の」の習得に支障がでてしまうのではないだろうか。それ故、名詞が名詞を修飾するとき、「の」をつけることが普通であるのに、連続で二つ以上の「の」を使うと、中国語母語日本語学習者には不自然に見えるのであろう。

7.5 中国語母語日本語学習者が「の」の連続使用を避ける傾向

7.4.1~7.4.3 で見てきたように、日本語では、連体助詞の「の」で、名詞と名詞をつなげ、「の」が連続する場合、それが省略できない。しかし、中国語では構造助詞「的」で、名詞と名詞をつなぐが、「的」が連続する場合、意味の理解を妨げない限り、中国語母語日本語学習者が「的」の連続使用を避けようとするのである。

では、この「的」を避ける現象が日本語学習者にどのような影響を与えているのかをしてみる。

中国語の文の日本語訳に対し、それぞれ同じ文において、違う表現の答えが三つ出されている。日本語学習者が「の」の連続する訳を選ぶか、他の訳を選ぶかについて、アンケート調査を行った。その結果は以下の通りである。

⁹⁵ 陆剑明(2013)『现代汉语语法研究教程』北京大学出版社。

問題：下線の部分の日本語訳について適切だと思う選択を一つ選んでください。

★ 经日前的实验，证实了松下公司的手机性能提高了 12.5%。

- A. …、パナソニック社の携帯電話の性能の 12.5%の向上を確認した。
- B. …、パナソニック社が携帯電話の性能を 12.5%向上させたことを確認した。
- C. …、パナソニック社の携帯電話の性能が 12.5%向上したことを確認した。

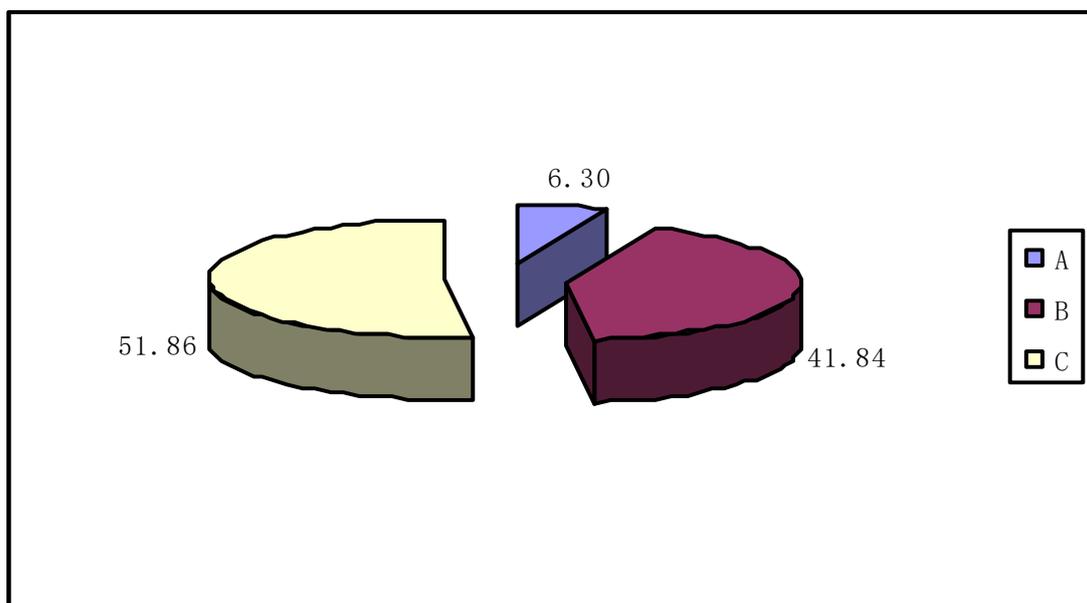


図 13

以上の図 13 で示しているように、A を選んだ日本語学習者はわずか 61 人で 6.30%であった。それに対し、B を選んだのは 405 人で 41.84%であり、C を選んだのは 502 人で 51.86%である。つまり中国語母語日本語学習者が「の」の連続使用を避けている傾向がある。これは、中国語の「的」と関連させて、「的」の性格をそのまま、「の」の学習に持ち込んでいるのではないかと考えられる。

7.6 終わりに

アンケート調査の結果から、中国語母語日本語学習者は複数の「の」を使うことに抵抗感を持つことがわかった。日本語の「の」と違って、中国語の「的」は連続で使われるこ

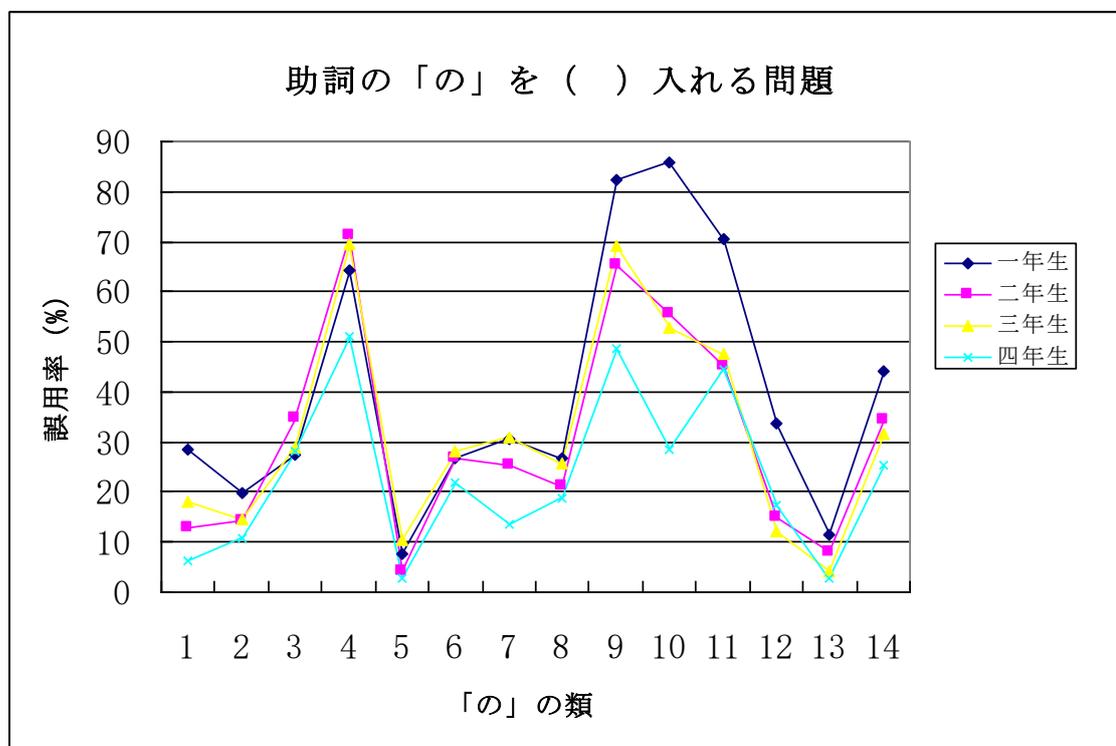
とはあまり認められていない。前述のように、日本語の「の」が連続する場合、「の」は必須であるが、中国語の場合、「的」の使用・不使用は任意である。特に、初級の学習者にとって、日本と中国は同じ漢字圏の国だという認識が強いから、どうしても母語干渉を避けられない彼らには「の」と「的」を混乱してしまうのであろう

そのため教育現場でどのように教えれば、「の」をよりよく習得させることができるかが重要な課題であるといえる。教科書には「の」に関する説明も少なく、詳しいとはいえない。特に、「の」が連続して現れる場合についての説明や例文がほとんど見つからない。このような容易に習得できると思われている「の」の分析をもとに、より実践的な教授法を探ることが今後の課題である。

第8章 終章

今まで、助詞の「の」の連体修飾について、その誤用率の高い部分を中国語の「的」と関連させながら、中国の大学で主に使用されている日本語の教科書を参考にし、「の」の誤用の要素を分析してきた。しかし、アンケート調査の結果には「の」の誤用率が高い部分もあれば、低い部分もある。本章では誤用率の低い部分及びこれまで取り上げなかった他の誤用の部分についてグラフ14とグラフ15を参考にしながら、説明を加える。

8.1 誤用の少ない部分について



グラフ14⁹⁶ (学年別における第一問の14項目の「の」の誤用率)

グラフ14を見てみると、学年別の誤用率は、一年生、二年生、三年生、四年生と学習時間が長くなるにつれて、誤用率が減少していることがわかった。

⁹⁶ 本調査の項目が14項目ある。学年別において14項目「の」の誤用率を比較するための棒グラフを作成するのに幅が狭くなるため、折れ線グラフにした。グラフ15も同様である。

しかし、グラフで示しているように、この中の4番目の「腕の中の赤ちゃん」、9番目の「人生の悲劇」、10番目の「一本の木」、11番目の「同僚の鈴木さん」、14番目の「赤ちゃんが泣く声→赤ちゃんの泣き声」などが「の」の誤用率が高いのに対し、1番目の「妹の鞆」、2番目の「私の人生」、3番目の「田中さんの腕」、5番目の「田中さんの妹」、6番目の「田中さんの会社」、7番目の「会社の同僚」、8番目の「村の入口」、13番目の「赤い鞆」などは「の」の誤用率が比較的低い。

「イ形容詞」(13番目の「赤い鞆」)の誤用率が低いのは、前述⁹⁷のように中国語母語日本語学習者に見られる典型的な誤用例なので、教育現場で重視され、繰り返し教えるからだと考えられる。

しかし、なぜ全体的に学年が上がるに従い誤用率が減少する中、「の」の種類により、その誤用率が高かったり、低かったりするのだろうか。毛莉(2014)で述べたように、日本語の「の」の必須に対し、中国語の「的」は準必須、省略、不使用、使用回避に分かれるが、グラフ14を見ると、誤用が少ないのは、中国語の「的」が準必須、省略の場合である。一般的に中国語を母語とする日本語学習者にとっては、構造助詞の「的」が日本語の「の」の習得にマイナスの影響に注目することが多いが、プラスの影響もあるのではないかと考えられる。

これは決して教科書における助詞の「の」が中国語の「的」に相当するという説明が適切であるということではない。

1番目から3番目を見てみたい。「妹の鞆」、「私の人生」、「田中さんの腕」はそれぞれ2.5.1.1の「N1(人)+N2(物)」、2.5.1.2の「N1(人)+N2(抽象名詞)」、2.5.1.3の「N1(人の体)+N2(N1の部分)」にあたる。日本語の「の」が必須であるのに対し、中国語の「的」が準必須である。中国語の「的」が文レベルになると、省略されるケースも見られるが、基本的に、語レベルでは、「的」がつくのは普通である。つまり、このような場合、日本語の「の」と中国語の「的」は対応するといえる。これは、日本語学習者によるアンケートにおいて、「の」を抜かすことがほとんどない原因でもあろう。

4番目の「腕の中の赤ちゃん」について、2.5.1.4で述べたように、N1(時・場所)がN2(人・物・組織集団・場所・抽象名詞)を修飾するとき、つまり修飾語が時間と場所の

⁹⁷ 第5章を参照。

場合、その後に現れる名詞との間には「的」を入れるのが普通である。しかし、アンケート調査の結果を見ると、日本語学習者の誤用率はそれぞれ一年生 64.33%、二年生 71.37%、三年生 69.50%、四年生 50.91%である。予想と逆に、誤用率が高いのである。多くの学習者が「の」を入れるべきところに、「に」を入れてしまった。問題設定は場所を表わす名詞だから、「机の上に本がある」、「箱の中に猫がいる」、「お弁当は冷蔵庫の中にある」のような存在文と間違え、「に」を入れたのではないかと考えられる。

「N1 (時・場所) + N2 (人・物・組織集団・場所・抽象名詞)」の場合、日本語の「の」も中国語の「的」もつくので、正の転移が見られるのではないかと予想し、問題設定したが、今度のアンケート調査のデータから見ると、調査の主旨がうまく反映されていないと考え扱わないことにする。今後さらに調査することが必要だと考える。

5 番目から 9 番目では、「田中さんの妹」、「田中さんの会社」、「会社の同僚」、「村の入口」、「人生の悲劇」はそれぞれ 2.5.2.1 の「N1 (人) + N2 (人: 人間関係を表す)」、2.5.2.2 の「N1 (人) + N2 (組織集団)」、2.5.2.3 の「N1 (組織集団) + N2 (人: 職業も含む・物)」、2.5.2.4 の「N1 (動物・物・場所) + N2 (N1 の部分)」、2.5.2.5 の「N1 (内容・固有名・材料・抽象名詞など) + N2 (物・抽象名詞など)」を表す。日本語の「の」が必須であるのに対し、中国語の「的」はあったり、なかったりしている。「的」の任意なところも「の」の習得に影響があるようであるが、日本語の学習時間の長さにつれて、正確に使えるようになってきているといえる。

しかし、この中の 9 番目に注目すると、他の類と異なり誤用率が高く、四年生になっても減らない。この部分については、中国語の「的」の場合は前後の名詞の関係が複雑でルールがないからである。

例えば、中国語では「泥土味、枯草味、水気味」といえば、「泥土的味道、枯草的味道、水气的味道」ともいえる。

しかし、「的」がつくつかつかないかでは意味が変わるわけではなく、文脈により「的」を使うか使わないかが決まることになり、どちらも正しいのである。また「婚姻自由/婚姻の自由」のような一語の場合もあれば、「世界观(的) 问题/世界観の問題」のような「的」があっても、なくてもいい場合もある。5 番目～8 番目は前後の名詞と名詞の関係ははっきりしているのに対し、9 番目は前後の関係が複雑でルールがつかめにくいことがわかった。「人生の悲劇」のような文は中国語になると「人生悲剧」も「人生的悲剧」もいえる。

それにいつ「的」が省略できるのかもまだ明確にされていないのが現状である。

また、日本語では、二つか二つ以上の名詞が「の」を用いず、結合する場合もある。

例えば：

「生存」と「競争」を合わせて「生存競争」といえる。

同じようなのもいくつか挙げられる。

「泥棒」 + 「商売」 → 「泥棒商売」
「電気」 + 「製品」 → 「電気製品」
「重症」 + 「患者」 → 「重症患者」
「大本営」 + 「発表」 → 「大本営発表」
「犯罪」 + 「優遇国」 → 「犯罪優遇国」

以上のような「の」を挿入せずに、二つの名詞からなっている組み合わせも日本語にたくさんある。しかし、「重症患者」のような慣用語的な場合に使われることがあるが、「重症の患者」のような「の」を挿入する場合、文体も関係すると考えられる。また例えば「総理の談話」と「総理談話」⁹⁸のような「の」があるかないか意味が異なることもある。「総理談話」は総理の見解・考え方に大臣らがOKしたもので内閣全体で認める閣議決定であり、政府としてきちんとしたものを出す。それに対し、「総理の談話」は閣議決定だと議論を呼ぶのではないかと判断される場合、総理個人の談話にしようと「総理の談話」になる。日本語は、このように「の」一つで意味合いが変わることから、日本語学習者を混乱させやすいのではないだろうか。日本語学習者にとって、「人生悲劇」であるか「人生の悲劇」であるか中国語母語日本語学習者にとって判断しにくくなるだろう。中国語ではよくある「的」の省略が、「の」を抜かず誤用を生じさせてしまう。慣用的な語を覚える必要もあれば、文体や意味合いにより、判断する力をつける必要もあると思われる。9番目について、さらに詳しく分析する必要があると考え、今後の課題とする。

⁹⁸ 「総理の談話」と「総理談話」は池上彰の「ニュース解説」によるものである。

12 番目については、張麟声 (2011)⁹⁹は中国語を母語とする学習者は「…の上」、「…の中」のような方角や位置を表す言葉を必要以上に使ってしまふ傾向があると指摘している。中国語の「上」と同様に日本語の「人の体が存在する平面が起点の役割を務めるときに「の上」を使ってはいけない」という禁則がないことや中国語の「キッチン」類名詞、「ラジオ」類名詞、「県」のような組織類名詞、時間名詞、「お皿」類名詞に方角・位置の名詞がつくことから、中国語母語の日本語学習者が方角や位置を表す語「の上」、「の中」などの過剰使用の傾向があることを述べている。

例文を通して、見てみる：

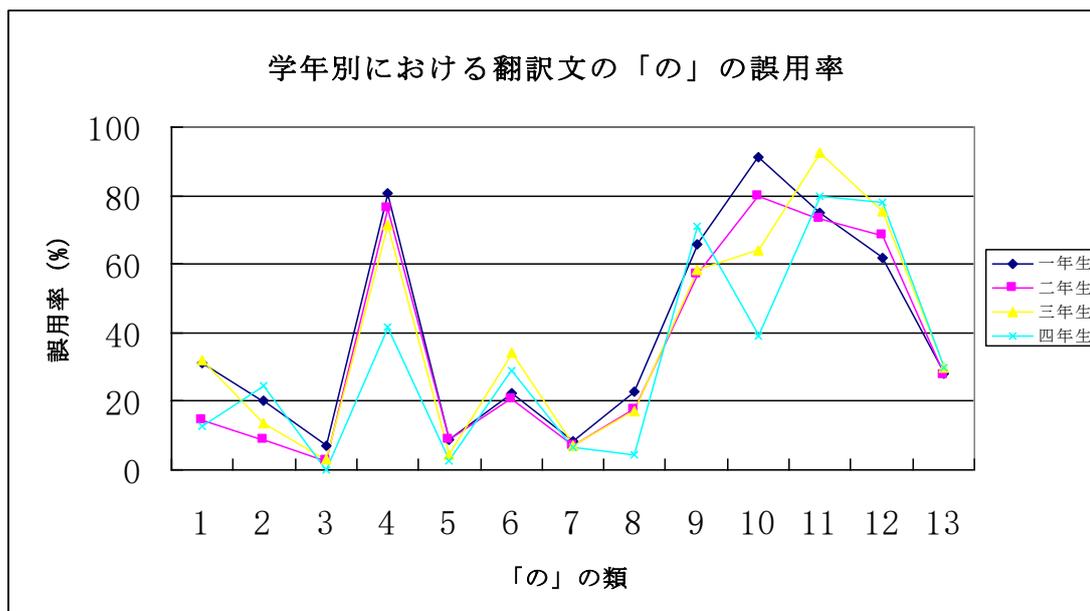
- ?母はキッチンの中にいるよ。
- *彼は電話の中でガンガン私を叱った。
- *壁の上には絵が一枚掛けてある。
- *ほら、あの蚊、天井の上に留まった。

以上の例文のように、確かに学習者が方角や位置などの語を過剰に使用する傾向が見られる。これらの誤用から、「中」、「上」、「前」、「後ろ」、「左」、「右」、「隣」などの名詞が用いられると、「の」を入れてしまうことが多い。初級で教える「存在文」には「机の上に本があります」、「箱の中に猫がいます」などのセットで覚えさせる例文も効果的ではないかと考えられる。

しかし、一方、中国語の文を日本語に訳す問題では、この部分で誤用の高さが見られる。

グラフ 15 の 12 番目を見てみる：

⁹⁹ 張麟声(2011)『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク。



グラフ 15 (学年別における第二問の翻訳問題)

グラフ 15 で示しているように、12 番目のところはグラフ 14 の 12 番目とかなり差がある。つまり、中国語から日本語に訳すのではなく、直接日本語の文に助詞を入れる問題の場合、大体学習者は正確に「の」を入れられる。しかし、なぜ日本語に訳す問題になると、誤用率が高くなるだろうか。

1 番目から 12 番目までグラフ 14 とグラフ 15 を見てみると、12 番目以外では誤用率にあまり違いが見られない。12 番目について、毛莉 (2014) では「N1 (場所・物) + N2 (N1 との位置関係)」のような組み合わせの場合、日本語では「上」は他の名詞に依存しなくても成立するが、ここの「石段の上」の「上」、「バッグの中」の「中」は中国語では方位詞といい、独立して使われない。これらは基準となる名詞と結合し、補助の機能のみで、N1 の位置や方角を表し、中国語の場合は「的」がつかない。中国語の文を日本語に訳すとき、直接日本語で作文するより、母語の影響を受けやすいことが考えられる。

以上で述べてきたように、中国語母語日本語学習者が中国語で「的」が用いられない部分において、最も日本語の習得に誤用が生じやすいことが分かった。教科書に提示されている「の」の説明に関する部分が少なく、簡単な説明しかされていない。練習や例文も少なく、他の文型に付随して現れることが多い。日本語学習者を混乱させる説明の内容も少

なくない。日本語教育で「の」をどのように教えればいいのか、今まで以上に工夫する必要があると思う。

8.2 本論文のまとめ

本論文は、中国語母語日本語学習者における連体助詞の「の」の誤用に関する研究である。学習者にとって「の」の習得が困難となっている原因の一つは、教科書の提示に問題があることを予想し、中国と日本で作成された教科書を比較しつつ、分析した。また中国の大学で日本語を専攻する学習者を対象に、「の」をどの程度習得しているのかについて、アンケート調査を実施した。その調査のデータを収集し、現状の把握と課題の抽出を行い、日本語の「の」と中国語の「的」と関連させながら、日本語教育の視点から「の」の誤用とその要因を考察した。

第1章では、研究の目的と研究の方法を提示した。また日本語の「の」と中国語の「的」に関する先行研究を整理したうえで、先行研究の触れられていない点に注目する。

日本語の「の」と中国語の「的」が類似しているといわれ、これに関する対照研究も数多くされてきた。特に、名詞が名詞を修飾する時、日本語の場合「の」がつくのに対し、中国語の「的」がつくのとつかないのがある。中国語の影響を受け、日本語の「の」を運用する時、「*歴史本」「*日本語先生」のような誤用がしばしば見られる。中国語母語日本語学習者の「の」の習得に「的」の影響を受けていることは否定できない。しかし、アンケート調査によるとすべての誤用が母語の影響だといいきれず、大学で使用されている教科書を調べる必要があると考え、日本語教育の立場から「の」の誤用について、先行研究を踏まえ、中国語の「的」と関連させながら考察した。

第2章では、中日の辞書を参考にし、教科書における「の」の提示につき、中日両国で作成された教科書をそれぞれまとめ、「の」の提出順（あるいは提出課）と各教科書の「の」に関する説明を調べた。

また、中国語と日本語の対訳における「の」と「的」の現れ方から、例文を取り上げ、「名詞+（の/的）+名詞」の形を中心に、「の」と「的」の対応・不対応を分析した。

本章は今まで研究されてきた語レベルだけではなく、文レベルも考慮し、「の」と「的」

の関連を考察し、以下の4点に分類した。(第2章のP52-66を参照)

- ①「の」の必須に対し、「的」の準必須
- ②「の」の必須に対し、「的」の省略
- ③「の」の必須に対し、「的」の不要
- ④「の」の連続に対し、「的」の連続回避

以上①～③について、さらに詳しく12種類に分けた。以上の4点から、中国語母語日本語学習者における「の」の誤用の傾向は四つに分類できる。

- ①「の」の過使用
- ②「の」の任意使用
- ③「の」の不使用
- ④「の」の使用回避

以上で分類したように、日本語の「の」と中国語の「的」は対応するものと対応しないものがあることが分かった。名詞が名詞を修飾する場合、中国語の「的」が意味の理解に支障が出ない限り省略できるが、日本語は違う。また用言(形容詞・動詞)と他の語との組合せでは、中国語は「的」がつくのに対して、日本語は連体形を持つ。中国語の「的」は日本語の「の」に相当すると教科書によく書かれているが、これまで述べてきたように相当しない場合もあり、たとえば「弟の太郎」のような同格の場合は「の」に相当する「的」が見つからない。更に小説や「の」が複数ある複雑な文になると、日本語の「の」と中国語の「的」は対応しなくなり、異なってくる。これらの点で中国語母語日本語学習者にとって、「の」の習得は非常に難しいところである。

第3章では、中国語母語日本語学習者へのアンケート調査に基づき、「数量詞+の+名詞」と「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」を中心に分析した。中日で使用されている日本語の教科書を見ると、「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」が中心で、「数量詞+の+名詞」についての例文や説明がほとんど提示されていないことが分かった。「机の上に本が三冊ある」、「箱の中に猫が一匹いる」、「リンゴを四つください」のような例文が中心である。

もし「数量詞+の+名詞」の使い方も学習者に提示するのであれば、「その三冊の本が机の上にある」、「一匹の猫が箱の中にいる」、「その四つのリンゴをください」のような表現形式をどんなときに使うのか、また「机の上に本が三冊ある」、「箱の中に猫が一匹いる」、「リンゴを四つください」のような文とはどのような違いがあり、どのように使い分けるのかを説明する必要があると考え、分析した。

A：四月十五日に中国から留学生が二人来るよ。(作例)

B：あ、本当ですか。楽しみですですね。

A：その二人の留学生が来たら、歓迎パーティーでもやろう。

以上のように、最後のAの会話の内容であるが、「その留学生が二人来たら、歓迎パーティーでもやろう。」より「その二人の留学生が来たら、歓迎パーティーでもやろう。」でなくてはならない。つまり、「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」より「数量詞+の+名詞」のほうが適切な文脈もあることがわかる。また、会話場面の違いと表す意味の違いからも「数量詞+の+名詞」を教える必要さを論じた。

第4章では、同格の「の」の扱いについて分析した。同格の「の」の誤用率については、それぞれ一年生は70.70%、二年生は45.30%、三年生は47.50%、四年生は44.55%である。調査データからわかるように、中・上級レベルになっても誤用が減らず、同格は中国語母語日本語学習者にとって間違いやすい「の」の一つの用法であることがわかった。

本章はまず、同格の定義について日本語文法書をまとめ、同格の形式は「N1N2」、「N1というN2」、「N1のN2」の三つのタイプになるとした。

三つのタイプの同格をめぐって、特に「N1のN2」と「N1N2」を中心に、「の」の誤用について分析した。日本語の場合、初級の教科書に提示された「N1のN2」だけではなく、ほかに「N1というN2」、「N1N2」の同格形式もあることがわかった。しかし、「N1というN2」の形は中国で作成された教科書では、同格というふうに扱われていないようである。また「N1N2」の同格表現について、中級・上級になると、例文しか出ておらず、説明もない。これが学習者がなかなか習得しにくい原因の一つであると考えられる。教科書にある同格に関する説明を参考にしながら、その提示の不十分な点を指摘した。

第5章では、「名詞」と「ナ形容詞」を中心に、「の」の誤用を分析した。周知のように、「*おいしいの食べ物」、「*可愛い女の子」、「*暑いの日」のようなイ形容詞が名詞を修飾する場合、中国語母語日本語学習者は習慣的にその後ろに助詞の「の」をつける誤用がしばしば見られるが、その誤用率はそれぞれ一年生は 11.46%、二年生は 8.12%、三年生は 4.00%、四年生は 2.73%であり、誤用が減少しているのがわかる。

しかし、「ナ形容詞」の場合、各学年の誤用率はそれぞれ一年生は 28.03%、二年生は 27.78%、三年生は 30.00%、四年生は 30.00%である。一年生から四年生まで、その誤用率はほとんど変わっていないことがわかる。なぜ学年別において、「ナ形容詞」は「イ形容詞」との誤用率がこんなに異なるのか、その活用及び教科書に現れる「ナ形容詞」をまとめ、分析した。

中国語では、形容詞が名詞を修飾する場合、必ず「的」がつく。日本語のように形容詞に「イ形容詞」と「ナ形容詞」に分かれていない。そのため中国語母語日本語学習者にとって、形は名詞に近いが、用法が違うナ形容詞は覚えるのも大変であり、さらにナ形容詞と名詞の両方の品詞を持つ語は習得しにくい。第5章では「名詞」と「ナ形容詞」の境界線について、「ナ形容詞」も「名詞」も両方の品詞を持つ語、「ナ形容詞」の名詞的扱い方、「名詞」のナ形容詞的扱い方（「ナ形容詞+な+名詞」、「ナ形容詞+の+名詞」、「名詞+な+名詞」）で詳しく論じた。

第6章では、主格の「が」・目的格の「を」を表す助詞を「の」で表す場合において、日本語学習者はどのように主格や目的格を表す助詞と連体助詞を認識しているのかを考えた。

「の」から「が」への誤用について、以下のようなことが考えられる。①中国語母語日本語学習者は「の」を使用するより、「が」のほうを用いやすいようである。教科書を調べたところ、中国の大学で主に使用されている『新編日語』、『総合日語』、『標準日本語』には「が」と「の」の使い分けについての詳しい説明がなく、入れ替えが可能であると記載されているだけである。②日本語学習者が「動詞連用形+名詞」から作られた複合名詞が習得できていない。③教科書において、「動詞連体形+名詞」についての文法説明がされているが、「動詞連用形+名詞」の形についての文法説明がされておらず、一つの単語として提示されているだけである。日本語学習者は正しい使い分けができず、混用していることが考えられる。

「動詞連用形＋名詞」は、「動詞連体形＋名詞」と異なり、通常の形ではないため、中国語母語日本語学習者には習得の難しい項目である。教科書では「動詞連用形」からできた名詞について、その形成過程の説明はなしに、熟語つまり一語（名詞）として教えている。それに「泣き声」と「泣く声」とは形が似ているため、日本語学習者が混乱しやすい。「泣き声」の「泣き」は「泣く」の連用形であるため動詞とみなし、「の」でなく「が」を入れると考えられる。

また、「の」から「を」への誤用の場合、日本語学習者にとって「～の名詞をする」という形より、「～を動作名詞する」という型に慣れているため、サ変動詞の前に「を」を用いることが多いと思われる。目的語を表す場合、助詞の「を」を用いる。しかし、目的語の共存が許されないとき、「を」ではなく「の」が用いられる。このような点も学習者を混乱させる原因の一つだと考えられる。

「荷作りする」→「郵便袋を荷作りする」→「*郵便袋（を）荷作り」

サ変動詞については、「を」の位置が可変であるため、以上の誤用につながるのではないかと考えられる。

第7章では、「N1のN2の…のN」の形から「の」と「的」の誤用を分析した。教科書の「の」に関する説明から、「の」が中国語の「的」に相当すると解説されるか、または簡単な例文が出される場合が多いことがわかった。名詞がいくつか連続で現れる場合、その名詞と名詞の間のすべてに「の」をつけなければならないという説明が提示されていない。

アンケート調査から、連続の「の」については以下の傾向が見られる：

- I. 日本語の文を中国語に訳すときに「の」をそのまま「的」に訳すか、また中国語の言語習慣の影響を受け、焦点におかれる語の前のみ「的」をつけるという二つのパターンに分かれる。つまり「の」をそのまますべてを「的」に訳すこともあれば、「の」を訳す必要はないと判断され、訳さないこともある。
- II. 「の」を無視し、全然訳されない部分もあるが、中国語の「的」は日本語の「の」と

異なり、日本語は名詞がいくつか続いて現れても、その名詞の間に「の」を入れなければならないのに対し、中国語では「的」を入れなくても、意味の理解に支障が出ない。

- Ⅲ. 教科書に提示されたように、「の」が「的」に相当するという解説については、学習者により理解がそれぞれ異なる。簡単に「の」が「的」に等しいと思い、そのまま「的」にする傾向がある。また日本語では「の」をつけなければならないが、中国語では文脈によって省略されることが多いため、「の」を避ける傾向がある。
- Ⅳ. 図 10～図 12 (P147-148 を参照) の連続の「の」に対し、「的」が一つに訳される比率はそれぞれ図 10 は 44.85%、図 11 は 48.66%、図 12 は 44.26%であり、二つに訳される比率はそれぞれ図 10 は 44.33%、図 11 は 45.37%、図 12 は 54.31%である。ほとんど二つのパターンが五割近くを占めていることがわかった。アンケート調査のデータから、日本語文の「の」の数に対して、その中国語訳においては「的」が「の」に対応して現れず、任意的であることが分かった。

以上の四点をめぐって、日本語の「の」が複数あるとき、中国語の「的」は中心語（被修飾部）の前につく場合、限定語（修飾部）の後につく場合、使用されない場合の三つあることから、「の」と「的」の違いを論じた。

8.3 日本語教育への示唆

本研究は日本語教育の視点から中国語母語日本語学習者の日本語習得過程における「の」の誤用を、アンケート調査による考察及び教科書の分析を通して見てきた。

調査のデータから、日本語学習者は「の」の用法について、習得している部分としていない部分があることがわかった。母語の「的」の影響を受けていることも考えられるが、前述のように、中国語母語日本語学習者の典型的な誤用の一つとして挙げられてきた「イ形容詞」の誤用率が低いことから、母語の影響だけでは説明できない場合が多々見られる。

今まで、各章で分析してきたように、その原因の一つは学習者の使用している教科書の「の」に関する説明が不十分であることが挙げられるが、教える側の指導も大切であると考える。

本論文では日本語教育における「の」の提示及び指導について、考慮すべき点の提案を試み、今後の日本語教育に役に立てれば幸いである。

I. 教科書の提示について

中国の日本語教育の現場では、文法的な指導が主に行われている。日本語学習者にとって、日本語の文法つまり仕組みを理解することは、日本語の運用能力を高める重要な手段であるといえる。母語の中国語との語順の違い、中国語にはない動詞・形容詞の活用、及び助詞の使い方などは習得しにくいところである。本研究で重点的に論じてきた助詞の「の」はその一つである。

日本語教育の現場で様々な文法項目が十分に取り入れられているかどうかは、学習者がこれらの文法項目を十分に理解し運用することができるかどうかにかかわっていると思われる。どの国の学習者でも第二外国語を習得する場合、母語の影響を受けることがある。つまり、教科書においては、母語との関係で説明する場合は、慎重にすべきであると考えられる。

中国の大学で使用されている教科書を調べたところ、日本語の「の」は中国語の「的」に相当するというふうに説明されているのがほとんどである。教科書において助詞の説明や練習などをまとめてみると、「の」に関する説明は簡単でそれほど重視されていないように見える。

ここで、教科書の「の」をより効果的に習得させるため、日本語の「の」は中国語の「的」に相当するという説明を見直すことを提案する。

II. 初級の学習者の指導について

アンケート調査のデータからわかるように、名詞が名詞を修飾する場合、日本語の「の」を義務的につけているようだが、その「の」が適切であったり不適切であったりとむらがあり、また「の」を抜かず場合もある。つまり、名詞と名詞の間に「の」がつくということとを十分に理解していない。

連体助詞の「の」は初級の早い段階に導入されている。「の」を速く覚えさせるため、「の」の説明に中国語の「的」が用いられることが多いようである。これは初級の学習者に日本語の「の」は中国語の「的」に等しいという認識を持たせてしまう。

中国の湖南テレビで毎週の土曜日の八時から放送されている「快樂大本營」という大変

人気のある娯楽番組がある。司会者のセリフに合わせて、「突如其来の惊喜」という字幕がついていた。観客は何の違和感も感じなかったし、普通に「的」と読み取っていただろう。つまり、日本語学習者が日本語を習う前に、すでに「の」は「的」と同一であるという認識を持っている。教えるほうとして、「の」は「的」に似ているというふうに指導するのではなく、その固定概念をなくさせることにも注意を払うべきかもしれない。

Ⅲ. 習得しにくい「の」の項目について

本論文では主に分析してきた項目について提言したい。

- ①第3章で述べたように、教科書には主に「名詞+が/を+数量詞(副詞的)」という形で学習者に提示され、指導が行われてきた。「数量詞+の+名詞」という形についての説明があまりない。数量詞を教える場合、「数量詞+の+名詞」を取り扱うべきである。
- ②同格については、第4章で述べたように、説明も少なく、あっても分かりにくいものであった。また毛莉(2015)にあるように、同格の形式は一つではなく、「N1のN2」、「N1N2」、「N1というN2」の三つのタイプがある。しかし教科書には詳しい説明が見当たらず、これも学習者の誤用率の高い一つの原因である。
- ③「名詞」と「ナ形容詞」が名詞を修飾するとき、前者が「ノ」を、後者が「ナ」をとるが、学習者は「ナ形容詞」に対し、名詞と同じような扱いをしている。これは、教科書の説明や単語表の提示に問題があると考えられる。これはイ形容詞より高い誤用率に表れている。学習者が理解しやすいように、ナ形容詞と名詞の二つの品詞をもっている単語を提示したほうがいいのではないだろうか。また「名詞な名詞」のような新しい日本語にも注目すべきである。
- ④名詞句の中で用いられる主格「が」と目的格「を」を表す「の」の使い分けの指導が必要である。
- ⑤「の」が連続する場合、中国語母語日本語学習者が「の」の連続使用を避ける傾向が見られる。

以上の①～⑤で言及したように、「の」の習得がいかに難しいことがわかる。「の」のアンケート調査の結果から、習得できている項目と習得できていない項目が明確となった。以上述べてきたように、習得の難しい項目については、教科書への提示や解説、さらに教

える側には導入や練習に、工夫が必要だと考える。

IV. 日本語での会話時の「の」の指導について

学習者の作文指導における「の」の訂正や指導も大切であるが、日本語教育の現場で、会話指導における「の」の誤用の指導も欠かせないと思われる。その場で誤用を意識させ訂正する指導が効果的であると考ええる。

8.4 本論文の問題点と今後の課題

本研究は日本語の「の」と中国語の「的」の違いを明らかにしたものである。教科書の「の」に関する提示の仕方の分析および学習者における「の」の理解や習得の現状について、アンケート調査を実施した。調査のデータを抽出し、教科書を参照しながら、誤用分析を行ってきた。誤用率の高い部分を主に論じたが、まだいくつか課題が残された。

- ①本論文で取り上げた教科書はアンケート調査で使用教科書の項目に記入してもらった中から、使用率の高い三冊を対象に、分析した。つまり、中国語母語日本語学習者が使用している全ての教科書をカバーできているわけではない。
- ②今回のアンケート調査は日本語を専攻する学習者で、12の大学を対象とし、一年生から四年生まで、初級・中級・上級に分けて行ったが、大学の間レベルの差や学習者の出身地などが考慮できていない。
- ③アンケート調査の問題において、イ形容詞とナ形容詞をそれぞれ問題Ⅰと問題Ⅱと別々の問題としたが、今後イ形容詞とナ形容詞を同じ問題の選択肢に入れてまた異なる視点から分析したいと考える。
- ④穴埋め問題の四番目の部分について、アンケート調査の問題文においてより工夫することにより、さらに詳細が分析できたと考える。前述のように、「箱の中に猫がいます」などのような「存在句」と混乱させないように問題文を設定し、もう一度データを取り、分析しようと考えている。今後の課題としたい。

⑤名詞とナ形容詞の分析について、教科書の提示や辞書に載っているナ形容詞の形も様々であり、名詞を修飾するとき「ノ」をとるか「ナ」をとるかは複雑な問題で、第5章の内容のさらなる考察が必要だと思われる。今後この部分をさらに分析していきたい。

⑥連続の「の」の部分について、中国語の「的」が任意的で、本研究では三つにわけて説明してみたが、まだ説明できていないところがあり、「の」との関連が大きな課題である。学習者の誤用も多い。どのように連続の「の」の正しい使用を教えればいいのかを続けて研究していきたい。

⑦中国語の「的」について、前後の語の関係やその意味により、「的」がつくかつかないかが異なってくる。日本語の「の」は名詞が名詞を修飾するとき、義務的につく。この点について、アンケートの9番目に関して、日本語の「の」との関連をもっと明確にする必要があると思われる。

今後の課題として、以上の点を取り入れ、研究を進めたい。

参考文献

日本語文献：

- 青木直子・尾崎明人・土岐哲（2001）『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 青柳 宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』南山大学学術叢書〈言語編〉第 43 巻 ひつじ書房
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2002）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵 功雄（2009）『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 井口厚夫・井口裕子（2004）『日本語文法整理読本（解説と演習）』バベル・プレス
- 岩淵 匡（2000）『日本語文法』白帝社
- 于 飛（2010）「日本語助詞「の」と中国語助詞「的」の比較対照研究—連体修飾構造と用法」『人文研究』神奈川大学人文学会編 172 号， pp. 81-114
- 于飛（2011）「中国語構造助詞「的」の歴史的変遷—表記と構造から考える—」『言語と文化論集』神奈川大学大学院外国語学研究科第 17 号， pp. 149-168
- 王婉瑩（2003）『現代日語教学基礎』世界知識出版社
- 王娟（2012）「日本語の接尾辞「的」について——中国語の「的」との関係」『比較文化研究』日本比較文化学会 1 月号， pp. 75-87
- 王淑琴（2000）「接尾辞「的」の意味と「的」が付く語基との関係について——名詞修飾の場合」『日本語教育』日本語教育学会 104 号， pp. 50-59
- 大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房
- 岡崎敏雄（1996）『日本語教育の教材』株式会社アルク
- 小川郁夫（2002）『中国語をマスターするための中国語文法』白帝社
- 奥津敬一郎（1969）「数量的表現の文法」『日本語教育』日本語教育会第 14 号， pp. 42-60
- 奥津敬一郎（1983）「数量詞移動再論」『人文学報』東京都立大学人文学部第 160 号， pp. 1-24
- 奥津敬一郎（1993）『「ボクハ ウナギダ」の文法——ダとノ——』くろしお出版
- 奥津敬一郎（1996a）「数量詞移動 その一」『日本語学』明治書院第 15 巻第 1 号， pp. 112

奥津敬一郎 (1996b) 「数量詞移動 その二」『日本語学』明治書院第 15 巻第 2 号, pp. 95

—105

奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究——日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に』風間書房

小田 勝 (1993) 「「の」助詞非表出の同格構文をめぐって」『国語研究』国学院大学国語研究会第 56 号, pp. 37-48

石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店

カツケンブッシュ寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲編 (1992) 『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会

加藤好崇・新内康子・平高史也・関正昭 (2013) 『日本語・日本語教育の研究——その今、その歴史』スリーエーネットワーク

金澤裕之 (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房

加納希美 (2013) 「“的”を伴う時量修飾構造のシンタクスと意味」『中国語文法論叢』木村英樹教授還暦記念論叢刊行会編, pp. 255-275

神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタクス」『言語』大修館書店 Vol. 6 No. 9, pp. 83-91

北澤尚・李金蓮 (2009) 「日本語の接尾辞「的」に対応する中国語表現について」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』東京学芸大学紀要出版委員会 I 第 60 号, pp. 161-176

北原博雄 (2001) 「いわゆる遊離数量詞の文法」『国文学解釈と教材の研究』学燈社 2 月号, pp. 127-130

木村英樹教授還暦記念論叢刊行会編 (2013) 『中国語文法論叢』白帝社

木山三佳・多田恵・中川仁・吉田雅子 (2014) 『中国・台湾における日本語教育をめぐる研究と実践』東方書店

金銀珠 (2009) 「現代語の連体修飾節における助詞の「の」」『日本語科学』国立国語研究所第 25 号, pp. 23-42

金 春子 (1991) 「中国語の助詞「的」と日本語の助詞「の」の同異点について」『福井工業大学研究紀要』福井工業大学第一部 第 21 号, pp. 97-101

国金海二・木村秀次 (1994) 『研究資料漢文学——語法・句法 漢字・漢語』第十巻 明治書院

久野 暉 (1989) 『談話の文法』大修館書店

- 久野 暲 (1994) 『日本文法研究』大修館書店
- 栗原千里 (2013) 「「是…的」構文已然義の関係について」『桜文論叢』日本大学法学部,
pp. 89
- 刑志強 (1999) 「日本語の「の」と中国語の「的」との比較研究」『北見大学論集』北海学
園北見大学学術研究会第 22 巻第 1 号, pp. 73-99
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房
- 小池ユリ (1995) 「中国語を母語とする学習者の誤用をめぐって—一格助詞を中心に—」『日
本語の研究と教育』窪田富男教授退官記念論文集, pp. 426-427
- 国語学論集編集委員会 (1979) 『国語助詞助動詞論叢』桜楓社
- 国際交流基金・鈴木忍 (1978) 『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法 I —助詞の諸問
題 1』凡人社
- 国立国語研究所 (2001) 『日本語教育のための文法用語』財務省印刷局
- 此島正年 (1973) 『国語助詞の研究』桜楓社
- 小林幸江 (1996) 「同格をめぐって」『留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学第
22 号, pp. 1-13
- 小林ミナ (1998) 『よくわかる教授法』アルク
- 小山 悟 (2006) 「連体修飾構造の習得における「の」の過剰使用—一格助詞仮説と準体助
詞仮説—」『九州大学留学生センター紀要』九州大学留学生センター第
15 号, pp. 41-50
- 近藤研至 (2005) 「AノBにおけるノの機能について」『文教大学国文』文教大学国文学会
第 34 号, pp. 1-17
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 阪田雪子編著・新屋映子・守屋三千代著 (2003) 『日本語運用文法—文法は表現する—』
凡人社
- 迫田久美子 (1999) 「第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用」『第 2 言語として
の日本語の習得に関する総合研究』科学研究補助金研究成果報告書,
pp. 327-334
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 定延利之 (1999) 『よくわかる言語学』アルク

- 真田信治 (1999) 『よくわかる日本語史』 アルク
- 朱徳熙 (1978) 「“的”字結構和判断句」について——中国語の格・複合名詞句及び疑似分裂文『人文研究』大阪市立大学文学部, pp. 54-66
- 徐昌華 (1983) 「中日両語の連体修飾構造の対応関係への一試論」『人文学報』東京都立大学人文学部, pp. 25-36
- 秦明星・丸田忠雄 (2006) 「第二言語習得と母語の影響について—年少学習者の助詞「の」の過剰使用と過少使用」『山形大学紀要人文科学』山形大学第16巻第1号, pp. 100-114
- 秦明星・丸田忠雄 (2007) 「「の」の過剰使用と「的」の影響—1音節と2音節形容詞の調査—」『山形大学紀要・人文科学』山形大学第16巻第2号, pp. 48-56
- 鈴木康之 (1987) 「「名詞の一名詞」というとき」『国文学』至文堂第52巻第2号, pp. 6-16
- 杉村博文 (1980) 「「の」「のだ」と「的」「是……的」」『大阪外国語大学学報文化篇・言語編』大阪外国語大学第49号, pp. 75-89
- 杉村博文 (1997) 「名詞性連体修飾語と構造助詞“的”」『大河内康憲教授退官記念中国語学論文集』東方書店, pp. 279-302
- 孫淑華 (2004) 「中国語の「的 (de)」と日本語の「の」の対応と非対応」『鳥取大学大学教育総合センター紀要』鳥取大学第1号, pp. 1-6
- 高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子 (2004) 『新・はじめての日本語教育』アスク出版
- 高橋織恵 (2004) 「連体修飾構造の習得過程に関する研究概観: 「の」の過剰使用と脱落を中心に」『言語文化と日本語教育』増刊特集号, pp. 147-166
- 高橋葉子 (2006) 「「N1のN2」名詞句における「の」の脱落—N2が漢語動名詞でN1がその項である用例に注目して—」『日本語文法』日本語文法学会第6巻第2号, pp. 98-115
- 建石 始 (2013) 「日中両言語における数量表現の分布と意味・機能—「N+の+数量詞」「数量詞+の+N」「副詞句としての数量詞」を中心に—」『中国語話者のための日本語教育研究』中国語話者のための日本語教育研究会編第4号, pp. 1-17

- 田畑佐和子・原善編（2001）『現代中国女性文学傑作撰 1』鼎書房
- 田畑佐和子・原善編（2001）『現代中国女性文学傑作撰 2』鼎書房
- 張佩霞（1998）「用言に続く中国語の「的」と日本語の「の」——いわゆる準体助詞としての用法を中心に」『語文論叢』千葉大学文学部国語国文学会, pp. 87-102
- 張佩霞（2002）「含意される格関係から見る日本語の連体助詞「の」」『言語文化論叢』千葉大学外国語センター第 11 号, pp. 73-80
- 張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例—』スリーエーネットワーク
- 張麟声（2009）「名詞にかかる連語的修飾構造の日中対照研究—「の」と“的”の使用の有無を中心に—」『言語文化学研究 言語情報編』大阪府立大学人間社会学部言語文化学科第 4 号, pp. 23-36
- 張麟声（2011）「日本語を母語とする中国語学習者の「的」の過剰使用について（1）—連体修飾マーカの日本語中国語双方向習得研究の立場から—」『言語文化学研究 言語情報編』大阪府立大学人間社会学部言語文化学科第 6 号, pp. 1-15
- 張麟声（2012）「日本語の「の」と中国語の「的」における双方向習得研究（1）—修飾部が指示詞であるなどの 3 ケースを例に—」『中国語話者のための日本語教育研究』中国語話者のための日本語教育研究会編第 3 号, pp. 1-17
- 寺村秀夫他編（1982）『外国語との対照Ⅱ』講座日本語学 11 明治書院
- 寺村秀夫他編（1982）『外国語との対照Ⅲ』講座日本語学 12 明治書院
- 寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』くろしお出版
- 寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅱ 言語学・日本語教育編』くろしお出版
- 寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人（1998）『ケーススタディ日本文法』おうふう
- 東郷克美・高橋広満編（1999）『近代小説異界を読む』双文社出版
- 時枝誠記（1950）『日本文法 口語篇』岩波書店
- 時枝誠記（1954）『日本文法 文語篇』岩波書店
- 時枝誠記（1969）『日本語文法 文語篇』岩波書店
- 中川正之（2005）『漢語から見える世界と世間』岩波書店
- 成瀬武史（1972）「名詞句構造の翻訳における連結辞としての「的」、「の」、「の」の用法と意味」『明治学院論叢』明治学院大学文経学会第 31 号（通号 199）,

pp. 53-80

- 西蔭浩子 (1993) 『日本語教室の窓から』 研究者出版
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句——』 ひつじ書房
- 日本語教育学会 (1982) 『日本語教育辞典』 大修館
- 日本語文法学会編 (2014) 『日本語文法事典』 大修館書店
- 縫部義憲 (2001) 『日本語教師のための外国語教育学』 風間書房
- 野口正之 (1972) 「漢語助詞「地」「底」の区別と「的」との関係」『大東文化大学紀要』
大東文化大学第 10 号, pp. 199-212
- 野口博志編集 (1997) 『「中国文学を味わう」報告書』 アジア理解講座 国際交流センター
年度第 3 期
- 野田尚史 (1991) 『はじめての人の日本語文法』 くろしお出版
- 芳賀綏 (1962) 『日本文法教室』 東京堂
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』 岩波書店
- 羽根田知子 (1994) 「同格語の範疇変化について」『独逸文学』 関西大学独逸文学会第 38
号, pp. 38-56
- 藤井省三 (1991) 『中国文学の百年』 新潮社
- 藤原雅憲 (1999) 『よくわかる文法』 アルク
- フェリス女学院大学 (2009) 『日本語教育の現場——第 7 回: フェリス女学院大学日本文
学国際会議——』 フェリス女学院大学
- 黄永中 (1985) 「中日言語の対応関係——「的」と「の」の異同について」『長崎総合科学
大学紀要』 長崎総合科学大学第 26 巻第 1 号, pp. 61-65
- 彭飛 (1991) 『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』 和泉書院
- 方美麗 (2004) 「中国語の「的」と日本語の「の」の意味用法の考察—日中対照研究—」
『外国語教育論集』 筑波大学外国語センター第 26 号, pp. 99-103
- 益岡隆志・田窪行則 (1996) 『基礎日本語文法』 くろしお出版
- 三浦つとむ (1981) 『日本語の文法』 勁草書房
- 三上 章 (1963) 『日本語の構文』 くろしお出版
- 三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意 (上)」『言語』 大修館書店第 27 巻第
6 号, pp. 86-95

- 三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意 (中)」『言語』大修館書店第 27 卷第 7 号, pp. 94-102
- 三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意 (下)」『言語』大修館書店第 27 卷第 8 号, pp. 104-113
- 村上春樹 (1990) 『村上春樹全作品 1979～1989③』短編 I 講談社
- 村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森♁』講談社文庫
- 村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森♂』講談社文庫
- 毛瑩 (2011) 「日本語の連体修飾句に関する習得研究概観」『比較社会文化研究』九州大学第 31 号, pp. 59-66
- 毛莉 (2014) 「中国人日本語学習者における「の」の誤用について」『国文白百合』第 45 号, pp. 88-104
- 森岡健二、宮地裕、寺村秀夫、川端善明 (1982) 『外国語との対照 I』講座日本語学 10 明治書院
- 森田良行 (1987) 『誤用文の分析と研究——日本語学への提言——』明治書院
- 森田良行 (1990) 『日本語学と日本語教育』凡人社
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 森田良行 (2008) 『外国人の誤用から分かる日本語の問題』明治書院
- 森山 新 (2008) 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』シリーズ言語学と言語教育第 16 巻 ひつじ書房
- 森山卓郎 (2000) 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
- 山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版
- 山田孝雄 (1984) 『日本文法学概論』宝文館出版
- 有精堂編集部 (1993) 『短編の愉楽④近代小説のなかの恋愛』有精堂出版社
- 楊凱榮 (2011) 「日中連体修飾節の相違に関する考察」『漢日語言対比研究論叢 2』北京大学, pp. 1-32
- 吉川武時 (1999) 『日本語文法入門』株式会社アルク
- 李蓮花・劉麗芸 (2008) 「助詞の「の」と「虚詞」の「的」」『岩大語文』岩手大学語文学会第 13 号, pp. 44-49
- 林翠芳 (2003) 「中国語との対応関係から見た日本語の” 的 ” の意味機能」『言語文化研究』立命館大学国際言語文化研究所 14 卷第 2 号, pp. 219-225

中国語文献：

- 袁毓林（1995）「謂詞隱含及其句法後果」『中国語文』第4期，pp. 241—255
- 王婉莹（2003）『现代日语教学基础』世界知识出版社
- 王珏（2001）『現代漢語名詞研究』華東師範大學出版社
- 太田辰夫著・蔣紹愚・徐昌華譯（1987）『中国語历史文法』北京大學出版
- 王力（1943）『中国現代語法』商務印書館
- 王力（1954）『中国語法理論』中華書局
- 胡明揚（1981）「北京話的語氣助詞和嘆詞」『中国語文』第五期
- 朱德熙（1956）「現代漢語形容詞研究」『語言研究』第一期
- 朱德熙（1961）「說“的”」『中国語文』第12号，pp. 1—15
- 朱德熙（1978）「“的”字結構和判斷句」『中国語文』第1・2期
- 朱德熙（1982）『語法講義』商務印書館
- 朱德熙（1985）『語法答問』商務印書館
- 朱德熙（2010）『語法分析講稿』商務印書館
- 朱德熙（1989）『語法叢稿』上海教育出版社
- 邵敬敏（2001）『現代漢語通論』上海教育出版社
- 邵敬敏、任芝鏞、李家樹、稅昌錫、吳立紅（2013）『汉语语法专题研究』北京大學出版社
- 潘力・馮勝利（2008）『当代語言學理論和漢語研究』商務印書館
- 石定栩（2008）「“的”和“的”字結構」『当代語言學』第10卷，pp. 298—307
- 石毓智（2000）「論“的”的語法功能的統一性」『世界漢語教學』第一期，pp. 16—27
- 石毓智（2000）『語法的認知語義基礎』江西教育出版社
- 中學漢語編修室（1956）『“暫擬漢語教學語法體系”簡述』人民教育出版社
- 趙金銘（1997）『漢語研究與對外漢語教學』語文出版社
- 張元任（1980）『漢語口語語法』商務印書館
- 張靜（1987）『漢語語法問題』中國社會科學出版社
- 張伯江・方梅（1996）『漢語功能語法研究』江西教育出版社
- 張敏（1998）『認知語言學與漢語名詞短語』中國社會科學出版社
- 張敏（2008）「自然句法理論與漢語語法象似性研究」『当代語言學理論和漢語研究』商務印書館

- 張斌 (1998) 『漢語語法學』 上海教育出版社
- 張斌 (2005) 『現代漢語語法十講』 復旦大學出版社
- 丁声樹等 (1961) 『現代漢語語法講和』 商務印書館
- 湯廷池 (1977) 『國語變形語法研究』 學生書局
- 馬真 (2004) 『現代漢語虛詞研究方法論』 商務印書館
- 馮勝利 (1997) 『漢語的韻律・詞法與句法』 北京大學出版社
- 村上春樹林少華譯 (2008) 『挪威的森林』 譯文出版社
- 楊成凱 (1996) 『漢語語法理論研究』 遼寧教育出版社
- 楊德峰 (1999) 『漢語與文化交際』 北京大學出版社
- 楊德峰 (2004) 『漢語的結構和句子研究』 教育科學出版社
- 楊德峰 (2008) 『日本人學漢語常見語法錯誤積疑』 商務印書館
- 楊德峰 (2009) 『對外漢語教學核心語法』 北京大學出版社
- 黎錦熙 (1992) 『新著國語文法』 商務印書館
- 陸儉明 (1963) 「“的”的分合問題及其它」 『語言學論叢』 第5號
- 陸儉明 (1980) 「漢語口語句法里的易位現象」 『中國語文』 第一期
- 陸儉明 (1993) 『陸儉明自選集』 河南教育出版社
- 陸劍明 (2013) 『現代漢語語法研究教程』 北京大學出版社
- 陸儉明・馬真 (1985) 『現代漢語虛詞散論』 北京大學出版社
- 劉月華等 (2004) 『實用現代漢語語法』 商務印書館
- 呂叔湘 (1942) 『中國文法要略』 商務印書館
- 呂叔湘 (1980) 『現代漢語八百詞』 商務印書館
- 呂叔湘・朱德熙 (2013) 『語法修辭講話』 中國青年出版社

引用資料

- 東京外國語大學留學生日本語教育センター(1998) 『初級日本語』 凡人社
- 國際交流基金日本語國際センター(2000) 『日本語初歩』 凡人社
- スリーエーネットワーク編(2003) 『みんなの日本語・初級Ⅰ』 スリーエーネットワーク
- 周平・陳少芬(2009) 『新編日語1』 上海外語教育出版社
- 彭広陸・守屋三千代(2009) 『総合日語1』 北京大學出版社
- 中國人民教育出版社・日本光村圖書株式會社(2010) 『中日交流標準日本語・上』 人民教育

出版社

辞書

- 『岩波日中詞典』第二版（2003）倉石武四郎・折敷瀬興 商務印書館
『現代漢語大詞典』（2010）現代漢語大詞典編委会 上海辞書出版社
『新華字典』（2011）商務印書館編 商務印書館
『新明解国語辞典』第七版（2012）山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・
上野善道・井島正博・笹原宏之 三省堂
『大辞林』第三版（2006）松村明 三省堂
『中日大辞典』第三版（2010）愛知大学中日大辞典編 大修館書店

例文出典

中国語

- 王蒙（1980）『海的梦』（『海の夢』略「海」）杉本達夫訳
蘇童（1993）『刺青时代』（『刺青時代』略「刺」）竹内良雄訳
蘇童（1993）『嫵的故事』（『嫵の物語』略「嫵」）堀内利恵訳
池莉（1987）『烦恼人生』（『生きていくのは』略「生」）市川宏訳
趙樹理（1943）『小二黑结婚』（『小二黒の結婚』略「小」）小野忍訳
鉄凝（1999）『第十二夜』（『第十二夜』略「第」）久米井敦子訳
莫言（1985）『枯河』（『枯れた河』略「枯」）井口晃訳
劉心武（1977）『班主任』（『クラス担任』略「ク」）工藤静子、西脇孝夫訳
蘆新華（1978）『伤痕』（『傷痕』略「傷」）工藤静子、西脇孝夫訳

日本語

- 赤坂憲雄（2001）『日本のこころ』略「日」講談社
芥川龍之介（1919）『蜜柑』（『橘子』略「蜜」）文潔若訳
蛭川邦智子（2004）『我が家の保存食』略「我」ティーケイシー出版
こうむらゆみか（2000）『結ばれた約束』（『此生有約』略「結」）肖厚国訳
尚文産商堂（2008）『初恋の彼女』（『初恋的女友』略「初」）肖厚国訳
尚文産商堂（2008）『幻の公園』（『夢幻公園』略「幻」）肖厚国訳

- 城井春臣 (2009) 『図書館の赤い糸』(『图书馆的红线』略「図」) 肖厚国訳
- 鈴木庄亮 (2002) 『シンプル衛生公衆衛生学』略「シ」南江堂
- 高田崇史 (2002) 『QED一式の密室』略「Q」講談社
- どくだみ (2009) 『青春の残像』(『青春的记忆』略「青」) 肖厚国訳
- 富山詩曜・ミゲール・リーヴァスミクー (1997) 『E メール English の鉄則』略「E」洋販
出版
- 夏目漱石 (1979) 『門』陳徳文訳
- 萩栄一 (2009) 『新雪』(『新雪』略「新」) 肖厚国訳
- 莫邦富 (1999) 『蛇頭』略「蛇」新潮社
- 横山理吉 (2005) 『経ヶ岬』略「経」桜門書房

本論文のもととなった発表論文

第2章

①「中国人日本語学習者における「の」の誤用について——「名詞+（の/的）+名詞」を中心に——」『国文白百合』白百合女子大学国語国文学会 第45号 2014年, pp. 88-104

②「中日辞書における中国語の「的」と日本語の「の」」『開封教育学院学報』開封教育学院 第35巻第6号（通136号）2015年, pp. 26-27

口頭発表

第六回漢日対比語言研究会大会 中国・北京 中国人民大学 2014年8月20日

テーマ：「日本語教育の視点から見る日本の「の」と中国語の「的」——中国人日本語学習者の14種類の「の」の誤用を中心に——」

第3章

「中国人日本語学習者に対するアンケート調査の分析——「数量詞+の+名詞」と「名詞+が+数量詞（副詞的）」——」『国文白百合』白百合女子大学国語国文学会 第46号 2015年, pp. 94-105

第4章

「日本語教育における同格の「の」の扱い」『日本学研究』福山大学・貴州師範大学日本学研究センター・白帝社 第6号 2015年, pp. 88-109

第5章

「日本語教育の視点から見る「の」の誤用について——「名詞」と「ナ形容詞」を中心に——」『日本学研究』福山大学・貴州師範大学日本学研究センター・白帝社 第8号 2016年掲載される予定である。

第7章

「日本語教育の視点から見る中国語の「的」と日本語の「の」——「N1のN2の…のN」の形を中心に——」『日本語教育方法研究会誌』日本語教育方法研究会 Vol. 22 No. 1 2015年, pp. 28-29

口頭発表

日本語教育方法研究会大会 日本・東京 学習院大学 2015年3月28日

テーマ：「日本語教育の視点から見る中国語の「的」と日本語の「の」——「N1 のN2
の…のN」の形を中心に——」

アンケート調査用紙

白百合女子大学国語国文科言語・文学専攻日本語教育博士後期課程一年の毛莉と申します。本日はご多忙の中ご協力いただきまして誠にありがとうございます。本調査の内容は本研究のみに使用し、個人情報に関しては厳密に保護することをお約束いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

(第一部分)

请在符合你的选项上画圈：

- I. 学习日语的时间： A. 未满1年 B. 1--2年 C. 2--3年 D. 3年以上
- II. 你已取得的最高日语能力等级是：A. N4 B. N3 C. N2 D. N1
- III. 你学习日语所用的主要教材：
- A. 新编日语 B. 综合日语 C. 标准日语 D. 其他_____
- IV. 你目前在（ 中国 日本 ）。籍贯_____（省、市、区）

(第二部分)

一. 请在下面括号里填入助词，不需要的的话请打×。

1. このかばんは田中さん（ ）妹（ ）赤い（ ）かばんに似ていますね。
2. …村（ ）入口（ ）門（ ）前には一本（ ）木が生えていました。
3. 田中さん（ ）腕（ ）中（ ）赤ちゃん（ ）鳴き声が気になります。
4. 田中さん（ ）会社（ ）同僚（ ）鈴木さんが病気になりました。
5. この男に出会ったことが、私（ ）人生（ ）悲劇です。
6. 父は息子のために、二つ（ ）緑色（ ）郵便袋（ ）荷作りをしてやりました。

二. 请将以下中文翻译成日文。

1. 我们学校明天休息。
2. 我房间的窗台上有两本书。
3. 田中是人民大学的日语老师。
4. 有乐町田中的弟弟太郎是很有名的人。
5. 这就是妈妈的双手，妈妈的青春。

三. 请将划线部分的日文翻译成中文。

1. 2008年10月25日には麻生太郎内閣総理大臣の記者会見の中継を放送します。
2. 田中さんは自分のシャツの白い袖口を見て驚きました。
3. 研究室の先輩のノートを参考にしました。

四. 请选出你认为划线部分最合理的日文翻译，并说明理由。

经日前的实验，证实了松下公司的手机性能提高了12.5%。

- A. …、パナソニック社の携帯電話の性能の12.5%の向上を確認した。
- B. …、パナソニック社が携帯電話の性能を12.5%向上させたことを確認した。
- C. …、パナソニック社の携帯電話の性能が12.5%向上したことを確認した。

理由：

2013年9月

ご協力ありがとうございました。

謝 辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるにあたり、終始あたたかいご指導と激励を賜りました指導教官である足立さゆり教授に心より感謝申し上げます。白百合女子大学大学院入学当初から三年間にわたり、時に応じて、厳しくご指導いただいたこと、またやさしく励ましてくださったことを通して、私自身の至らなさを実感することができたことは今後の努力の糧になるものであります。また、同大学ではあたたかく見守っていただくとともに、多くのご支援とご指導を賜りました山本真吾教授、常盤智子教授に深く感謝しております。

西安外国語大学日本語学院母育新教授には、研究に向かう姿勢や研究に関する困難克服のための具体的な方策までていねいに教えていただきまして、心よりお礼申し上げます。

博士課程後期進学以前から現在にわたり多くのご支援とご指導を賜りました高橋博史教授、岩政伸治教授には深くお礼申し上げます。

学位論文審査において、貴重なご指導とご助言をいただいた六鹿豊教授、馬木浩二教授に心より感謝申し上げます。

論文を完成するにあたり、多大なる御指導、ご鞭撻をいただいた方々に、銘記して学恩に感謝申し上げます次第でございます。